
COBALT-SERIES
ハイスクール・オーラバスター
炎獄の
ディアーナ
(後編)
若木未生
集英社

世に髪切り魔が横行した。妖の者の仕わざだった。冴子は、剣司と弥峨によって、髪を切られ、かろうじて牙に助けられた。だが諒は全身に強い妖気を浴びて、瘴癘の発作が起きるほどのダメージを受けており、夏江の手厚い看護でなんとか生命を保っている。一方、忍の住むマンションには強固な結界が張ってあって、十九郎たちと連絡をとらせない。十九郎は結界を破るため亮介を説得した……。

恋を夢みる乙女のための小説誌!

[コバルト]
Cobalt

1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売

隔月刊ですので、お求めにくいこともあります。
あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

集英社



COBALT-SERIES

ハイスクール・オーラバスター

炎獄のディアーナ（後編）

若木未生

集英社

目次

炎獄のディアーナ（後編）

第二部

1 ディスタンス……20
2 遠い声……40
3 炎将……61
4 中和……82
5 結界……98
6 鏡像……116
7 封印……131
8 行方……150

第三部

1 錯綜……165
2 誤算……178
3 冴子……200
4 激震……215
5 浄火……232
6 亀裂……251
終章 明日へ……267
あとがき……272

鬼とも妖怪とも呼ばれ伝説に語られてきた人外の存在――〈妖の者〉が目立って活動するようになったのは、ここ十数年のことなのだという。

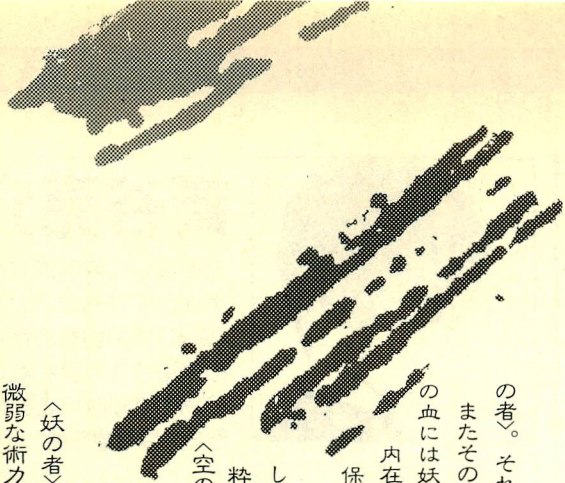
九百年の昔に彼らの天敵たる〈空の者〉との大戦に敗れて以来、〈妖の者〉の多くはなりをひそめ、世に出るのはごくわずかな残党のみであった。しかし現代に至り、妖者総帥「九那妃」復活の報が期待と確信をもって彼らのうちに流布され、それを刺激として〈妖の者〉は勢力を回復しつつあるのだ。

〈妖の者〉の形態は千差万別だが、共通する点が二つある。

一つは、本体が精神体であるということ。いま一つは、人を喰らうということ。彼らの多くは人間の身体にとり憑き、人の社会にまぎれてひっそりと生息する。

そして古より隠密裏に伝承された真理。人を喰らうのが〈妖〉であるならば、〈妖〉を喰らうのは〈空〉であると。

選ばれた血統の、選ばれた赤子の内にかぎり転生を為す〈空



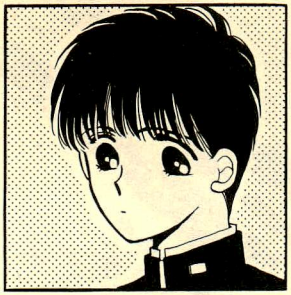
の者〉。それは神の降臨とさえ呼ばれる奇跡である。

またその血統を保ちつづけた一族を、斎伽の一族と呼ぶ。その血には妖者の「妖力」に対抗する超常能力「術力」の因子が内在し、一族の者は空者とはならずとも何らかの能力を保持した者、すなわち「術者」として空者に仕えていたと伝えられる。

しかし〈妖の者〉との大戦の後、一族の血は分かれ、純粋な血統はほぼ絶えたと言って良い。数百年にわたり〈空の者〉の降臨はなされず、術者の数は激減した。

そのような現代に、ただ一人転生した〈空の者〉がいる。空者総帥「伽羅王」、またの名を斎伽忍。弱冠十九歳にして一族の長を務める若者である。

〈妖の者〉の動きが活発になる一方、〈空の者〉に比べれば甚だ微弱な術力しか有さぬ術者数人が手中にあるのみという現状に、彼が何を思うか——うかがい知ることは、いかなる者にも許されなかった……



崎谷亮介（さきやりょうすけ）

おとなしく内向的な性格だが、実はとてつもない力を秘めた〈術者〉側の切札的存在。後輩の瑞穂（みずは）までが襲われた〈髪切り〉事件の解決に立ちあがるが、敵の力は想像を越える強さで…。

《術力について》ただひとりの中和能力者（オーラバスター）。術力、妖力を問わず無効化してしまう、特異な能力をもつが、自分の意志で制御することはできない。秘められた力は巨大で、これまでの中和行為は氷山の一角にすぎないらしい。感覚が非常に強く、『見えないはずのものを見る』力は〈空の者〉に匹敵するほど。一方で、功撃力、防御力ともに皆無。

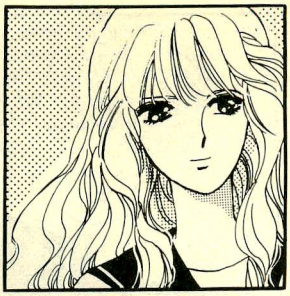


水沢涼（みずさわりょう）

亮介の親友。戦闘的な〈術力〉と能天気な性格がウリ（？）の〈術者〉。忍に代わって〈髪切り〉退治の作戦（プラン）を立てたが、事件の背後に剣司（けんし）がいることを知らず、絶体絶命の危機（ピンチ）に…。

《術力について》『動』のタイプの術者。運動能力にすぐれ、人間ばなれした走り、跳躍などをみせる。感覚は弱い。光剣を使う。すなわち、術力を剣のかたちで定着させることができる。手刀への応用も可能。剣からのプラズマで結界をはり、時に雷撃を起こす。さらに光剣を浄火に転じる（発火能力）ことも。剣の名〈朱雀〉は、斎伽忍の命名による。

七瀬冴子（ななせさえこ）



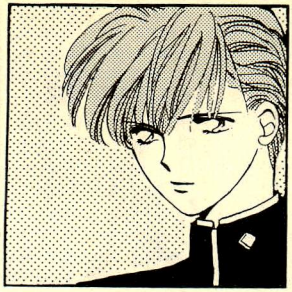
強気が専売特許の美少女で、回復系の能力を持つ〈術者〉。諒のたてた作戦（プラン）の読み違えで、〈髪切り〉に襲われる。そこへ現れた牙によって有無を言わさず忍のもとに連れ戻され…。

《術力について》『静』のタイプの術者らしいが、怪我の『癒し』と妖気の『浄化』は、彼女ならではの特殊能力。感覚は強い。防御力については不明。諒の結界を維持（たも）ったことはあるが、自ら結界を張った経験はない。

神原亜衣（かんばらあい）



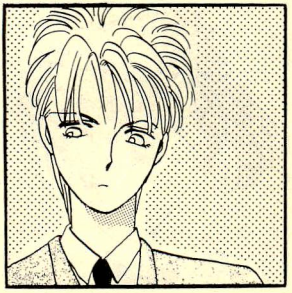
亮介の同級生（クラスメート）でＧＦ、〈術者〉ではないが事情に通じ、時に落ち込む亮介を励ます気丈な美少女。だが、度を越して瑞穂の心配をする亮介に反発して、ふたりは冷戦状態に…。



里見十九郎（さとみじゅうきゅうろう）

沈着冷静な参謀型の〈術者〉で、希沙良のフォロー役。彼のもつ〈発火能力〉が敵に有効なはずだったが…。今回の事件に際しての忍の言動には、どこか違和感を覚えている。

《術力について》『静』の術者。鋭い感覚をもつ。結界による防御を得意とするが、相手の結界を崩すなど、攻撃的な面もかねそなえる。彼の場合、結界も発火能力も、本質的にはすべて〈気〉の集中なので、そのために精神統制が必要となり、現在は九字や真言で自己暗示をかけている。術力の性質としては、従兄弟の希沙良と完全に対をなす。

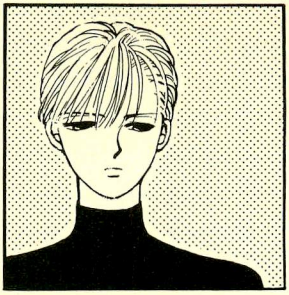


和泉希沙良（いずみきさら）

十九郎の従兄弟。〈術者〉のひとりで諒に匹敵する功撃力を持つ。奔放な性格だが、十九郎以外にはなかなか心を許さない。諒の作戦（ブラン）では、出番の必要なしと判断されたが…。

《術力について》『動』の術者。たぐいまれな運動能力をもつのは諒と同じである。特にスピードにおいて秀でる。感覚は弱い。手刀を使う。術力を両の手に集中させるということ。光剣のように、自分の身から離れたところに術力を定着させることはできない。結界は張れるが、動きを制限されるのでほとんど使わない。

牙（きば）



亮介たちが軽井沢で出会った謎の男。実は〈伽羅王（からおう）〉の側近〈使（つかい）〉である。姿は変幻自在で、忍の命令には絶対服従。だが、忍の異状を目のあたりにし、不安を覚えている…。

《術力について》〈空の者〉伽羅王の〈使〉であって、人間ではない。実体はあるが生命をもたず、伽羅王の術力によってその身を形成されている。ゆえに姿を自在に変形させる能力をもつ。戦闘能力は高く、我が身そのものを武器とするが、なによりも彼の力が最大限に発揮されるのは伽羅王の手中にある時である。

斎伽（さいが）　忍（しのぶ）



〈術者〉一族の若き総帥で、〈伽羅王〉が転生した現世ただひとりの〈空の者〉。一連の事件の背景を把握しているのは彼だけらしい…。

《術力について》空者総帥「伽羅王」として莫大な術力を有するが、その全貌はいまだ明かされていない。

イラスト／杜　真琴

炎獄のディアーナ（後編）

ざわざわと騒ぐのは空気。人の声。声。声。声。
うるさい。誰？
遠くから名を呼ばれている。まるで水中の叫び声。渦に巻かれて届かずに消えてゆく。
誰？
伝わらないのに、鼓膜を叩きつづけて、眠らせない。誰？
『死は解放』
ひどく美しい詩歌のように、その言葉は語られた。
それを口にした人物のことを、自分はよく知っている。
『そんな権利は認めない。おまえには、罪を贖う義務がある』
権利、なんて。
本当は、それに恋い焦がれているのは彼のほうだったくせに。
本当は、その言葉を欲しがっていたのは彼自身のくせに。
まるで憧れを語るような表情で、彼が言う。
『いつか誰もが裁かれる。……それだけは、あらゆる者に、わけへだてなく許された、たった

ひとつの……』

逃げたかったくせに。泣きたかったくせに。誰よりも彼自身が。

そんなことすらできなかった。彼は強すぎて脆すぎる。だから……。

だから、自分が……。

思考は、螺旋を描いて落ちてゆく。沈んでゆく。つかみかけた真実は、またどこかへ流れていってしまう。

待ってくれ。もう少し。もう少しだけ、ゆっくり……。

誰？

ずっと遠くから名を呼んでいる。とぎれもせず。諦めもせず。

何度も何度も、くりかえし、力のかぎりに呼んでいる。

無駄だよ、届かない。拡散して、伝わらない。

それでも？

それでも耳元から離れない。眠れない。静かにして。誰の声？

誰？

＊　＊　＊

悪夢の幕を開いたのは、深夜に鳴った電話のベルだった。

瑞穂を家へ送り届けて、亮介が自宅へ戻ったときには、既に時計の針は一時をまわっていた。

それから一時間と二十分。

必ず経過報告の電話をする、と言われていたのだが、それだけ待っても連絡が来ないということは、もしかすると行き違いになったのかもしれない。自分が帰りつく前に、電話が来てしまったのかもしれない。だとしたらどうするべきだろう、と亮介が悩みはじめた頃に——。

それは、訪れた。

『……崎谷君？　起きていた？』

「あっ、はいっ」

抑えた調子で問いかけたのは、十九郎の声だ。

背後にさわさわと人の動く気配がある。どこからかけている電話なのか、という考えが一瞬、脳裏をかすめた。

『体調のほう、大丈夫？』

「あ、ちょっと頭が痛いくらいで……平気です」

『そうか……』

呟いて、十九郎は少し間をおいた。

亮介は眉をひそめた。わけもなく、その沈黙が気になった。
「――何かあったんですか？」
そう尋ねたら、電話のむこうで十九郎が小さく息をついた。
ますます嫌な感触が背筋を這い上ってきて、亮介は受話器をきつく握りしめた。
何だろう、この空気は？
相手の顔が見えないだけで、こんなにもどかしさを覚えるなんて初めてだった。
「里見さん？」
『ああ、ごめん崎谷君……順をおって話すから、よく聞いてくれ』
ごく冷静な声で、十九郎が答えてきた。故意に事務的な話し方をすることにしたらしい。
『まず、今から言う住所をメモしてくれ。……いい？』
「？　はい」
十九郎が読みあげる住所と病院の名前を、亮介は言われるままに書きとった。
（病院？）
亮介の家からは、あまり離れていない大病院だ。どうしてここでその住所が出てくるのか、とっさには思いつかない。
『それから、崎谷君、今すぐに外出できるかな。大丈夫？』
「――はい」

こんな時間に動きまわると親はうるさいかもしれないが、閉じこめられたりするわけではない。服装も、さっき帰ってきたときのままだ。

『じゃあ、今言った病院まで、急いで来てほしいんだ。受付で俺の名前を出せばわかるから。もしかすると俺はいないかもしれないけど、その頃にはうちの母親が着いてるはずだ。崎谷君ひとりじゃないから、安心してほしい。わかったね？』

「あの、里見さん、それって……」

一方的に進みすぎる話に、ここまできて亮介も混乱した。

『崎谷君』

言いかけた亮介の声を遮って、十九郎が切り出した。

『斎伽さんと連絡がとれない。電話がずっとつながらないんだ』

「……え？」

突然、話題が飛んだ気がする。十九郎が何を言ったのか、その意味をつかむには少し時間がかかった。

忍がいない？

『冴子さんは行方不明だ』

続いて発された言葉は、さらに理解に苦しむものだった。

「ゆ……行方不明、って……」

思わず亮介はくりかえしていた。
誰のことを、十九郎は話しているのか。頭の中でつながらない。まったくかみあわない。
『崎谷君、聞こえてる？　悪いけど、迎えに行けないんだ。だからちゃんと聞いてくれ』
「……はい」
十九郎の声に、反射的に返事をしたものの、亮介は別のことを考えていた。
何故、こんなことを十九郎が知らせてくるのだろう。
何故、それが十九郎でなければならないのだろう。
どうして……。
こんな風に。
遠まわしに。
（!!）
がん、と神経全体に響きわたった思いつきがあった。瞬間、全身にひどい震えが走って亮介は受話器を取り落としそうになった。
どうして。
里見さん、と呼びたかったのに、舌が動かなかった。
いっそ電話を切ってしまいたかった。指が凍っていて、受話器からひきはがすことすらできない。

聞きたくない。

『崎谷君……』

容赦なく、その声は亮介の耳にとびこんできた。

『水沢が、やられた。とても危険な状態だ。だから……』

＊　＊　＊

誰？

じわじわと浸透して、指先から髪の先まで染めるようにして、少しずつこの身をとりこんでゆく。そんな声。

届かないのに、聞こえないのに、それでも。

つみかさねて、くりかえして、決してやむことなく呼びつづける。いつまでも。

波動。

時に新しく、時に懐かしく、ずっと近くにいる。

誰？

ふっ、と泡がはじけて音になる。

すりぬける呼び声。——諒、と。

『！』

ああ、おまえか……。

それは月の幻影。安らかに包みこむ細い腕。

諒は微笑して、その意識をゆっくりと降下させた。

さらに深い眠りの奥底へ。

【第二部】

ー　ディスタンス

四月二十八日、月曜日。

「ただいま帰ったぞっ」

自分の家でもないのにそんな声をはりあげて、和泉希沙良は里見家の扉を全開にした。があん、と金属音を響かせながら後ろ手にドアを閉め、玄関にスニーカーをまき散らして室内へあがりこむ。

時刻は午前十一時半、まっ昼間だ。高校生はおとなしく授業に出ているべき時間帯である。

居間の丸テーブルにコンビニの袋を放りだし、ついでに上着はソファの背に投げつける。

わずかに目標をそれて、ブルゾンが床にへたりこんだ。

「っ！　――なめてんのか、おまえはっ！」

思わず洋服にまでケンカを売ってしまう。露骨に不機嫌な顔で、希沙良はそのまま部屋の奥へ足を運んだ。ブルゾンは救済されずじまいである。

里見十九郎と母の夏江が二人で暮らす、このマンションは、自由が丘の駅から歩いて五分程度のところにある。七階の3K。奥の二部屋は寝室なのだが、現在は少しばかり事情が変わっていた。

「夏江さん夏江さん、なっつえさんっ、メシ買ってきたんだけどっ」

ドアの前で、希沙良はしつこく呼びかけた。寝室には入りたくないのだ。

「あら、お帰りなさい」

落ちついた声とともに、扉が開かれる。いつもどおりの穏やかな表情で、夏江が姿を現した。

本来ならここは十九郎の部屋なのだが、当の主は昨夜からずっと動きまわっていて戻ってこない。代わってベッドを占めているのは――。

「まだ？」

希沙良は短く問いかける。

言葉にはせず、夏江が頷いた。

「いい気なもんだよな」

「駄目よ希沙良、そういう言い方」

めっ、と叱りつつ、すでに手が出ている。額を小突かれて、本気でぶつことないだろー？と希沙良がぼやいた。

眠りつづけているのは、招かれざるなんとやら。水沢諒である。

病院に任せておくよりも、ここへ運んでしまったほうがいい、と、夏江は夜も明けぬうちに諒の身柄を引き受けた。いつ再び刺客がやってくるかしれなかったというのもあるが、なにより、諒の状態はもはや普通の医学でどうこうできる段階のものではなかったのだ。

実際の怪我は、左肩の脱臼と擦過傷。

しかし全身の衰弱とショック症状は、それだけではとても説明できない。

原因は別にある。術者であればすぐに思いあたる要素。

妖気、だ。

希沙良自身、波妖気を浴びて倒れた経験なら持っている。あのときの苦しさは思い返したくもない。——ただ、それでも、ここまでひどくはなかったという気がする。そのことが、ひっかかる。

感覚は、お互いに大して強くない。受けるダメージは同程度でなければおかしい。なのに……。

「亮介君」

室内をふりかえり、夏江が声を投げた。

「あなた、ゆうべから何も食べてないじゃないの。今のうちに、とにかく胃の中になんでもいいから入れたほうがいいわよ」

不機嫌のもとが、もうひとつだ。希沙良は小さく舌打ちをした。
「いいかげんにしろ崎谷っ！　おまえ、俺がひとりでメシを食ってもいいわけか!?　消化に悪いだろ、そんなのはっ！」

現実感はまるでなくても、時間というのは勝手に進んでいくものらしい。
長い夜をくぐりぬけた今、感想があるとすれば、そんな言葉にしかならなかった。
部屋の隅に置かれた椅子に座り、亮介はずっと沈黙している。頭の中が空になってしまったようで、言うべき台詞もとるべき行動も出てこない。座っているだけで精一杯で……。
諒の意識は、一度も戻らない。
昨夜までの諒と、現在目の前に横たわる彼の姿は、あたかも別人だった。蒼白な横顔。一度に痩せたように見えるのは、亮介の気のせいではないはずだ。あれから、せいぜい半日ほどしか経っていないのに。
荒い息遣い。不規則に乱れる。呼吸器官が正常に働いていない。喘息の症状に近い。傍らで聞いているこちらまで、息苦しくなってくる。
これでも、当初よりはかなり好転しているのだ。
十九郎が地に倒れている諒を発見したときには、その呼吸は完全に停止していたのだとい

う。そこでとっさに十九郎は、〈気〉を諒の胸部にたたきこんで肺と心臓に刺激を与える、などという荒業に出たのである。そうでもしなければ、今ごろ諒はこうして生きていなかったわけだが……しかし荒療治には負担が伴うのも事実だ。

水沢にはずいぶん気の毒なことをした、と病院での別れ際、十九郎はそんなことを言っていた。崎谷君はその場にいなくて良かった、とも。それが具体的にどういうことなのか、亮介には想像のしようがない。……ただ、きっと……筆舌に尽くしがたい苦痛が諒を襲ったのだろうと思う……。

さらに、病院に運ばれてからも、諒は何度かひどい呼吸困難を起こして絶息の一歩手前まで行きかけた。胸郭の激痛にもがき苦しむ彼を前にして、亮介は何もできなかった。見ていることしかできなかった。

諒が病院を出られるまでに回復したのは、ひとえに夏江の『力』があったからなのである。術者の能力は、大人になると消えてしまうことが多い。夏江もその一人だった。かつては十九郎によく似た術力を持っていたのだという。今では、わずかに勘の鋭さを残している程度だ。

が、おそらくそういった術力の類とは別の次元の、それは彼女自身の特質なのだろう。夏江自身の気が並外れて清浄なのだと亮介は思う。つまり、彼女が手をかざしつづけることによって、諒の身を冒す妖気はごく少しずつ、だが確実に浄化されていくのだ。

冴子の能力とはまったく違う、と夏江は言った。

「冴子ちゃんは凄いのよ。どんな『毒』も、自分の内側にとりこんで『癒し』てしまうでしょ。あたしは毒気を『薄め』たり『散らし』たりはするけど、その根本の毒気を取り除くことまではできないから」

諒を回復させるにも限界がある、ということだ。しかし、ここまで諒の負担を軽減してやれただけで、もう夏江にはいくら感謝しても足りないのである。

あとは、冴子がいてくれたら……。

冴子の行方は、杳として知れなかった。そもそも、諒が目覚めてくれないことには、何故こんなことになったのか、冴子がどうなったのか、そういった前後関係を語れる者が一人もいない。

そして、その場にいた人間としての責任を十九郎が痛感してしまうのも、彼の性格を考えれば無理のないことと言えた。彼は今、なんとかして斎伽忍とコンタクトをとるべく東奔西走しているのだ。

それを言うなら、さっさと一人だけ戦線離脱した自分こそ責められるべきだろうと亮介は思うのだが、そんなことを口にするだけの気力すら今はない。

「ばかものっ」

がん、と頭を殴られて亮介は目を上げた。

「メシだと言うとろーがっ。さっさと来いさっさとっ」
言葉と同時に、希沙良は実力行使に出た。首ねっこをつかんで引き起こされ、ずるずると寝室の外までひきずり出されて、ようやく亮介は自分の足で立つことができた。
「……え？」
亮介が、タイミングのずれた反問を返す。
「いいからおまえはそのまま歩いて座って黙って食え」
希沙良は仏頂面で一方的なことを言い、気がついたら亮介は居間の丸テーブルまでたどりついていた。
「カツサンドとミックスサンドと野菜サンドといなり寿司。選べ」
「えっ……と」
「わかった、ミックスサンドだな。んじゃ俺がカツを食う。文句ねえだろ。で、ドリンクはコーヒーとオレンジとミルク。選べ」
「……」
「そーかおまえはミルクだな。そういや牛乳飲むと背が伸びるんだったよな、確か。んじゃ俺がコーヒーをもらう。ストローくらい自分で挿せ、ほら」
「……うん……」
強引に希沙良が話を進める。亮介はただ頷くのみである。

希沙良は希沙良なりに、昨夜は大変だったのだ。

夜中にたたき起こされたと思ったら、どういうわけか状況は最悪で、しかもそれが今まで自分にだけ伏せられていた『作戦』の結果だと言われたら、仲間外れにされた怒りに燃えないほうがおかしい。

ところが、その怒りを真っ先にぶつけられるべき十九郎は、時おり事務的な電話をよこすだけで一向に姿を見せない。亮介は亮介で、すっかり感情が麻痺してしまって、ある意味ではパニックよりも危険な状態なので下手に扱えない。

殺しても死なないと思っていた水沢諒は、何の間違いか死にかけているし。

どこに閉じこめても絶対、壁をぶちぬいてでも出てくると思っていた冴子『姫』は、あとかたもなく蒸発していたりするし。

諸悪の根源、斎伽忍からしてドロンでは、どこへやつあたりしていいかわからないではないか。

敵がこちらの動きを追っているかもしれないから、少なくとも夜が明けるまでは夏江たちと一緒にいてくれ、と、十九郎はそれしか言わなかった。

怒鳴りたいことは山ほどあったのだが、妙に切羽詰まった様子でそう頼まれてしまっては――困る。

結局、言われたとおり病院へ直行して、亮介を叱りつつ夏江の手伝いをして、夜明け前には

諒をこの部屋まで運びこんで、それから一度自宅へ戻って少しだけ仮眠などをとって、そして再び、学校へも行かずに里見家に帰ってきたのである。我ながら、ものっすごく偉いと思う。

「健気だよな、俺って」

しみじみと、希沙良は自画自賛してみたりする。

「……え？」

しばしの間をおいてから、ふと気づいたように亮介が訊きかえす。希沙良が思いきり脱力した。

「そこで疑問符をさしはさむなよ……」

「え？　……あ、あっ、ごめんっ。ちゃんと聞いてなくて、俺……」

「わーかった。もうおまえは何も言うな。そのほうが平和だ」

「……ごめん」

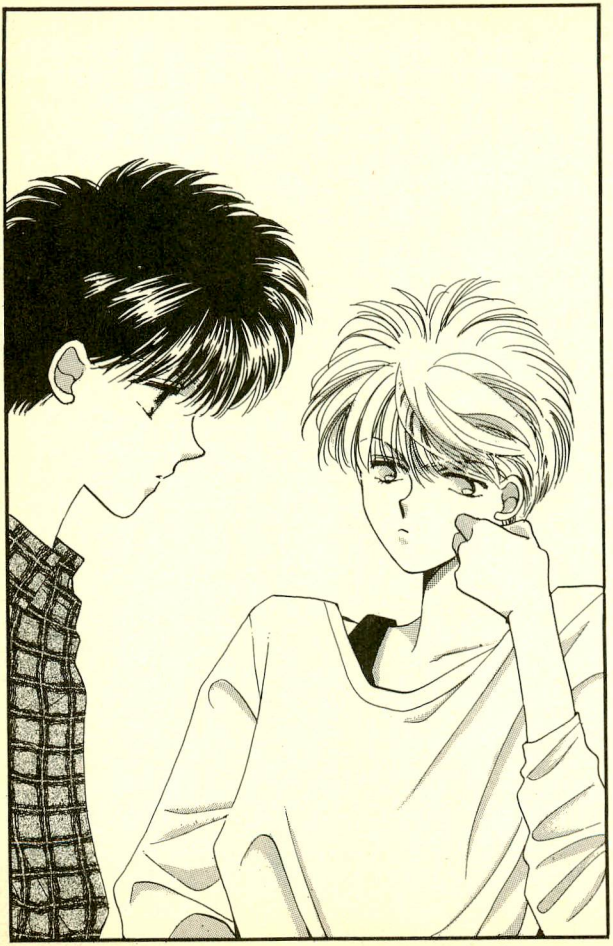
「そこで謝るなっ！　ますます腹が立つっ!!」

「……ごめん」

駄目だ、こいつは。希沙良はいらいらと脚を組みなおし、それ以上の意思の疎通をあきらめてカツサンドを口に放りこんだ。

「ったくなー……おまえって、そういう奴だったっけか？」

黙っていろ、と言っておいて、結局また自分から話しかけてしまうのだから、希沙良のほう



も修行が足りない。

「も少し根性すわってるはずだろ、トロいのはトロいなりにさあ」

「でも……」

目を伏せたまま、亮介が小声で答える。

「こんなこと……考えてもみなかったから……」

まさか諒が、なんて。

亮介自身、不思議なくらいだった。今まで、こんな事態を恐れすらしなかったこと。諒が負ける、なんて、一度も思わなかった。その命が失われる可能性、なんて、意識したこともなかった。

本当は……彼の身柄は、いつだって危険にさらされていた。忍の下で働きだした時から。全国をまわっているうちに、どこか亮介の知らない街で、こんな風に倒れることだってあったかもしれないのだ。どうしてそんな大切なことに気づきもしなかったのだろう。

——諒は強い、と無条件に信じこんでいた。それは諒を信頼することと、同じではないはずだ。

「そりゃおまえ、あいつだって不死身じゃねえんだから」

希沙良が顔をしかめる。つい数時間前までは自分だって諒のことを『ほとんど不死身』として認識していたのだから、亮介のことは叱れない。

もっとも希沙良の場合は、単に諒のことが『大嫌い』だから『殺しても死なない』と思いこんでいたわけで、亮介のそれとは別問題である。

どんなに嫌いでも、死なれたらやはり笑えない。

「……怖い……よね。どうして、怖くなかったんだろう……」

ひとりごとのように、亮介が呟く。

言葉の響きがどうにも虚ろで、あぶなっかしくて仕方がない。希沙良はわざと声をはりあげた。

「あのなあっ。車の運転する奴が、四六時中『事故ったらどうしよう』なんて考えてるか？　煙草吸う奴が、毎度毎度『肺ガンになるかも』とか考えるか？　違うだろ!?　そうそう怖がってられっかよ、こんなヤクザな血筋ひいちまった人間がっ！」

「……そっか……」

「そうっ。二日酔いが怖くて酒が飲めるかっ」

あんまり意味のつながらないことを言って、希沙良が強引に結論づけた時だった。

かちゃり、とノブをまわす音がして、玄関の扉が開いた。亮介が目を上げた。

「ただいま」

低く、ごく静かな声が届く。

それから少しの間をおいて、ドアが閉まった。

希沙良はふりむかなかった。テーブルにひじをついて、そっぽを向いている。

居間に姿を見せた十九郎は、まず床でつぶれているブルゾンに目をとめた。さりげなくそれを拾いあげてから、テーブルの亮介へ視線を投げる。

「ごめん、遅くなって……」

「……いえ」

自分が答えてしまっていいのだろうか。そう思いつつ、亮介は返事をした。

表面にこそ出さないが、十九郎もひどく疲れているようだった。それはそうだ。不眠不休でずっと……。

「天の岩戸とか？」

ぼそりと、希沙良がそんなことを尋ねた。目をそらしたまま。

「近いかもしれない……」

十九郎が答える。亮介の隣の椅子を引いて。

「相変わらずだ。結界が強すぎて、どうしようもない」

上着も脱がずに座りこみ、十九郎はしばらく黙りこんだ。

六本木にある、斎伽忍の部屋のことである。

エレベーターを使っても、階段から行っても、どうしても九〇七号室へはたどりつけない。九階そのものがないのだ。八階の次には、決まって十階に到着してしまう。いったい誰が、何

のために張った結界なのか。
　他にも、十九郎の知るかぎりで忍に縁のある場所はすべてまわってみた。今のところ、手がかりはない。
　――いや、一カ所だけ、意識して避けた所がある。
「本家は？」
「駄目だ、あそこにだけは知られるわけにいかない。そんなことをしたら……」
　希沙良の問いに、間髪入れず十九郎が鋭い声を返した。
　そんなことをしたらどうなるのか、肝心な事情を十九郎は語らない。ますます希沙良が不機嫌になる。
「……別にいいけどさ、俺は」
　テーブルに体重を預けて、それだけ呟く。
　ふと、十九郎がその顔を上げた。
「希沙良」
「なんだよ」
「……怒ってるのか？」
「べぇつにぃ、いいけどさ俺はぁ」
　大嘘をつくのは、そのほうが十九郎に対しては有効だろうと踏んでのことである。

さっきから、希沙良は一度も十九郎をまともに見ずに話している。これもささやかな復讐のひとつである。

昨夜からずっと、そう簡単に許してなるものか、と心に誓っているのだ。少しは痛い目にあってもらわねばなるまい。

「そうか……」

十九郎がかすかに、ため息をついたようだった。

最後のカツサンドを、希沙良はコーヒーで無理やり飲みくだした。ここで甘い顔を見せたら負けだ。以後二度と今回のようなことがないよう、白黒はっきりさせておかねばならないのだ。

短いのか長いのか、よくわからない沈黙があった。

その手には乗るか。希沙良は空になったブリックパックを両手で握りつぶす。

「……え?」

亮介の声。

「さ……里見さ……!?」

「!」

思わず希沙良がふりむいてしまうのと、十九郎の上体が揺らぐのとが同時だった。

「――おいっ!?」

テーブルへ倒れこむその肩を、ギリギリで希沙良の手が支えた。亮介が息を呑んだ。身をのりだして、希沙良が怒鳴りつける。

「なんだよおまえっ！　そんなんありかよっ!!　おいっ!!」

「かかったな」

あっさりと顔を上げて、十九郎がそんな言葉を発したのは次の瞬間だった。がらがっしゃん、と派手な音をたてて希沙良がテーブルの下へ姿を消した。

「きっ……きっ……きさまという奴は……」

椅子にすがりついたまま、顔面蒼白で希沙良が声を震わせる。

「俺を殺す気か馬鹿野郎っ!!　本っ気で内臓ぶっつぶれんだからな俺の場合っ!!　責任をとれっ、三日分の俺の寿命を返せっ!!」

怒鳴っている本人も、自分が何を言っているのか今ひとつ把握していない。亮介はひたすら唖然として、十九郎の横顔を眺めていた。

「だけど、やっぱり……」

真顔で言いながら、十九郎が立ち上がる。

「目が覚めるじゃないか、希沙良に怒鳴られると」

「俺はカフェインでも精力増強剤でもないっ!!　人を目覚まし代わりに使うなっ!!　ついでに言うけど、俺はまだおまえに謝られてねえぞっ、ただの一度もっ!!」

床に座りこんでわめきたてる希沙良に、十九郎は手を貸した。
「俺が悪かったよ。ごめん」
「遅いっ！」
なんとか椅子に座りなおすことに成功して、希沙良がふくれた。十九郎が肩をすくめる。
「じゃ……俺はこれから三鷹に行くから……」
「まだ動く気かよ、いいかげんにしとけよ、おまえっ！」
「大丈夫だよ。むこうに着いたら少しは休める」
夏江に話がある、と言って、十九郎は寝室に入ってゆく。たまには人の言うことに耳を貸せっ、と希沙良が愚痴った。
「なんだよ」
亮介がこちらを見つめているのに気づいて、希沙良はばつの悪い顔になる。視線を向けられることに敏感らしい。
「いや……」
ゆっくりと、亮介が口を開く。わずかに笑みが浮かんだ。
「よかったと思って……」
「全然よくねえよ、バカ」
希沙良が白けた。重ねて亮介が言う。

「だって、仲直りできただろ」
「やーめーろーっ、そういう言い方はーっ」
「だって、仲直りできたんだろ？」
「……おまえって本当にすげえ性格してない？」
ボーッとしているだけかと思うと、こういう根性悪の部分だけは健在なわけか。
あるいは、これでせめてものバランスを取っているのだろうか。
希沙良にはわからないが、いずれにしても厄介なことに変わりはない。
笑っていても、どうも感情が上滑りしている気がする。そのあたりが、らしくない。
（面倒くさいよなー……）
本当は、こういうことを考える行為そのものが、希沙良は苦手なのだ。頭が痛くなってくる。
「それじゃ、よろしく頼みます」
夏江にそう言いながら、十九郎が寝室を出てきた。
「なあ俺、一緒に行こうか？」
思いついて、希沙良は声をかけてみる。
「駄目」
簡潔すぎる応答が返った。希沙良がムッとする。

夏江だって、休みを入れないと身がもたないのだ。そして諒と亮介をこの状態で放置しておくわけにはいかない。希沙良には、ここに残ってもらうしかない。

亮介本人を前にして、それを説明することは憚られた。だから十九郎としては、その一語しか口に出せないのである。

「希沙良」

居間を出るところで、十九郎はふりむいた。

「行ってこい行ってこい、どこにでも行ってこい」

拗ねきった様子で希沙良が唱える。すっかり投げやりである。

十九郎は少しだけ間をおいた。

「……頼りにしてるよ」

むくれたまま、希沙良が目を上げた。

「あたりまえだっ。ばかものっ」

それを聞いて十九郎は微笑する。

「うん、希沙良は良い子だ。——大好きだよ」

どんがらがっしゃん、と再び、けたたましい音があがった。かまわず十九郎は玄関へ姿を消してしまう。

「おいおいおいっ!!　おまえ絶対寝不足でキレてるぞっ！　いいからさっさと寝ろ、早く寝ろ

っ!!」

椅子に抱きついて、床から希沙良が声をはりあげている。

「そんな事くらいでおかしくなったりしないさ……」

ひとりごちて、十九郎は扉を開けた。

「！」

襲いかかるのは、白昼の陽光。

日差しが強すぎる。瞳を刺すコントラスト。暑い。

十九郎は深く息をついて、エレベーターへ向かって歩きだした。

斎伽忍は、どこにいるのだろう。

なまぬるい空気に、目眩がしそうだった。ここで自分までが倒れるわけにはいかない。それだけを強く念じて、彼は歩きつづけた。

我ながら、愚かなことをしていると思いつつ……。

2 遠い声

夕方になって、亜衣が里見家を訪ねてきた。
制服姿だった。学校からまっすぐ来たらしい。
「……大変、だったって、聞いて……」
玄関先でそれだけ言うと、亜衣はそのまま黙りこんでしまう。
「ああ……」
亮介は漠然とした返事をした。
そういえば、喧嘩めいたことをしていたんだっけ、と頭の隅のほうでは思い出している。けれど今はそんなこと、まるで十年も昔の記憶くらいに遠ざかってしまっている。
希沙良がいないのは、別に気を利かせたりしたわけではない。夏江が仮眠中なので、やむなく寝室の番をしているのである。だからかどうかわからないが……やけに静かだ。
「これ……今日の分のノート。C組の友達に貸してもらって、写してきたから。あと、山岸君

が課題のプリント余分に取っておいてくれて、それも入ってる……」
きれいにまとめたルーズリーフを差し出して、亜衣がそう言った。
「山岸？　……ああ、うん」
しばらく考えて、ようやく美術部部長の顔が浮かんできた。ぼんやりとルーズリーフの束を受け取る。何か言いたげに、亜衣がその動作を見守っている。
「ありがとう……」
それでもなんとか、亮介は笑顔になってみせた。
開きかけた口をつぐんで、亜衣は鞄を持ち直す。
「それじゃ……あたし、これで」
時差。
一瞬の空白の後、亮介はまばたきをした。
「え？」
するりと、滑るような素早さで亜衣がドアの隙間から外へ出るところだった。
ほとんど反射的に、亮介も靴をつっかけてその後に続いていた。
「ちょっと……待って！」
追ってきた亮介を見て、亜衣はかすかに目を見開いた。
マンションの通路からは、桜色に染まりだした西の空が見える。

ドアの前で亮介は立ち止まった。エレベーターへと歩きかけていた亜衣が、体の向きを変えて、そして数歩ばかり引き返してきた。

後ろ手に扉を閉めてから、亮介は言葉を捜した。何か話すことがあったはずなのに。

亮介を見上げて、ぽつりと亜衣が切り出す。

「あたし……邪魔になったらいけないと思って……」

邪魔？　そんなこと全然……。

真っ先に、そう答えなければならないのに。

「――誰に、聞いたの？　大変だったって……」

口をついて出てきたのは、亮介自身まったく意識せずにいた問いだった。

違う。そんなこと、今はどうでもいい。どうして。

「里見さんが……」

話がそれたことよりも、亜衣は亮介の質問を優先する。

「朝のうちに電話してくれたから、それで。あと、学校では……松田さんに会って、ちょっと話して……」

「ああ……松田さん、学校に来てたんだ」

瑞穂の名を亜衣の前で、わざわざくりかえす必要なんてないのに。

ひどいことを自分は尋ねている。わかっている。わかっている、けれど……。

「うん、元気そうだった」
さして気にした様子もなく、亜衣は頷いた。――少なくとも表向きは。
「……それから、崎谷君がなんで来てないのかって心配してたけど……水沢君のことは教えないでおいたの。松田さんのほうが、変に責任なんて感じたら困るから……。そのうち、時期を見て、いろんなことは崎谷君から説明してあげたらいいと思う」
「うん、わかった……。そっか……里見さんが、亜衣ちゃんのところにまで連絡してくれたんだ……すごいね……」
「……そうね。崎谷君が、学校に行けそうにないから、フォローできる所はしてほしいって……。こんな時に、よくそんなことまで気がまわるなって感心したけど……でも心配なのは、そういう人だから、本当はすごく……」
言いかけて、亜衣は言葉を切った。
「崎谷君？」
伏し目がちに立ったまま、亮介は答えない。亮介がどこを見ているのかわからなくて、亜衣はその腕をつかんで呼びかけた。
「崎谷君！　大丈夫!?」
「！」
はっ、と亮介が顔を上げた。

「崎谷君、聞こえてた？　どうしたの？　気分悪いんじゃないの？」
気遣わしげに尋ねる亜衣の声。
「あ……」
亮介は片手で額を押さえた。目を閉じる。
「……違う、そうじゃないんだ、ごめん。そういうんじゃなくて……」
自分の声までが、近くなったり遠くなったり、揺れながら響くように聞こえる。しっかりしないと。しっかり、自分をつかまえておかないと。
「違うんだ……亜衣ちゃんにはもっと別のことを言いたくて……だけど……」
苦しい。自分が何を言っているのかわからなくなる。何も見えなくなる。
「ねえ崎谷君、今は！　今はいいから！　今はもう余計なこと考えすぎないで！」
腕をつかむ両手に力をこめて、亜衣が言い聞かせた。
「心配しなくても大丈夫だから！　水沢君も、冴子さんも忍さんも、絶対大丈夫だから！　ね!?」
闇の中で、亮介はそれを聞いた。意味をとるのに時間はかかったが、何故かとても心地よい声に思えた。
大丈夫。大丈夫だから。
目を開くと、亜衣の顔があった。まっすぐに見上げる二つの瞳。

「崎谷君、全然休んでないんでしょ？　このままじゃ水沢君が治る前に崎谷君のほうが病人になっちゃうわよ！　水沢君が見たらがっかりするじゃないの！　心配させちゃうじゃないの！　今考えなきゃならないのはそういうこと！　わかるでしょ!?」

「……」

彼女を見おろし、亮介はしばらく黙っていた。

やがて、小さく頷く。

「うん……」

今、言ってほしかったのは、多分そのこと。

今、言いたいのは。——まだだ。まだ、そこまではたどりつけない。

「あたしにできることがあればいいんだけど……」

亜衣がそう呟いた時のことだった。

「崎谷っ！　ちょっと来いっ！」

ドアのむこうから、はりつめた声が亮介を呼んだ。

希沙良だ。

何があったのか、と考えるより早く——瞬発的に亮介はドアを開いていた。それは諒に関することでしかあり得なかった。

そして——。

寝室にたどりついた亮介を待っていた光景は、ひどく静かなものだった。
希沙良は入り口の近くに立って、やや眉をひそめている。
仮眠から起きたばかりの夏江が、ベッドにかがみこむようにして諒の額に手をあてていた。
「まだよ……いきなり動いちゃ駄目よ。ゆっくりでいいのよ」
そっと語りかける、その相手は。
「……あたしが見えてる？　もう心配ないのよ。わかる？」
そう呼びかけられて、わずかに視線を揺るがせるのは。
その直後、亮介はごく小さな声を聞いた。聞いてしまった。きっと本人さえ意識しなかった、かすかな呟きを。
諒の一言を。
「……母さん？」

一瞬、希沙良は亮介の動きについていきそこねた。
「崎谷！」
がしゃん、とダイニングテーブルにぶつかりながら、亮介が居間を駆け抜けた。そのまま玄関の外へとびだしてゆく。

「崎谷君っ……!?」
通路で待っていた亜衣が、亮介の急変に気づいて叫んだ。届かない。
「おいっ！　待てっ、このバカっ！」
希沙良も続いて外の通路へ走り出た。亮介は一直線に階段へ向かっていた。
「止まれ崎谷！　危ないっ!!」
希沙良が怒鳴るのと、階段を駆けおりる亮介がバランスを崩すのとが同時だった。とっさに希沙良はコンクリの地面を蹴り、思いきり跳んで空中で亮介を拾ってから、なんとか下の踊り場に着地を成功させた。ほとんどサーカスだ。
「いてっ」
勢いで壁にぶつかってしまって、希沙良は顔をしかめた。
「っ……痛えだろ、阿呆っ！　何考えてんだ馬鹿野郎っ！」
壁に亮介の身体を押さえこんで、正面から叱りつける。
顔を伏せたまま、亮介は小刻みに首を横に振っていた。
「知ってたんだ……！」
血を吐くように、亮介がそれだけ言った。
「え？」
希沙良が問い返す。その腕をつかんで、亮介がくりかえした。

「知ってたんだ、俺！　ちゃんと……ちゃんと聞いてたのに、〈発火現象〉って！　なのに気がつかなくて！　傀儡なんて……家が……目の前……燃やすなんて、発火なんて、あいつが平気なはずないのに！　知ってたくせに！　どうして俺は何も、何もわからなかっ……」

「待てっ！　ちょっと待てっ!!　泣くか喋るかどっちかにしろっ!!」

何がなんだかわからなくて、希沙良は強引に台詞を割りこませた。

今まで不発のまま蓄積されてきた感情が、ここに来て一度に暴走したのだろう。これまで反応がことごとく上滑りしていただけあって、今度は歯止めがすっかり失せてしまっている。極端から極端へ走る奴らしい。

「……だけど……けどっ……！」

肩を震わせながら、それきり亮介は言葉を失っている。

服の袖をつかまれたままであることに気づき、希沙良は少々複雑な心境を抱えることになった。どうするべきか。

「だからさ……」

あいまいに口を開く。本当はこういう役回りは苦手なのだが、仕方がない。

「順番ってもんがあるだろ。まず泣いて、それから考えて、その後に動け。いっぺんに全部やるな、ろくなことねえから。だろ？」

この際、我が身のことは棚上げしてでも、ハッタリで黙らせたほうの勝ちである。

「……う、ん……」

希沙良に言い聞かされて、それで張りつめていた糸が切れたようだった。立ち尽くす亮介の足元に、いくつもの涙が落ちてコンクリの色を変えた。

亜衣は希沙良の後ろで立ち止まり、そんな亮介の姿を見つめている。

がくり、と亮介の膝から力がぬけて、希沙良が慌ててその身を支えた。

「おい……」

ごめん、と亮介は呟いたが、それは声にはならなかった。

そして数秒後、亮介は完全に沈黙した。——気絶したのだ。

「崎谷君……!?」

「起こすなよ、お姫さん。心配ねえよ、気がゆるんだんだろ」

眠れる時に、少しでも眠ったほうがいい。

やれやれと思いつつ、希沙良は亮介を抱えて戻ろうとした。

「げっ、いつまで俺のシャツ摑んでんだ、おまえ……」

亮介の右手が袖から離れない。なんなんだこいつは、と希沙良がぼやいた。

「よっぽど辛かったんだと……思うけれど……」

控えめに、亜衣が答える。

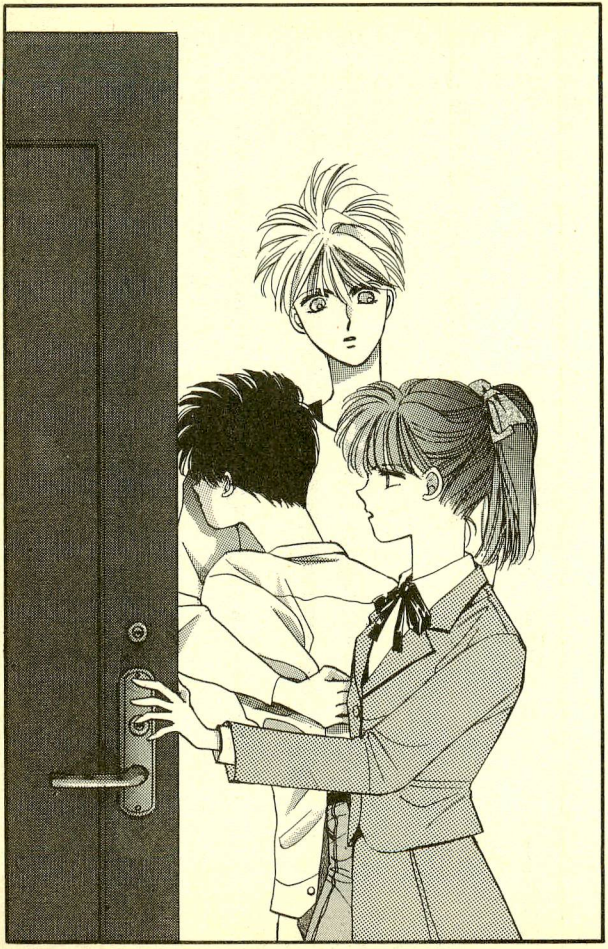
「神経が細すぎんだよ。別に誰が死んだってわけでもねえのに」

「死にかけたんだから、当然だわ」
階段を上りかける希沙良に、厳しい目を向けて亜衣が言葉を返した。一瞬、希沙良が口をつぐむ。
「……そういやあんただったっけ、威勢のいい彼女は」
「憶えててくれてありがとう」
……決して社交的とは呼べない空気が流れる。
「ごめんなさい、あたし今、怒ってるから攻撃的になってるの」
きっぱりとした表情で、亜衣がそう続けた。
「怒るのもいいけどさ……攻撃対象は妖者だけにしといてほしいんだよな、できたら」
亮介をひきずりつつ、希沙良は階段を上る。力をこめて亜衣が答えた。
「攻撃対象なんて、崎谷君を泣かせたら全部そうなの。あたしの場合」
「だから。それって妖者だろ、この場合」
「それもあるけど！　水沢君も水沢君なら忍さんも忍さんだわ！」
「……」
さすがに、希沙良もしばし絶句した。
「なんか今……俺ですら水沢に同情しそうになっちまったのは気のせいだろうか……」
「同情なら、崎谷君が必要以上にしてるからいいの。だからあたしが代わりに怒るの。ケガし

てなかったら、一発くらい殴ってると思う」
　亜衣はとことん物騒なことを言う。里見家の扉までたどりついて、希沙良はドアを指さしてみせた。
「あいつ起きたけど……殴ってくか？」
　亜衣は少し考えこんだようだった。
「……伝言でいいわ」
「『怒ってるぞ』ってか」
「そうね……それと『しっかりしなさい』って。『あたしのライバルのくせに』って。よろしく」
「……あ、そう」
　それはそれで、彼女なりの励まし方なのだろう。複雑な性格の持ち主もいたものである。
「それじゃ……」
「ちょっと待てよ」
　踵を返した亜衣を、希沙良は呼び止めた。
「俺、両手ふさがってんだけど……ドア開けてくんない？」
「……」
　やろうと思えば、亮介を抱いた状態でもノブを動かすことはできる。しかしそれを指摘する

ことはせず、亜衣は扉に手をのばす。
「あとさあ」
ドアが開かれるより先に、希沙良が言葉を重ねた。
「……水沢の親って、どうなってんの？」
希沙良の顔を見上げ、それから亜衣は大きくドアを引き開けた。
「あたしもよく知らないけど、火事で亡くなったって聞いたけど」
かすかに、希沙良が目を瞠った。
「じゃ、さよなら」
そのまま、亜衣はエレベーターへ足を向けて下降ボタンを押す。
「へえ……」
腕に抱えた亮介の横顔と、亜衣の後ろ姿を見比べて、希沙良は短くつぶやいていた。

最初は、光と影の区別しかつかなかった。話し声はしていたけれど、その意味をつかむことはできなくて……。
額に、あたたかい手の感触。……冴子とは違う。
母親……のはずもない。あの人は、こんな風に……優しく触れる人ではなかったから……。



ふっ、と空気が動いた気がした。
「え？」
知っている気配。泣いてる？　亮介？　どこで？
その瞬間、はっきりと視界がひらけた。目の前には、見知らぬ女性の姿。こちらをのぞきこんでいる。
「こら水沢、寝起きが悪いぞ」
こつん、と諒の額を指で小突いて、夏江はいたずらっぽい呼び方をした。
「……どうも……」
やや気圧されたかたちで、諒が答える。完全に反射的な行動である。
だんだんと、周囲のことが見えてくる。落ちついた部屋……カーテンのむこうには夕陽……
ベッドの感触。
「あれ……？」
記憶の断片を組み立てて、諒はふと眉をひそめた。
「！」
勢いよく上体を起こす。とたんに凄まじい痛みが背中から胸をつらぬいて、そのまま諒はベッドへ逆戻りしていた。
「いッ……」

思わず呻いてしまう。情けない。右の掌で胸を押さえ、諒は息をつめて激痛をやりすごした。

「あらあら……元気がいい子だわね、水沢君は。普通は起きあがれないわよ、こういう状態で。偉いぞ」

止めるでもなく叱るでもなく、夏江は一部始終を見ておいて大胆なことを言う。

「……へ……変なことで、感心せんでください……」

切れ切れに、諒はなんとか声を絞り出した。

確かに、こうして実際に痛い目にあわなければ、止められたところでおとなしく寝ているはずがないのだ——この自分が。しかしだからといって黙って放っておく彼女のほうも、かなり大人物のように思われるが……。

「……里見、さんですか……もしや」

「いかにもそのとおりよ、諒ちゃん。以後は夏江さんと呼ぶように。くれぐれもっ、『里見さんちのオバサン』なんて呼んじゃダメよ。本気で怒るわよ」

「……はあ」

なんというのか、豪快な女性である。しばし毒気をぬかれて諒は彼女を見上げていたが、やがて視線をはずした。

全身に重く残る不快感……これは妖気だ。左肩の痛み。右手の爪……。

「夏江さん……」
「なあに？」
「……」
言いかけて、諒はわずかにためらった。
けれど、状況から導き出される答えはひとつきりだ。
「……冴子、いないんですね……違いますか？」
訊くまでもなかった。
自分が、こんな風にベッドに縛りつけられているということ。ありえないのだ、冴子が健在なら。
表情を動かさず、夏江が口を開く。
「違わないわ。どこにいるかわからないのよ。ついでに言うなら、伽羅王も雲隠れしちゃったものだから、うちの子は昨夜から寝る間も惜しんで捜しまわってるわ。——捜したところで、相手はあの伽羅王でしょ、九割方ムダだと思うけれどね、そんなことは本人も承知しきってるから仕方がないわね」
「……忍が？」
諒が低く問い返した時だった。
ばん、と乱暴に扉を開いて部屋に入ってきた者がいた。

「夏江さん、あいつ倒れた。なんとかしてやってよ」
「ああ、亮介君？　そろそろやると思ってたのよ」
夏江はあっさりと答え、寝室を出て行く。
亮介の名に反応して、諒がドアのほうに目を向ける。夏江と入れ替わるようにして、希沙良がこちらへ歩み寄ってきた。
「サイテーだな、おまえ」
ベッドの脇で立ち止まるなり、希沙良はそう切り出した。
諒は黙っている。
答えなかったのは、別に希沙良に反発してのことではなかった。
何も、言うべき事項がなかったのだ。彼の言葉が正しすぎたので。
――ただし、『まさにそのとおり』と認めてやる義理もない。
「神原の、お姫さんから伝言」
面白くもなさそうに、希沙良が続けた。
「ああ……怒ってたでしょ、神原さんは……」
今度は、諒はあまり力のない笑顔になる。
希沙良は少し顔をしかめた。
「……しっかりしろっつってただけだよ。『ライバルのくせに』ってさ」

「あららら……」
「物好きだよな、あのお姫さんも。何のライバルだか知らねえけどさ……」
「あ、それはねえ、実はねえ、我々は亮介くんをめぐって火花を散らしているんだよーん」
「ふざけてる場合かよっ!!　だから嫌いなんだよ、おまえっ！　崎谷がどんなだったかわかってんのかよっ！」
枕元を拳で一発殴りつけ、希沙良が声をはりあげた。キッ、と諒が鋭い目を上げる。
「……わかりませんよ」
右腕に体重をかけて、諒は枕から頭を持ちあげた。
「わかりませんよ、そんなもの……わかりゃしないんだよ、どうせ！　それをどうこう言う権利がなんでてめえにあんのかもわかんねえよ！　俺が何も考えてないと思ってんだろ。まるっきりガキだろうが、それじゃ。文句言ってりゃ済むんだろ、そっちは！　つけあがんのもたいがいにせえっ!!」
肺の痛みをこらえながら、諒が一気にそこまで怒鳴った。思わぬ反撃に希沙良のほうも一瞬、返す言葉につまった。
「おまっ……助けられといてよく言えるな、そっちこそ……」
希沙良にとっては不条理でしかない。いいがかりとしか思えない。憤りが強すぎて、しばらく声も出ない。

それから、堰を切ったように激流がやってくる。
「冗談じゃねえよっ！　やつあたりなら別でやれよ、迷惑かけまくっといて言うセリフがそれかよ！　つきあってらんねえよ！　負け犬の遠吠えかよっ!!」
「負け犬にもなれなかった奴が偉そうにぬかすのなんざ聞きたかねえや！　見てるだけだったらさぞかし楽だろうよ！　関係ない奴が口をはさむなってんだよ、邪魔なんだよ！　いらねえよ、てめえなんざ！」
「馬鹿野郎、笑わせんじゃねえっ!!　人の苦労も知らねえでっ!!」
「それが恩着せがましいってんだろうが！」
「うるせえ黙ってろっ!!　死んじまえばよかったんだ、おまえなんか!!」
「こっちだって生きててめえの顔なんて見っ……」
台詞の途中で、諒の声が切れた。
限界を超えて喋りすぎたらしい。痛みに灼けつく胸を押さえ、苦しげに呼吸をくりかえす。
希沙良は舌打ちをした。
枕に顔を押しつけて、諒は少しのあいだ沈黙した。
希沙良は何も言わなかったが、部屋を出て行きもしなかった。
「……きーさん」
ぽつりと、諒が呼びかける。

「だからやめろっ!!　その呼び方はっ!!」
「ごめん、きーさん。俺は反省している。聞いて」
「あのなあっ」
「聞いて」
姿勢を変えずに、諒がくりかえした。希沙良は気味悪そうな目を向け、とりあえず黙る。
そのまま、諒は口を開いた。静かに。
「冴子が、髪を切られた。切られた、と思う……」
「……え?」
希沙良が表情をこわばらせる。さらに諒が続けた。
「敵は、『髪切り』一人じゃなかった。この件……三将がからんでる。早く手を打たないと、大変なことになる……」

3　炎　将

「なんか……すっごい久しぶりってカンジ……するけど……」
眩しそうに亮介を見上げて、諒は笑顔になってみせる。
「うん……」
頷いて、亮介は枕元の椅子に腰をおろした。
「亮介はぶっ倒れてるってきーさんが言うからさ……心配しちったよ、俺」
「おまえに言われたら逆だよ、立場が」
「やっぱそう？　本人……あんまり認めたがってなくてさ……」
「おまえらしいけど……」
亮介が黙りこむ。
今は、室内には他に誰もいない。
「ああ……悪い、今、何時？」

諒が尋ねる。

「六時……」

それだけ答えて、亮介はまた口をつぐんだ。

気を失っていたのは、だいたい一時間くらいのことだった。希沙良や亜衣に、ずいぶん錯乱したところを見せてしまったようだ。発散したおかげかどうか知らないが、目が覚めたらかなり気持ちは落ちついていた。——実感が、戻っている。

「そっか、六時……どうもまだ、時間の勘がズレてるな……いかんな……」

ぶつぶつと諒が言葉を続ける。

声を出すのだって決して楽ではないはずなのに、それで黙っていないあたりが意地っ張りなのだ。

いつもどおり。いつもどおりのポーズ。こんな状況になっても。

「亮介も、もう帰らないと……ご両親に申し訳が立たんよ、俺が」

「……」

亮介は顔を上げた。

諒は笑うだろう。冴子がいなくても。忍がいなくても。だけど……。

「寝てないんでしょ、ずっと。……ほら、そういう顔してる」

目を合わせてから、諒がそう言った。微笑して。

「帰って、しっかり休みなさい。俺は……もう、大丈夫だし……」
だけど。
だけど、辛いくせに。
「諒」
ベッドに片手をかけて、亮介は身をのりだした。
視線の高さを揃えたかった。大切なことを言うために。
「どうしたの、マジメな顔で……」
「マジメな話だから」
軽く尋ねる諒に、あくまできっぱりと亮介が答える。諒がやや表情を改めた。
「……愛の告白とか？」
「ここで殴ったら痛いよね、やっぱり……」
「すっ……すみません冗談です二度と言わないわ亮介くん許してっ」
「もう一回やったら本当に許さない」
かなり本気で亮介は宣言した。しくしく、と諒が泣き真似に走る。
隠したい気持ちがある時に、そうやって冗談でかわす。諒の悪い癖だ。笑っているための……強くなるための、悪い癖だ。
ずっと昔からの友達なんかじゃない。ずっと近くにいられたわけじゃない。それでも、それ

くらいのことは見える。そんなこと、わかりすぎるくらいわかる。

時間も距離も関係ない。『友達』の定義なんて関係ない。もう余計な『優しさ』なんて知らない。見て見ぬふりはしない。

まっすぐに諒を見て、亮介は切り出した。

「俺……おまえとの約束、破ることにしたから」

「……どの、約束？」

静かに諒が問い返す。

「本当はちゃんと約束したわけじゃないけど……」

そこまで言って、亮介は一度、声を切った。

おもむろに息を吸いこむ。

そして。

「勝手だよ、おまえっ！　できるわけないじゃないか、『心配しない』なんて！　人を見くびるのもいいかげんにしろよっ!!」

「――」

いきなり頭から怒鳴りつけられて、完璧に諒が絶句した。間をおかず亮介がたたみかける。

「心配なんて、死ぬほどしたよ悪いけど！　俺がなんで気絶までしたと思ってんだよ、おまえのせいだよ！　泣いたりわめいたりおかしくなったりして迷惑かけたし恥もかいたよ！　誰の

せいだと思ってんだよ!!　全部おまえだよ!!　聞いてたら返事くらいしろよっ!!」
「……き、聞いてる」
「あたりまえだよ、聞いてなかったら三日間見捨てるよ！　絶交なんてしてやらないよ、おまえなんか！　心配なんて、山ほどしてやるよ！　黙って見ててなんかやらないよ！　ちゃんと憶えてろよ、何回も言うの恥ずかしいから！　思い知ったか、ばかっ!!」
言うだけ言って、すっくと亮介は立ち上がった。諒は、あっけにとられた様子でそれを見ている。
「じゃあ俺、家に帰って寝るから。また明日。おやすみ」
そんな台詞を残して、亮介はあっさり部屋を出て行った。
ドアが閉まった後も、しばらく諒はその余韻を見送っていた。
「……あは……」
一人きりの室内に、やがて小さな笑い声が響いた。
「なははは……」
布団の中にすっぽりもぐりこんで、諒はしつこく笑い続けた。笑うと肺に振動が伝わって、切ない痛みを増したのだけれど……。

十九郎が戻ってきたのが、午後七時になる頃だった。
「そうか、とうとう……そうなってしまったのか……」
冴子が髪を切られた、と聞いて、十九郎は深いため息をついた。
枕元に立つ十九郎を、諒は黙ったまま見上げていた。まだ頭を上げることはできない。
「……すみません」
ぽつりと諒が言う。
「いや……起きてしまったことは仕方がない……」
十九郎はかぶりを振った。
しかし彼が昨夜以来ずっとそれを危惧していたことが、諒にはわかる。冴子の髪だけは……なんとしても守られねばならなかったのだ。たとえ諒の命に代えたとしても。
「なあ、変じゃねえか？」
部屋の隅に座りこんでいる希沙良が、口をはさんだ。
「何が？」
十九郎が問い返す。
「なんで生きてるんだ？　こいつ」
大真面目に諒を指さして、希沙良はそんなことを尋ねる。ごろりん、と諒が枕の上で頭を転がした。

「すみませんねえーっ、生きててーっ」
「希沙良……」
「なんだよ、そういう意味じゃねえよ、バカっ！　ちゃんと聞けよっ!!」
　この時ばかりは十九郎にすら救いがたく冷たい視線を向けられてしまって、希沙良はじたばたと足を動かした。
「そうじゃなくて……！　相手は仮にも三将軍の一人だろ!?　はっきし言ってこてんっぱんに負けたわけだろ!?　そこまでやられといて、なんでこいつ喰われたり憑かれたりしてないわけ？　それって変じゃねえか？」
　ムキになって言いつのる希沙良に、十九郎はふと両眼を細めた。
「……剣司がわざと、とどめを刺さなかったと言いたいんだろう？」
「わかってんじゃん。初めから悟れよ、それくらい」
「初めから誤解のない言い方をすればいいんだよ、希沙良」
　十九郎は穏やかに答えるが、それ以上の軽口を許す様子もなかった。希沙良が拗ねて黙りこむ。
「とどめなら、刺された気がしますが……一応」
　諒が複雑な表情で、口を開く。
　なにせ――三途の川を半分以上、渡りかけたようなものなのだ。一見、外からは絶命したと

しか思えない状態にまで追いこまれたのだから。これを『殺された』と言わずして何と言うのか。

「でも……おかしいな、確かに。術者の身体は、奴らにとってはこのうえなく魅力的な素材のはずだ。ただ殺して、それをそのまま放っておくなんて、三将の一人にしてはあまりに単純すぎる」

考えこみながら、十九郎はそう言った。かなりグロテスクなことを言われているように諒は思う。

「……あの、つかぬことをお訊きしますが」

グロテスクついでに、諒は気になっていたことを尋ねてみることにした。

「俺ってば……やっぱり『死んで』たわけですか、里見さんが来た時……」

「……ああ……その事か」

ここに来てさすがに話題が悪趣味な方へ向いていることに気づき、十九郎も顔をしかめた。

「息は……なかったよ。心臓も、止まった直後だったと思う。五分以上も経っていたら、いくら術力でショックを与えたってそう簡単には……」

「それなんですけど。それってことは、俺がやられてすぐに里見さんがあの場所にたどりついたってことで……するとあの剣司と、ハチあわせしたっておかしくなかったわけでしょ？　これは……単なるすれ違いで、説明できるんだろうか……」

そうでなかったら、つまり剣司がわざわざ十九郎のことは見逃したという結論にたどりつくのだ。

十九郎が来たからといって、剣司と弥峨が手を引かねばならない理由はない。二対一。実力差は歴然としている。十九郎が、二人目の犠牲者にならなかったのは――本当に幸運の二文字だけで解釈できる事態なのだろうか。

諒はそこまでは口に出して語らなかったが、十九郎がその言葉の真意を読み取らないはずもなかった。

「……そうか……いや、それならますます変だ。あの『髪切り』は俺に報復しようと思えばできたわけだろう。バックにそれだけ強力な将軍がついているのに……」

十九郎の表情が、確実に厳しいものになる。

何か、仕掛けられたということだろうか。――罠を。

「奴らが、俺を残しておきたかったとすると……」

そこまで呟いて、十九郎はふと声を切った。

思わず窓の外へ視線を投げる。カーテンの向こう。夜の空。

誰の気配もない。気配はない、が……。

「おい、何だよ、いきなり」

希沙良が呼びかけた。

十九郎はしばらく答えなかった。
ややあって、希沙良をふりかえる。ゆっくりと。
もしかしたら。
「俺を……残しておけば、どうなるかというと、だ……」
自分自身その内容をかみしめるように、十九郎は話しだす。
「希沙良。俺がおまえに来てもらう時に、こう言ったはずだ。奴らがまだこちらの動きを追っているかもしれないから……水沢たちをガードしてほしいと……」
「……ああ」
十九郎の、抑えすぎた言い方に違和感を覚えながら希沙良は頷いてみせる。
「が、奴らが俺を残しておいたのが、水沢の身を発見させるためだったと考えてみよう。この場合、むこうは俺が水沢を蘇生させることまでは計算していないかもしれない。ただ、どんなかたちであれ、俺は水沢を連れて戻るだろう——ここに。そして、それまで表面で動いていなかった術者にも連絡をとるだろう——つまり、おまえにだ。不覚だな……奴らに監視されていると思うなら、俺はもっと別の方法をとるべきだったんだ……」
「あ、そうか……」
希沙良が眉をひそめた。
すでにこの時点で、希沙良も敵にマークされていておかしくない。望むと望まざるとにかか

わらず、十九郎はこの件に希沙良を巻きこんでしまったことになるのだ。

諒は何も言わなかった。ただ、十九郎の言葉をじっと聞いている。

「犠牲が出れば、こちらも浮き足立って手の内をさらすということさ。――そうやって、こちらの布陣を読んで、それから……」

十九郎はそこで沈黙した。

布陣を読んで、それから？

そうして一からこちらの内幕をさぐらねばならないということは、剣司はあの女からは情報を得ていないのだ。あの女。美しく誇り高い、もうひとりの将――皓。

考えられることだった。あの女ならば、自らの敗北を白日にさらすよりは、彼女自身の手で雪辱を果たすことを選ぶ。総帥たる九那妃にならともかく、同列の地位に立つ将軍相手に、自分の獲物を譲り渡しはしないだろう。

すると……剣司は、伽羅王がこちらについていることも知らない。部下の『髪切り』に手を出した、その報復として仕掛けてきたことになる。斎伽忍にも、それはわかるはずだ。

（わかっていながら……？）

まさか。

かかわらなければ、難を逃れられる。まさか……まさかそんなことを考えたのではあるまい。忍の保身？　あり得ない。しかし、それではあの結界は何なのか。何のために。

本当はひとつだけ、十九郎にはわかっていることがあった。

六本木に張られた結界は、まぎれもなく斎伽忍の力によるものなのだ。

破ろうとした瞬間に、手応えで悟った。あの波動は、とてもよく知っている存在の片鱗。つかみどころのない冷たさと清らかさが同居する、彼にしか宿らない巨大な力。

結界の内側に彼がいるかどうかは別として、あれが忍の仕業であることに疑いはない。ただ、他の者にそのことを明かすのはためらわれた。何故なら……。

「十九郎？」

台詞の途中で考えこんでしまった十九郎に、希沙良が声をかけた。

「いや……」

十九郎が言葉を濁す。

「……そうだ、冴子さんという要素を落とすと話が見えなくなるんだな……」

暗に、だから今は判断を保留にしたいと言っているのだ。その反応にやや引っかかって、希沙良はわざと核心をついてみる。

「それって、もしかしてあのお姫さんが剣司につかまってるかもしんないってことか？」

「……いや、わからない」

「だけど可能性は大きいだろ？　人質としちゃ最適すぎるんじゃ……」

「違うよ、きーさん、それは違う」

ひどくきっぱりと、諒が言いきった。強い確信をこめて。
「冴子は、忍と一緒にいる。それしか考えられない。剣司じゃない」
微塵も迷いのない語調だった。希沙良が啞然とする。
「……だけど……おまえ、それじゃ……」
「希沙良」
十九郎が低く制したが、希沙良は聞かなかった。
「おまえ、わかってんのか？　それじゃなんでおまえがこんな重病人やってんだか……！　斎伽忍に見捨てられてるってことだろ、それは！」
「希沙良、やめろ」
もう一度、十九郎が鋭い声を投げた。
希沙良の言いたいことはわかる。
冴子が忍のもとにいるとしたら、忍は何故、彼女をここへ差し向けて諒の身を治癒させはしないのか。
疑惑は、他にも残っている。『髪切り』の背後に剣司がいることを、忍は本当に知らずにいたのか。知らずに、みすみす諒を窮地へ追いこんだのか。——あの、斎伽忍が。
しかし、それらの疑問を総合して得られる答えはひとつしかない。忍は……諒のことを見殺しにしたとしか……。

「いいんですよ、里見さん……」

そう言って、諒は笑ったようだった。伏し目がちに。

十九郎はそれを見遣り、何も答えずにいた。希沙良が舌打ちをし、苛立たしげに脚を組みなおす。

「どうかしてるぜ、ほんとに……おまえらはさっ」

吐き出された言葉の対象には、十九郎も含まれている。気づいていたが、十九郎は無言を通した……。

＊　＊　＊

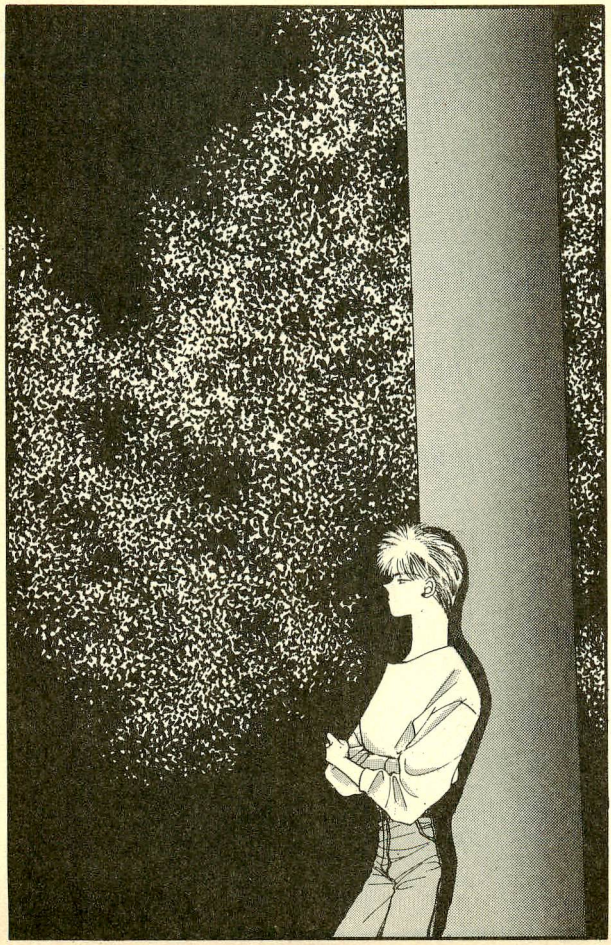
深夜三時。

町はずれの四ツ辻に、古くからある小さな神社。

鳥居の下の石畳は、いいように朽ちてしまっていた。塗料の落ちかけた赤い柱に片手をついて、彼はさっきから待っている。

街灯の光はごくかすかに、ここまで漏れてくる。鬱蒼と葉のしげる大木が鳥居のまわりを囲み、星影さえも覆い隠そうとするのだ。

「若？」



ふっ、と新たな気配が生まれ、そう呼びかける声があった。
「ここにいる」
鳥居から身を離し、剋司は短く答える。
彼の足元に素早い動きで片膝をつき、弥峨は一礼した。
「遅くなりまして……」
「いい。それより、報告が先だ」
すとん、と剋司はその場にしゃがみこむ。すぐ目の前に主君の顔を臨むことになってしまって、弥峨が一瞬きょとんとする。
「なんだ、悪いか？　立ちどおしで疲れたのだ！」
ややムキになったようにそう言うと、剋司はそっぽを向いた。
しばしその横顔を眺め、それから弥峨はくすくすと笑いだす。
「かないませんわ、若には……」
「うるさい、何がおかしい！　報告はどうしたのだ！　本当に礼儀を知らない女だな、おまえは！」
ますますムキになって剋司が言いつのる。笑みを消しきれぬまま、弥峨は再び頭を垂れた。
「では申し上げます。残念ながらあの光剣使い、この度は死に損なったようですわ」
諒のことである。剋司が顔をしかめた。

「運の良い……いや、運の悪い奴だな」

「確かに。若の〈熾炎斬〉にかかり、生きながらえたとて末路は知れておりましょう。あの者、二度と術者としては役に立ちますまい。そう考えると気分が晴れますわ」

強烈な妖気を身体に負ったままでは、いずれ各器官が毒に冒され、最終的には廃人になるしかない。ひとおもいに殺しきることはできずとも、楽しみが先へのびたと考えればよいのだ。

それが、『妖火』を使う最強の将・剋司を敵にまわした者の宿命だった。弥峨の口許に残忍な微笑が浮かぶ。

「身の程も知らず、我が傀儡を燃やした報いですわ。苦しみぬいて死ねばよいのです。一介の術者ごとき、われらが王、われらが〈炎将〉剋司様にかなうことなど、天地変転しようとございませぬわ！」

「……相変わらずだな、おまえも」

剋司のほうは、弥峨の心酔ぶりに少しばかり圧倒されているふしがある。王だの将だのといった肩書は、彼にとってはあまり意味がないのだ。

己の強さは、剋司としての自分に帰結すればいい。権威で飾られる要もなく、すでに彼は彼自身に対して十分に誇りを有している。

ただ、地位としての将軍職は、決して手放すわけにいかなかった。九那妃の傍らにあるためには……。

「他の術者にも、今のところ大きな動きはございません。伽羅王らしき者の姿もまだ……」
「ふん……そうか、奴に吠え面かかせてやりたかったのだがな……」
剡司は舌打ちをして、それから眉の根を寄せた。
「弥峨。あるいは奴ら、本当に伽羅王とつながっていないのかもしれないぞ」
「……そうでしょうか？　しかし……」
疑わしげに弥峨が呟く。
それより以前に、この東京で三将のひとり『皓』が伽羅王と戦い敗れたことを、彼らは知らない。もともと、将軍同士の間柄は決して友好的でも協力的でもない。九那妃という楔がなければたちどころに分解してしまう関係が、そこには成立している。
「まあ、いい……伽羅王が出てくるまで、一人ずつ潰していくのもまた一興だ」
剡司はそう結論づけた。どうせ予定外の「お遊び」なのだ。
今は、正面から伽羅王とことを構える時ではない。まず九那妃を――九那妃の宿る『器』を見つけだして、もし彼女がまだ目覚めていなければその覚醒を促さねばならない。すべてはそれからだ。
「誤るなよ、弥峨。九那妃様をお捜しするのが第一、伽羅王の面目を失わせるのは第二の義だからな。深入りして火傷するのだけは御免だぞ。わかっているだろうな」
「承知しております……」

弥峨はやや複雑な面持ちで、頷いてみせる。九那妃を探すより剋司と二人で「遊んで」いるほうが楽しい、とはさすがに口に出せなかった。

「それで、傀儡の様子はどうなのだ？　再び奴らに手を出すなら、例の女の傀儡を矢面に立たせたほうが、こちらにとっては楽だろう。うまく時期を合わせたいのだがな」

剋司が話題を転じる。

「そのことなのですが……」

言いながら、弥峨は立ち上がった。

ざわざわと風が頭上の枝葉をゆらす。

「妙なのです」

「妙？」

「はい。弥峨の傀儡は、女子の髪を細工して二夜と半日、眠らせねばならぬのはご存じと思いますが……」

そこで弥峨は言葉を切り、懐から白いものを取り出した。

掌に載る程度の大きさだ。丸く、和紙で何かを包んである。その包みを両手で握りこむようにして、腕をのばし、弥峨は自分の体からそれを遠ざけた。

「ごらんくださいな、若」

ビシッ、と何かがはじける音がした。

和紙の包みが消え、直径一メートルほどの光の球が、弥峨の掌の上に浮いていた。その球の内に膝を抱えて眠っている少女の姿を見出して、剋司がハッと両眼を瞠った。

「なんだと……？」

思わず腰を上げ、その光球へあゆみよる。

「完成しているのか……？　一日でか!?」

「異例なことですが……」

眠る少女は、間近に見るとひどく美しいことがわかる。高貴な印象の面立ち。活力には不足しない、健康そうな顔色。

「なんだ、これは……これは確かに傀儡なのか？　まるで生きているようではないか……」

剋司は息を呑んで、その少女――冴子を凝視した。

「すでに、触れても崩れません。いつ動きだしても良い状態ですわ」

弥峨が答える。

「しかし今度は逆に、ここまで完成していて動きださないことが妙なのです。本体のほうに何かが起きているのかもしれませんが……」

冷静な弥峨の説明は、だがほとんど剋司の耳に入っていないようだった。

息をつめたまま、彼は少女の姿に目を奪われている。不審に思い、弥峨は言葉を切った。

「若？　……もう閉じてよろしいですか？」

「待て！」
鋭い制止。
剡司の表情が、熱を帯びはじめていた。それまでの「遊び」が、ここへ来て別の何かへ移行したのだ。
「待てよ、弥峨……」
その瞳をぎらぎらと輝かせながら、彼はくりかえした。
不敵な笑みが、その口許にゆっくりと浮かんだ。光に包まれた少女を仰ぎ、そして剡司は呟いた。
「我々は、たどりついたかもしれないぞ……九那妃様に……」

4 中和

四月二十九日、火曜日。全国的に休日である。

「なーにが、ゴールデンウィークだか」

渋谷駅、東横線改札前の広場で、和泉希沙良は恨めしげにひとりごちた。

世の中は遊びに行く連中で溢れているというのに、何が悲しくて自分たちだけ、こそこそと逃げ隠れするような真似に走らねばならないのか。

斎伽忍を頼みにできなくなった状況で、とんでもなく強い（らしい）剣司に目をつけられたとあっては、こちらとしても自衛手段を講じるしかない、というのが十九郎の判断だった。具体的には、単独行動を避けろと言いたいのだ。

（チカラを合わせてタタカイマショウ、ってか）

不機嫌に希沙良は考える。

どうせ今、使いものになる戦力は自分と十九郎、それに崎谷亮介の三人きりだ。しかも亮介

の中和能力は本人の意志でコントロールできないわけだから、あまり期待もできない。すると責任の比重はかなりこちらへ傾いてくるではないか。

もちろん、こうなった以上は、他に代わりもいないことだし、自分が頑張るしかないのだと納得はする。ここで手を引くなんて薄情なことはしない。そもそも、協力しないなんて口に出したら……もしかしたら十九郎は許すかもしれないが……そうしておいて、また一人で度を越して無理をするのだ。そういう奴だ、彼は。

だから、それはいい。それについて不満はない。

問題は、そのように自分が考えて決定する以前に、すでに戦わざるを得ないところまで追いこまれているという、この流れのほうだ。

すでに希沙良も敵にマークされているだろう、と十九郎が言う。そうなった原因は何か。本来、『髪切り』の始末になどまるっきり関係ないはずの自分が、こうして当事者にまでなっている原因は何か。

……斎伽忍、のような気がする。

（水沢の『仕事』には手出しさせないんじゃなかったのか……あの野郎）

危険を強要する気はない、とも言っていたはずだ。そうやって、あくまでこちらの選択に任せて責任逃れをするかと思えば、やたら偉ぶって『命令』してみたりもする。水沢諒の『仕事』だからと言って自分たちをカヤの外に追いだしたかと思えば、こっそり十九郎をその『仕

事』へ引きこんでいたりする。

やっていることが、バラバラだ。昔から信用ならないと思っていたが、今回の件でとうとう化けの皮が剝がれた。

あんな奴とは、さっさと縁を切ったほうが身のためではないだろうか。

希沙良には、そうとしか思えない。だから、十九郎や諒の態度は不可解でしかないのだ。特に十九郎があれだけ忍に義理立てする理由は……。

（不自然だ）

つまさきで地面を蹴り、希沙良は人ごみへ視線を流す。

小走りに、まわりとの身長差に苦労しながら亮介がこちらへ近づいてくるところだった。

「遅いっ！」

たどりついた途端に叱りつけられて、亮介は思わず「ごめんなさい」などと口走ってしまった。本当は、約束の時間――午前九時には、まだあと五分ほど早いのである。

「切符は？」

「あ……まだ、買ってない」

「馬鹿か、おまえっ。改札前で待ち合わせといて、切符買いに反対側行って、また戻ってきたら二度手間だろっ!?」

ますます希沙良が癇癪を起こしまくる。たじたじと亮介は後ずさりした。

「ごめん、あの、急いで行ってくるから……」
「言ってる間に行けよ、のろまっ！　だからカメなんだ、おまえはっ！」
そうか俺カメだったのか、と呟きつつ亮介は切符売り場へ向かった。
大変な事態の割にリラックスしているのは、恐怖感や緊張感が持続しすぎてあたりまえになってしまっているせいかもしれない。
それに、冴子と忍の行方はもちろん気になったが、不思議と、その身の安全についてはあまり心配せずに済んでいた。
理由はある。
冴子のことは自分が守る、と忍は確かに言ったのだ。
亮介としては、それを信じたい気持ちになっていた。今となっては、そう信じる以外に何もできないし。
（大丈夫だ、あの人なら）
ただ、忍には何か……ここで、姿を見せるわけにいかない事情が、あるいは意図が、あるのではないか……。
「親には？」
戻ってきた亮介に希沙良は短く尋ね、同時にさっさと歩きだしている。
「あ、クラブの共同制作で泊まりこむってことにした」

置いていかれそうになりながら、亮介も彼に続いて改札を通った。
行き先は自由が丘である。
単独行動を避ける、ということはつまり、できるだけ一緒にいる、ということだ。特に夜は。
やや定員オーバーのきらいがあるが、このまま里見家を本拠にして、敵の出方を待つしかないだろう。
「なあ……」
プラットホームを足早に進む希沙良が、ふと口を開いた。
「ん？」
亮介が見上げる。希沙良は視線をはずした。
「あの『姫』だけど、おまえもやっぱ斎伽忍の所にいるって思ってんのか？」
「……うん」
希沙良の言う『おまえも』がどこにかかるのかはわからぬまま、亮介は頷いてみせた。
乗車位置に立ち止まり、希沙良はいやな顔になる。
「わかんねえな……。じゃあ何か？　あのお姫さんってば斎伽忍の『女』かよ、もしかして」
「そっ……そこまではちょっと……」
あまりに直截的な言われように、亮介が少々焦る。

「ほんっとにおめでたい奴だな、おまえ」
いらいらとふりむき、希沙良は亮介の顔をのぞきこんだ。ぐいと胸元を手前に引き寄せる。
「今朝、夏江さんから電話があったけど！　あんまり良くねえみたいだぜ、水沢……」
「――え？」
亮介が小声で問い返した。
身をかがめ亮介と目を合わせたまま、希沙良が重ねて言い聞かせる。
「おまえの言うとおりだと、斎伽忍と『姫』は二人して水沢を見殺しにしてることになるんだぜ！　いいのかよ、それで！」
「――」
「誰の味方につくかくらい決めとけよ」
亮介の身を突きはなし、そっぽを向いて希沙良はそれだけ言い捨てた。
ゆっくりと視線を下へ移動させ、亮介は何も答えなかった。

一進一退、という言葉があるが、諒の場合、五進六退とでも呼べばいいのか、その病状にはひどく大きな波があった。
「あんまり大袈裟に考えないでくれます？」

諒が顔をしかめる。

昨日の別れぎわと、その様子はほとんど変わらない。枕元で彼を見おろし、亮介はしばらく黙っていた。

「そうよ、亮介君。なんとか食事もできてるしね」

ベッドの反対側から、夏江がそう言った。とりかえたシーツを抱えて、寝室を出ていく。

「あ、それなんだけどねえ、なんと諒ちゃんは右手の爪を三枚ばかり削っちゃって、痛くてしょーがないんだわ、これが」

あっけらかんと諒がそんな言葉を続けた。聞くだけでも痛い。

「てなわけでスプーン持つのも一苦労しちゃって……でも夏江さんに食べさせてもらうのって妙に照れると思わんか？」

「……いいじゃん、なかなか嬉しい機会だろ」

「いやー、緊張しまくりっ。亮介のほうがまだマシだわ」

「マシって何なんだよ、マシって」

できるだけ自然に、亮介も突っこみを入れてみせる。諒が笑っているのに、こちらがひとりで愁嘆場に逃げるなんて……まるで諒が瀕死の病人だとでも言わんばかりになってしまう。

「崎谷君」

ドアのむこうから、呼びかける声があった。十九郎だ。

「ちょっといいかな。相談したいことがあるんだ……」
「あ、はい」
亮介にとっても、ありがたい一言だった。じゃあ、と諒になんとか笑顔を向けることに成功して、亮介は部屋を出た。
少しは休めたのだろうか、十九郎には昨日のような疲労感の影を見出すことはできなかった。代わって、今の彼はどこか鋭角的な空気をまとっている。穏やかな物腰はそのままだが、それでいて何かが違う。
怖くなるほどに毅然とした表情が、仕草のはしばしに見え隠れする。忍の不在を確かな現実として認めたうえで、自分たちのなすべきことを考えたいと彼は言う。そのあらわれということか。
ある意味では、十九郎は忍の代役を引き受けようとしているのかもしれなかった。それは本意ではないにせよ……。
現に、十九郎はもう忍の居場所を求めて歩くことはしないのだ。
「相談、ですか？　俺に？」
席をすすめられて丸テーブルの椅子に腰かけながら、亮介は反問した。
「うん。君にしか頼めない」
正面の席で、十九郎が頷く。

希沙良はソファのほうに片膝を抱える姿勢で座りこみ、自分は関係ないとばかりにテレビを観ている。夏江は台所だ。

「六本木の……結界のことなんだ」

十九郎は、そう切り出した。

忍のマンションに張られた結界は、不動のままである。十九郎がどれほど力を尽くしても破れないということは、何か触媒を——つまり呪符や護札などを用いて、力場を固定している可能性が高かった。そこまで本格的に作られた結界に、外部から力を加えるのは至難のわざなのだ。

「単刀直入に言うよ。崎谷君に、なんとかしてその結界を〈中和〉してもらえないだろうか」

それが、十九郎の提案だった。思いもよらぬことを言われて、亮介はしばし返答も忘れた。

「中、和……ですか？」

やろうと思ってできたためしがないのに。

「うん。無理は承知で、実験してみたいんだ」

静かに、しかし真摯に十九郎が続ける。

「中和能力のコントロールがきかないのはわかっているよ。けれど、いつまでもそのままでいるのは、崎谷君自身のためにも良くない気がする。中和能力は偶然の力なんかじゃない、ほかでもない君の力なんだから……君自身の内側に、その鍵は必ずあるはずだ。俺はまず、そのこ

とを崎谷君本人に信じてほしい。できるかぎり俺も手伝うから……」

亮介にとっては、初めて聞く言葉の連続だった。

今まで、それを誰も言わなかったことのほうが不思議なのかもしれなかった。十九郎は、中和能力を『特別な能力』ではなく、あくまで一個の術力のかたちとして捉えなおそうとしているのだ。

画期的な、発想の転換なのだろう。それが現実にどこまで通用するかは……誰にもわからないのだが。

「……でも……」

亮介がロごもる。

そう簡単に、安請けあいもできない。今までの経験から考えて、成功する可能性は一パーセントあれば良いほうだ。

さらに……。

（自分の意志で？　……）

それは——自分の望みのままに中和能力を駆使する、という想像は——なぜかとても恐れるべきことのように亮介には思える。

無敵の力。

今の自分には、その力は大きすぎるのではないだろうか。もし使い方を誤ったら……例え

ば、味方すら巻き添えにするようなことになったら、その時どんな風に自分は責任をとれるのか。

下手に刺激したら、どうなるかわからない。自分の内側に眠るのは、実は凶暴な獣かもしれない。目覚めさせてしまった後では遅いのだ。

「……怖い、です……かなり……。俺、自分のこともよくわかんないのに……」

嘘はつけなかった。女々しいと思いつつ、亮介はそう答えていた。

「うん……君の言いたいことはわかるつもりだけど……」

十九郎はやや複雑な面持ちで、それでもまっすぐに亮介を見る。

「ただ、君が意図しようがしまいが、中和能力は厳然として君だけのものなんだ。永久に目をそらしつづけるわけにはいかないはずだ。今さら、なかったものとして眠らせるなんてことは無理なんだ。危険性のことを言うなら、もう君は十分にそれを抱えこんでしまっている。こうなった以上はプラス方向にそれを制御するために、努力するしかないんじゃないのか？」

「でも……！」

亮介は何度も首を横に振った。十九郎の言葉は正論だ。正論すぎて人を追いつめる。

テレビはつけたまま、希沙良がテーブルのほうへ視線を転じた。成りゆきを見守るようすで、口は出さない。

「やり方がわかっていれば、試す気にもなるけど……本当に……何をどうしたらいいのか見当

もつかない……そんな状態じゃ……」

野球を知らない人間が、目隠しをされてバッターボックスに立つようなものだ。亮介にはどうしても、それが成功するとは信じられない。無理だ、初めから。

黙りこんでしまった亮介を前にして、十九郎は少しだけ間をおいた。

間をおいて。

無言で、目を伏せて、そして。

「わからないことなら、知ればいい……」

発された声は、抑えてはあったが、しかしこれまでになく厳しいものだった。

「……そう言えてしまうのは、確かに俺の身勝手だ。君にとっては残酷だよ。想像はできるつもりだ。でも、本当の君の気持ちはわからない。俺は君じゃないからね……」

何か言いたげに希沙良が彼を見る。だが言葉は出なかった。

十九郎の怒りは、亮介へ向かうものではないのだ。

それは返る刃。——彼が承知で、十九郎自身へ突き立てる刃だから。

「代われるものなら代わっている……！　だけど俺の力では駄目なんだ！　努力だけではどうにもならない実力差というものがわかるか、崎谷君……君は、そういう格差をすべて超越した所にいるから、そうやって可能性さえ簡単に捨ててしまえるんだ。それこそ残酷だ……」

亮介は目を上げた。

同じようなことを、自分は前にも確かに言われた気がする。頭の隅で、漠然とそう思い出していた。そうだ、山岸が絵の話をした時に……。

十九郎が、かすかに息をついた。

「……ごめん……」

それは、十九郎が謝ることではないと思う。亮介は返すべき言葉を捜し、もどかしく唇を噛んだ。

——がしゃん、と音をたてて何かが割れたのはその時だった。陶器の感触。寝室から？

ハッと亮介が席を立つより早く、夏江が台所からとび出してきた。

「発作だわ」

短く言い置いて、寝室へ姿を消す。

「え？」

何のことだか一瞬つかみそこね、それから亮介は顔色を変えた。諒だ。

激しい咳の発作が予告もなく襲いかかり、全身に響きわたる苦痛と諒は必死に闘っていた。息を継ぐ間もない。あまりの痛みに気が遠くなりそうで、思わず宙に泳がせた右腕が枕元の机に当たり花瓶を倒した。甲高い音とともにそれが床で砕ける。

昨日から断続的にくりかえされている嵐。妖気に対する拒否反応。何度目になっても慣れない。それどころかだんだん悪化している気がする。

誰かが呼びかけている。何本かの腕が、のたうちまわる身体を押さえつけようとする。意志を裏切って手足は死の恐怖から逃れようともがく。苦しい。誰か止めてくれ。誰か助けて。

（死んじまう……！）

心ではなく、脈打つ血液が叫ぶ。鼓動が訴える。『死にたくない』

死は解放。

闇に呑まれてしまえば、この苦しみからは逃れられる。

だけどまだ何もしていない。何もしていない。赦されようが赦されまいが、自分は。この心臓は。この指先は。

こんなにも強く求めるのに。

（貪欲に……）

目をそらしたいほどの。

それとも絶望を選んだほうが楽になるのなら。

永久に続くかと思われる炎獄は、体力も気力も奪った。このまま自分は窒息するのかもしれない。肺も気管も喉も頭も全部が爛れて灼けついて。

けれど。

「諒！」

力尽きそうな掌を、受けとめた温かい手があった。瞬間——。

（——違う）

閃光のように、諒はある一言を思い出していた。違う。違う、自分は……。

長い格闘の末に、しかし少しずつ酸素をとりこむことに彼の身体は成功した。とぎれとぎれに喘ぎ声が漏れるようになり、咳と咳の間隔がひろがる。やがて、さらに長い時間をかけて、呼吸が一定のペースをとりもどす。

その間、ずっと右の手は握られたままだった。誰の仕業かなんて、考える必要さえなかった。

なんとか、じたばたと暴れなくとも耐えられる状態になる。怪我をしないようにと四肢を押さえこんでいた手は離れる。その相手が立ち去らないうちに、言わなければならないことがあった。

うっすらと目をひらいてみる。かがみこむ夏江の姿が見えた。

「……すみません、夏江さん……」

「馬鹿ね、こんな時に優等生しなくていいの！　積もる話は後でね、後で」

痺れた舌を無理に動かしたら、夏江にはかなり本気で怒られた。つい苦笑してしまう。

それから、もうひとり。

夏江を手伝って、名前を呼んで、そして右手をとらえた張本人に——諒は目を向けた。
少しだけ遠い。
「……あのさ……」
「おまえ、今、夏江さんが言ったこと聞いただろ」
感情を殺そうとして、それでも声を震わせながら亮介が言った。
この心配性の泣き虫。ぼんやりとそう思いつつ、諒は意地を通して言葉をつづける。
「でも……ちょっ…だけ、まちがえて……俺、忘れてて……」
「いいよ、わかったから！　後で聞くから、だから今は」
「だめ」
きっぱりと言って、諒はもう一度笑ってみせる。
「あのね……おぼえといて……。今度は俺も、忘れな…から」
「何？」
仕方がないとばかりに、亮介が顔を近づけた。目を閉じて、諒が囁いた。
「諒ちゃんの、存在価値は……強気の二文字……」
そして、ふっと黙ったと思ったら、もう諒は眠りこんでしまっていた。
その横顔を見つめ、亮介は凍りついたように動かなかった。

5 結界

かつん、と階段に靴音が高く響いた。

外の光はまったく入らない造りだ。照明はぼんやりと点いているが、空気が動かない。静かすぎて、深海の底にいるような錯覚を起こす。心なしか寒い。外界は晴れわたって暑いほどなのに。

亮介は腕時計を見た。もうすぐ正午になる。

八階と九階の合間にある踊り場で、十九郎がふりむいた。

「ここだよ、崎谷君」

踊り場の壁に、控えめに階段が表示してある。『8』と『9』の文字が読みとれる。

「そのまま、段を上ってみるとわかる」

十九郎に促されて亮介は先へ進んでみた。踊り場から五段ばかり上ったところで、再び十九郎が呼びかけた。

「そこからこちらを見てごらん。どう見える？」
踊り場で立ち止まっている十九郎に目を向け、亮介は何か違和感を覚えた。その原因は、すぐにはわからない。
「あ……」
数字だ。
いつの間にか、壁の階段表示は『9』と『10』に変わってしまっている。
段をおりて、踊り場の下から壁を見ると、やはり数字は元どおり『8』と『9』になる。踊り場のどこか一点でそれが切り替わるらしいのだが、その境界点の見極めはつかなかった。まるで意識のすきまを狙うように、ふうっと空間がすりかえられる。
よほど気をつけていなければ、九階の存在すら忘れてそのまま進んでしまいかねなかった。これが——斎伽忍のマンションに張られた結界なのだ。
「でも一階分まるまる消しちゃって、忍さん以外の住人ってどうなってるんだろう」
他の階の住人だって、多少は変だと思っているはずだ。
「いや……誰もいないよ」
あっさりと、十九郎がそんなことを答える。亮介の反応はやや遅れた。
「誰も……って。——え!?　誰も!?」
「ああ、知らなかったんだな。この建物はね、すっかり全部、斎伽さんの持ちものなんだよ。

だから……」

唖然とする亮介に、十九郎は真顔で説明した。

しかし十二階建ての高層マンションである。そのすべてを私物化したうえで、九階にひとりきりで住んでいるなんて、常識の範囲を超えまくってはいないか。

「お金って、ある所にはあるんですね……」

感心、というよりは、別世界を覗いてしまった後悔とでも呼ぶべきものを背負いつつ、亮介が呟く。

「それは言えるけど……ただ、あの人が有象無象の他人に囲まれて一つの建物の中で折り合いをつけているさまというのも、想像したら怖かったりするけどね……」

十九郎は少しだけ冗談めかした言い方をした。

「お隣の斎伽さん回覧板ですよ、なんてね」

「……た、正しいかも……」

そんなやりとりで、わずかながらも緊張がほぐれる。

ここへ来たい、と言い出したのは亮介のほうだった。一度はあれだけ抵抗を示しておいて今更、と思われても仕方がなかったのだが、嫌な顔ひとつせず、決心した理由を問うこともなく、十九郎は黙って同行してくれたのだ。

「本当は、この結界の内側に斎伽さんや冴子さんがいるという保証はないんだ。しかし同時

に、いないという保証もない。いるかどうかわからないままの状態よりは、いないとわかってしまったほうが次のステップへは進みやすい」

そして、今のところ自分たちの前に、クリアすべき障害として見えているのはこの結界以外にない。剣司たちが仕掛けてくるのをただ悶々と待つだけでは駄目だ。状況を改善する――例えば水沢諒の戦力を回復するなどの――ために、打てる手は打たないと……。

それが、十九郎の考えだった。敵の動向がまったくつかめぬ現在、ここで成功の見込みもほとんどないような試みに手をつけるのは、賭けといえば賭けだ。

「でも、やっぱり、冴子ちゃんが髪を切られたことと、この結界はとても関係があるような気がするんです。忍さんは結界で冴子ちゃんを守ろうとしているのかもしれない。でなければもっと他に事情があるのかもしれない。そんな、忍さんの考えていることなんて俺にはわからない。だけど――俺は、俺は諒の友達だから……」

ひとつひとつ言葉を選びながら、亮介はそう言った。

忍には忍の意図があるだろう。しかしこちらにもこちらの想いがある。このままでは諒の具合は悪くなる一方なのに、そしてそれを治せるのは冴子だけなのに、その諒から冴子を奪われたら困るのだ。どんな事情があろうと、自分にだって譲れない一線がある。

ここで、冴子を取り戻すためにできるかぎりの努力をしなければ、自分はきっと後悔する。真実を確かめもせずに諦めたら、一生後悔する。

「俺が努力したところで無駄かもしれないけど、迷いすぎて何もしないよりは……俺は、俺にできることをやるしかないんじゃないかって……」

「無駄じゃないさ。無駄じゃないって信じるところから始まるんだからね」

十九郎は力強い言葉を返す。

「そういう風に、『できないかもしれないけど』と少しでもマイナス方向へ考えただけで能力は封じられるものなんだ。『できてあたりまえ』というヴィジョンを持って、自分をそれに近づけていくことが大切なんだよ」

「……そうか……」

「なにも超常能力の世界に限った話じゃないんだ、これは。成功の哲学とでもいうのかな。俺も、父からの受け売りだけどね……」

マインドコントロール。自分に暗示をかけて、持てる力を最大限に発揮する法。十九郎が亮介に教えようとしているのは、その第一歩の心得ともいえた。

「さて……始めようか」

踊り場から二段下がった所に立ち、十九郎は上着の袖から腕をぬいた。傍らにそれを放りだし、身軽になったところで踊り場の床に片手をつく。

「崎谷君、俺の隣に」

「あ、はい」

彼に呼ばれて亮介も、踊り場から階段部分へおりた。
次の瞬間。
ふわっ、と風が起こったようだった。亮介は目を瞠った。すぐ前の光景が陽炎に包まれる。
空間がひずむ。
ゆらゆらと揺れる壁にダブって、どこか別の景色がいくつも走りぬけた。フラッシュとシルエット。見つめていると遠近感が狂う。幻覚？
「よく見てくれ。君になら必ず見える」
隣から十九郎が呼びかける。
目がまわりそうだ。頭を振って、亮介は歪みの中心を見据えた。
踊り場の壁。
余計な幻影は無視するように努め、それらの向こう側に隠されたものへ意識を集中する。
「あ……？」
水鏡のように不安定な空気を透かして、浮き上がってくる何かがある。
――それは階段だった。
上に向かう階段は、亮介たちのいる階段と並んで存在するはずだった。だが、その階段は、壁の奥へ向けて、つまり反対側にのびている。
実際の階段と、ちょうど対称をなして成立する――幻。

しかし、それは本当に幻なのか。今、はっきり見えているほうの階段は確かに現実なのか。すべてが逆転しているとしたら。

「どうだ、崎谷君」

十九郎が尋ねた。亮介は幻から目を離さずに答える。

「階段が見えます」

「階段？　……」

「上に行く階段が、壁の内側に見えるんです」

きっぱりした口調で、亮介がくりかえした。

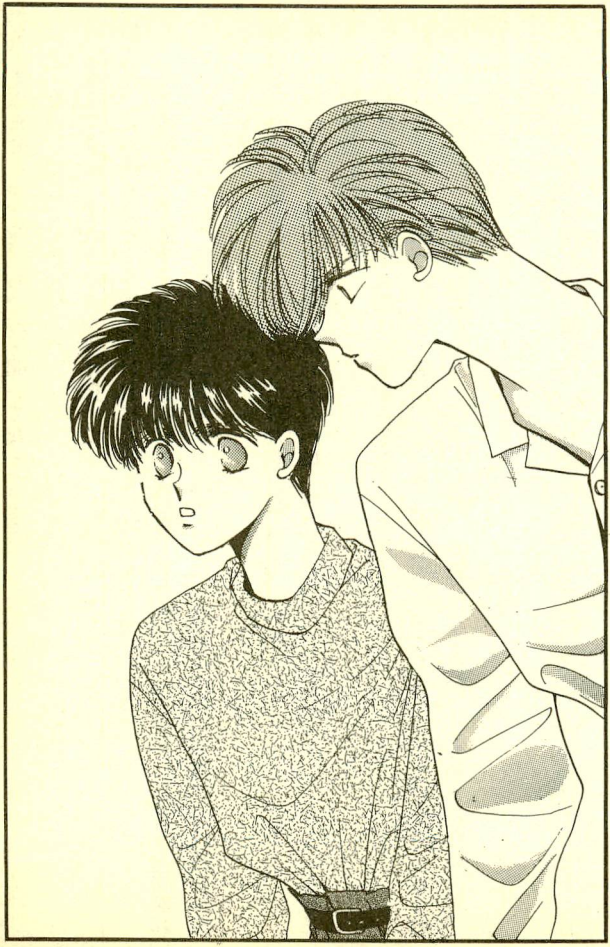
十九郎は思わず亮介の横顔をふりむいていた。視点をまっすぐに固定したまま、亮介は気づきもしない。

普段の亮介からは想像しにくいほどの集中力だった。十九郎には漠然とした気配としかとらえられないものが、亮介の内側では『階段』という像を結ぶのだ。これはもう、感覚が『強い』というレベルではないように十九郎には思える。

「すごいな、君は……」

「え？」

ふと漏らした一言に反応して、亮介が見返った。その表情は完全にいつもどおりの亮介で、十九郎はさらに違和感を覚える。



「あ、すみませんっ、俺、ちゃんと聞いてなくて……」
「いや、たいしたことじゃないんだ」
恐縮する亮介に、十九郎は首を横に振った。
崎谷亮介に対する考え方を改めなければならないのかもしれなかった。
とても普通に——普通すぎるほど普通に見えながら、その実どこか一点で、ひどく人間離れしているのではないか。いや、その『異常』を隠すために、必要以上に『普通』な性格が形成されているのか。
だとしたら、斎伽忍はとんでもなく危険な切り札を手中に収めてしまったことになる。
「俺の力では、こうやって結界を弱めるのが精一杯なんだ。でも、それによってなんとか破るべき『的』は設定できる」
できるだけ事務的に、十九郎は話題を目先のことへ戻す。
「だから、君はその『的』の向こう側に、つまり『階段』にたどりつくことだけを考えてくれればいい。そこにいる自分の姿をイメージするんだ。時間はいくらかけてもかまわないから、焦らないように」
「……はい」
亮介は不安げな色を残して、頷いた。それを見やり、十九郎はなにか言いかけて、しかし目をそらした。

斎伽忍は気づいているだろうか。
亮介さえ味方につけてしまえば、人は伽羅王の力にすら反逆できる。——こんな風に。
そして崎谷亮介は、誰のことも好きになろうとする。その時次第で、誰の味方にでもつくのだ。
それは忌避すべき構図のように思える……。

「え？」
亮介がここにいない理由を聞き、諒は鋭い声を発した。
「ちょっと待て！　なんでそんなこと俺に黙って……」
「おまえがぐーたら寝てたからに決まってんだろ、阿呆」
冷ややかに希沙良が答える。嘘はついていない。
亮介と十九郎の二人がでかけてから、三時間ばかりが経過していた。発作の余波からようやく立ち直って諒が目を覚ましたのは、ついさっきのことなのだ。話したくても話してやりようがないし、そもそも話してやりたいなどと希沙良が思うはずもない。当然の成りゆきである。
「ぐーたら寝てたら起こしてやろうってくらいの知恵もまわんないのか、きーさんは。そーかそーか」

天井を仰いで諒は嫌味に走る。露骨に希沙良がムッとした。
「起こしたら気の毒だから起こすなって崎谷が言ったんだぜ！　あっ、そうか、してみると崎谷は知恵がまわらないわけだ。友達甲斐のない奴だったんだな、おまえ。たしか恩知らずとも言うよな、それって」
「知らなかったなあ、希沙良くんは亮介の言うことなら何でも聞くんだなあ。死ねと言われたら死ぬのかなあ。ふうん、そーかそーか」
「あのなあっ！　それって揚げ足取りと言わねえか!?　あまりの低次元に、言ってて自分で情けなくなったりしねえか!?」
「きーさんって案外ナイーブ……」
「いいかげんにしろっ！　踏むぞ、おまえっ!!」
本気でベッドの上を駆けまわりかねない勢いで、希沙良が怒鳴りつける。諒はさーっと顔色を変えた。
「……そんなことされたら、諒ちゃん、泣いちゃう。うるるん」
「だーっ!!」
癇癪をおこして希沙良が足を踏み鳴らしたところに、ドアが開いた。夏江が顔を出す。
「ちょっと買い物に行くから、後のことよろしくね。それと希沙良、床ぶちぬかないようにね」

「ぬかねえよ、ぬかなきゃいんでしょっ」
希沙良はほとんど投げやりになっている。
「そうだよねー。ここってば、ろーさんの部屋だもんねー」
こそこそと諒が言う。――堪忍袋の緒が切れた。
「踏んでやるっ!!　踏んでやる貴様っ!!」
「きゃー、夏江さーん夏江さーん助けてー」
「諒ちゃんってマゾだったの？　希沙良がサドだからちょうどいいわね」
夏江の一言で、修羅場はあっけなく崩壊した。毒気をぬかれて脱力する二人に手を振って、夏江は笑顔で退場した。
「……やはり夏江さんは大物だったということで」
ぼそり、と諒が呟く。
咳払いをひとつして、希沙良はわざわざ部屋の隅の椅子まで移動した。あまり距離を縮めないほうがよさそうである。
「なんでそんなに遠いところへ行くのだ、きーさんは」
「うるせえッ」
反省の色がない。むかむかしながら希沙良は腕を組み合わせた。
「……ところで」

真顔に戻って、諒が口を開いた。
「さっきの話がまだ終わってない。亮介に結界を破らせようなんて、誰が言い出したんだ？里見さんか」
いきなり厳しい問いを向けられて、調子が狂う。希沙良は顔をしかめた。
「――先に言ったのは十九郎だけど、決めたのは崎谷だぜ」
「やっぱり里見さんか……そうだよな、亮介があんなこと思いつくのは変なんだ。あいつは中和したくてするんじゃないんだから……」
苦い面持ちで諒がひとりごちる。希沙良の言葉を正確に聞いているようには見えない。
「だから！　十九郎はいっぺん諦めたんだけど、崎谷のほうからやるって言い出したんだろうが！」
「同じだよ。亮介ってのは、何か手段があるって教えちゃったら最後なんだよ。自分がどうでも、結局は他人のことで頭いっぱいにして動いちゃうんだよ。そういう人間にそんなこと吹きこむほうが問題なんだよ」
妙に確信をこめて諒が言う。心ここにあらずだ。こいつは俺に向かって十九郎の悪口を言ってることに気がついていないのか、と希沙良が怒るのも忘れて呆れるほどだった。
「そう言ったって、おまえ……あのなあ、あいつが誰のために」
「冴子なんていないかもしれないだろ!?」

希沙良の台詞を遮り、諒がたたみかける。
「あの結界は、もしかしたら忍が敵を封じこめたものかもしれないだろ!?　そうだったら責任がとれるのか、え!?」
「……おまえな、それ、考えすぎって言わないか?」
敵を封じてあるなら、忍は堂々と現れてこちらに恩を売ってもいいはずだ。希沙良にはそう思える。
「ヒスってんじゃねえよ。男なら黙って待て」
「きーさん、人のこと言えない」
「本っ気で踏むぞ、おいっ!!」
「踏みたきゃ踏めばー?　そしたら俺、ろーさんに泣きつくから」
「っ……」
何なのだ、この異様な性格の悪さは。
思わず絶句してしまって、希沙良はしばしプライドを傷めた。それにしても、諒のヒステリーの根深さは尋常でない。
「あのさあ」
眉をひそめながら、希沙良は口を開いた。
「おまえ、崎谷の自主性ってもん、忘れ果ててねえか?」

どうせまた猛反撃が来るのだろうと思っていたら、今度返ってきたのは真っ暗な沈黙だった。

「……時と場合による」

しばらくたってから、ぽつりと諒がそんなことを答えた。

どれくらいの時間をかけたのだろう。

「あ、あ……」

集中しすぎて目が眩み、幻影が一度に自分めがけて迫るような錯覚に襲われて亮介は両手で顔を覆った。気持ちが悪い。

「崎谷君」

十九郎がふりかえる。亮介は階段にうずくまるところだった。

見えすぎるのも、弊害が大きいということか。結界に圧力をかけるのを一時中断し、十九郎は亮介の肩に手をのばした。

「急ぎすぎちゃ駄目だ。少し、休んだほうがいい」

「……だけど、このままじゃ……」

何度も頭を振りながら、亮介が声を押し出した。

「このままじゃ……できない、ずっと……」
「諦めるには早いよ。今すぐにと言っているわけじゃない」
亮介は焦っているのかもしれない。十九郎は慎重に言い聞かせた。
黙って深呼吸をくりかえし、亮介はなにか考えているようだった。
「そうか……」
小さく呟く。
そして、亮介は十九郎を仰ぎ見た。
「里見さん……あの、俺のこと、『殺して』もらえませんか？」
「――え!?」
唐突な発言に、十九郎はその本意をつかみかねる。必死な目を向けて亮介が続けた。
「きっと俺、本当に追いつめられないと駄目なんです。今までに中和が成功したのは、みんな誰かが殺されそうな時だった。だから、いっそのこと里見さんに俺を攻撃してもらえば……」
「……」
返答する言葉を持たず、十九郎は亮介のことをしばらく見つめていた。
「そんなことはできない……！」
強く拒絶する。できるわけがなかった。
「自己防衛本能に賭けるというなら聞こえはいいけれど、君は……」

「だけど、もうこれくらいしか方法が！　方法がないから！」
床に視線を落とし、亮介は拳を握りしめた。
「俺は弱いから、もしそうでもしないと誰の役にもたたない！」
「崎谷君、それは違う。そういう風に考えちゃいけない」
亮介の言うとおりにすれば、もしかすると本当に中和能力を発現させることも可能なのかもしれなかった。しかし……。
「危険が迫って、それでも中和は起きなかったということだって何度もあっただろう。君の言う『攻撃』は生易しいものじゃない。ここで、君に命まで賭けさせることはできない」
「でも！」
「楽な自己犠牲に逃げるのも弱さだよ、崎谷君」
叱るように十九郎が言い切った。はっ、と亮介が身を震わせた。
「君はまだ限界を見ていない。大丈夫だ。君なら、そんな方法に頼らなくても必ずできる。もっと自分の意志を大切にしてくれ」
語調をやわらげて、十九郎がそう続けた。亮介は唇を結び、それをじっと聞いていた。
「頑張ろう、崎谷君。だけど今は休憩だ。俺なら、気長につきあうから……」
「……はい」
うつむいたまま、亮介は頷いた。それから、ふと顔を上げた。

「すみません……」
「いいんだよ」
淡い笑みとともに、十九郎が答える。亮介は階段に腰をおろし、手すりに寄りかかりながら口を開く。
「……里見さんがいてくれて、よかったです」
「……」
かすかな痛みが胸を走り、十九郎は何も言わずにいた。

6 鏡像

「来てしまうかもしれないな……」

どこへ向かうこともなく、消える呟き。聞く者はない。

たどりついてしまうかもしれない。

それはあってはならぬことだったのだが、妨げる気にもなれなかった。

たったひとり、天の理を乱すべき者。シナリオに含まれぬジョーカー。

本当は、あの少年を縛り御することなど、何人にも適わぬことなのだろう。

〈されば野に放ち、ゆくすえを見届けるのみ〉

しかし……。

苦い解答を心の底へ沈め、彼は微笑む。

「その時はその時だ……」

＊　＊　＊

揺らぐ空気。めぐる幻覚。
結界の歪みが近づき、遠ざかる。亮介の瞳がそれを追い変化する。
「もっと……！」
無意識に亮介は口走っている。もっと鮮明に。もっと強く。
もっと力を。
五感がざわめく。ただ一点へ向けて集中する。
できる。なんとかできる。
だから——。
諒の苦しみ。希沙良の怒り。十九郎の痛み。冴子の涙。もうこれ以上。
（……、の……）
もうこれ以上続けさせない。もうこれ以上見たくない。だから。
（忍、さん、の……）
力はある。
だからみんな幸せに。

（忍さんの悲しみ――）

どきり、と心臓が鳴って亮介は息を止める。

一瞬の迷いは視点を拡散させる。たぐりよせた鍵は霧消する。

駄目だ、これでは何も変わらない。もう一度。あきらめないで。あきらめないで。

大丈夫。大丈夫だから。

目を閉じて、自分に言い聞かせて、そしてくりかえし。

時間や空間が混濁して、座標は失われる。

どこかで誰かが呼んでいるようだった。彼方に反響して、亮介の耳まで届かない。

透明な世界。

水平線。闇と光。夜明け？

（悲……し、む人が……いないと……）

（幸せに、なれない、なんて……）

すべての人が幸福になることを祈るのは罪だろうか。

祈りの裏には代償が潜むのか。

（本当に？）

だとしたら。

伽羅王、あなたは……。

「！」

突然、意識の集中が破られた。目の前で爆発がおきたようなショックがあった。急激に現実へ引き戻され、亮介は何度かまばたきをした。

「崎谷君……」

ずっと自分を呼んでいた声。ようやく気づいて、亮介はハッとふりむいた。

「ごめん、崎谷君……支えきれない……」

肩で大きく息をしながら、十九郎は切れ切れにそれだけ言った。踊り場についた腕の力が続かず、がくりと肩が床へ降下する。

「里見さんっ……！」

とっさに亮介は手をのばしていた。十九郎の腕を支え、その身が階段から落ちないよう踊り場のほうへ引き上げる。

「だ、大丈夫ですか!?　何が……」

苦しげに目を閉じて十九郎は答えない。ひどい汗だ。いつの間に、と時計へ視線を走らせ、亮介はさらに愕然とした。もう七時？　最後の記憶は三時だ。四時間もぶっつづけで？　そんなこと全然わからなかった。

その間、休みもせずに二つの力を仲介して……十九郎に負担がかかるのは当然だった。どうして気づかなかったのか。

「ごめん……本当に……もう少しなのに……」
踊り場の床に仰向けになり、十九郎が唇を動かした。
「情けないよ……俺が先に、音をあげて……もっと大変なのは、君のほうなのに……」
「そんなことないです、俺はずっと……！」
言葉が喉でつまり、亮介は代わりに力をこめて頭を振った。
苦しくなんかなかった。精神世界に没入しきってしまえば、錯覚も幻も気にならなかった。
ただ——逡巡していただけだ。
迷っていただけだ。穏やかな空間で。
もう終わりにするはずだったのに。迷わないつもりでいたくせに。思うだけなら誰でもできる。口先ばかりで。
そんな自分の陰で、こんな風に犠牲になる人がいる。自分から見えない所で。そして自分は知らずにその人の幸福を祈ったりする。なんて残酷な現実。
それはきっと、十九郎ひとりではないのだ。もっとたくさんの。そうだ、誰よりも。
（諒が……）
傷つけられて。何度も。自分のせいで。
（俺には見えないだけの）
けれど犠牲は確かにある。

どうして自分はいつも。……いつまでも。

これからも……!?

亮介は唇を噛みしめた。耳鳴りがした。掌が熱くなる。やがて全身が。

「里見さん」

呼びかけたが、返る声はなかった。

意図する以前に、体が動いた。亮介は立ち上がっていた。何かに操られるような動きだった。

そして――。

約五分後に十九郎が意識を回復したときには、亮介の姿は忽然と消え失せていた。

控えめに、体には上着がかけてあった。そして空白の五分間に、十九郎はすぐ近くで一言だけ、亮介の声を聞いたことを憶えていた。

すみません……と。

電話を取ったのは夏江だった。夕食の最後の仕上げにかかっていたところで、鍋のふたを片手に持ったままである。当然のごとくエプロン姿。

「……いなくなった？　どうして目を離したの？　……ああ、そういうこと……」

まるで料理の話でもしているように、夏江の反応はあくまで平静だった。
「それで、あなたはどうするの？　……駄目よ、戻りなさい。あてもなく捜しても何にもならないわよ。結界？　結界が破れてないからって、亮介君が中に入らなかったってことにはならないでしょ。それくらいあなたにもわかるはずよ。……そうよ」
声を聞きつけて、希沙良が寝室のドアを開いた。居間のほうをうかがう。
「どういうこと？」
夏江の声がやや厳しくなる。
「どうしたの？　単独行動は避けるんじゃなかったの？　特に夜は。あなたが自分で言ったことよ。代理でも何でも、今あなたは責任者なんでしょ。それくらいの筋は通せなくてどうするの」
誰からの電話なのか、一発でわかった。希沙良は眉をひそめつつ、丸テーブルの所まで足を運んだ。
六秒間の沈黙の後に、夏江がふっと表情をやわらげた。
「……だわね。こうなったら肝もすわるわよ。大丈夫よ、亮介君も利口な子だから。……わかったわ、それじゃ」
あっさりと電話が切られ、夏江は希沙良に目を向ける。
「あいつ、どうしたの？」

「帰ってくるわよ、これから。詳しい話はその後。ちょっとめげてるから、ちゃんと慰めてやって」

夏江はひらひらと鍋のふたを振ってみせて、そのまま台所へ戻ろうとした。――が。

がたん、とドアの鳴る音がすぐ背後で起こり、ぎょっとして希沙良がふりむいた。

「なっ……何やってんだ、おまえ……」

蒼白な顔色のくせに、壁に背中を預け、なんとか二本の足で立つことに成功してドアの外まで出てきたのは……言うまでもなく天下一の愚か者。

「起きてる場合じゃねえだろ。いくらなんでも百年早いぞ、おい」

希沙良の制止に見向きもせず、諒はふらつく頭を上げた。

「夏江さん、嘘つかないで……教えて」

どこか殺気立ったものを感じて、希沙良が思わず口をつぐむ。

すがるように夏江を見て、諒は掠れがちの声を押し出した。

「どうして……里見さんが単独行動、とるなんて言い出すのか……何が『大丈夫』なのか……教えて。今すぐ。頼むから……」

「……」

驚いたようすは見せず、無表情に夏江はそれを聞いていた。

おもむろに問いかける。

「聞いても無茶しないわね？」
「……うん。しない」
「約束するわね？」
「……うん。約束する」
やけに殊勝に諒が頷く。うさんくさげに希沙良がそれを見た。
「じゃあ、言うけど」
ふたを持ったまま腕を組み、夏江は口を開いた。
「消えちゃったらしいのよ、亮介君。結界の前で」
「――」
がん、と諒が拳で壁を叩いたのは次の瞬間だった。
「だ、から……言わないことじゃないっ……！」
一声、そう唸って、玄関へ駆け出そうとする。すかさず希沙良は横から足払いをかけていた。見事に諒が床に貼りつく。
「ぜんっぜん約束になってねえだろ、それじゃっ！」
「よくやった、と言いたいけどちょっとやりすぎよ、希沙良」
「これくらいやんねえと止まんないだろ、こいつ」
床の上に転がって、痛みと衝撃に諒は呻き声をあげた。

「ひ……ひどいことしやがって……」
「自業自得だ、ばか」
「畜生……今のが原因で死んだら……きーさん責任とってよね……」
「足払いで死んだら笑いものだぜ、おまえ」
ここぞとばかりに希沙良は今までの借りを返す。夏江が間に割りこんで、諒の傍らに膝をついた。
「ねえ、諒ちゃん……あたしも聞いていい？」
「……」
大きく息をつきながら、無言で諒が彼女を見上げた。
「どうして冴子ちゃんが消えたのは平気なのに、亮介君が消えたら一大事なの？」
真意を読みとりにくいポーカーフェイスで、夏江が口にしたのはそんな問いかけだった。諒が一瞬、その表情を凍らせた。
「……答えはすぐじゃなくていいから、そのうち聞かせてちょうだい」
夏江はそう言って立ち上がる。諒をベッドへ連れ戻すように命令されて、希沙良がブーイングの嵐を起こした。
どうして？　……そんなことは考えなくてもわかる。
ちゃんとわかっている。自分には。

片腕に体重にかけて、諒は無理に上体をひねった。
「夏江さん……！」
呼びかけた——直後。
狙いすましたように、肺と気管に激痛が走った。また『発作』だ。抑えきれない。
「おい、バカっ！　だから無茶すんなっつってんだろっ！」
希沙良が怒鳴った。答えることはできなかった。
（畜生……！）

＊　＊　＊

寒い……。
冷気はさらに強まっていた。力をこめて一歩ずつ階段を上り、通路へたどりつくとますます寒さは確かなものになる。
手足が痺れそうだ。
亮介は顔を上げた。
廊下は、奥へ向けてまっすぐにのびてゆく。
水槽の中にいるような気分がした。すべての輪郭がゆらゆらと踊りだしそうで、しかしギリ

ギリで踏みとどまっているようで。
見覚えのある床。壁。天井。よく知っている。
とてもよく知っている場所。
なのに寒いのは――。
（孤独）
それは拒絶ではなく、ただの孤独。
待ちのぞんでもいない。諦めてもいない。淋しさでもない。伝わるのは、ただの孤独。それ以上でもそれ以下でもなく。
そんな風に、ただ孤独だけを感じるひとがいる。
どこで？
ゆっくりと、亮介は歩を進めた。それは泳ぐという行為に似ていた。空間の抵抗を四肢にうけとめながら、しかし身を任せれば少しずつ前方へ流される。運ばれていく。
いくつかのドアの前を通過して、亮介は立ち止まった。
黒い扉。
九〇七号。
何が起きているのだろう、この向こう側で。
この扉を開いたら、なにもかもが崩れ去ってしまうのかもしれなかった。破滅への秒読みが

始まるのかもしれなかった。
それでも。
パンドラの箱のごとく、あらゆる悪しきものを世に放つことになっても。
（孤独）
ひどく空虚な孤独。
それを前にして引き返すなんて、もう。
把っ手を動かすと、あまりにも簡単に扉は開かれた。
誰もいない。壁の合わせ鏡。そして居間へつづく短い廊下。さらに扉。
土足のまま踏みこんで、亮介は鏡の中の自分に目をやった。まるで別人を見ているような気がした。何人も何人も、無限に重なる他人の像だ。
いつ本人の意志を裏切って勝手に動きだしても不思議はない——虚像の群れ。
どうして斎伽忍は、こんな所に鏡を必要としたのだろう。
視線を進行方向へ戻し、亮介は居間の扉に指をのばした。
——……なんて……
ふっ、と聞こえてくる幻聴。
——いつ……なんて、……ったりしますか？
——わかることもあるよ。

（!?）

亮介の動きが止まる。

わかることもあるよ。微笑。嘘ではなく。

――今度こそ終わらせなければならない。手段は選ばない。

――……は免れぬでしょう……の内には。

――やむを得ぬ。

決意。それも嘘ではなく。

――天よ。

汝、我に問う。

――忍土にありて我のみが夢を見つ。

三千世界。

苦しみばかりが待つこの現世を忍土と呼ばねばならぬ。その意味を。

その意味を。

――浄土にありて……

伽羅王、あなたは……。

（これが?）

息づまる想念に亮介は全身を縛られた。これが？　これが斎伽忍の……。

触れてはならない部分に、自分は踏みこみはじめている。亮介が扉へのばした片腕を、それ以上進めかねた——その時。

音もたてず、自動的に扉が動いた。亮介は息を呑んだ。視界が一気に広くなる。

ブラインドをおろした居間には、ごく少量に抑えた照明の光と澄んだ空気が場を占めて。

そして。

「あ……」

そして亮介は見た。

室内の中空に浮かぶひとつの影を。

天井に触れそうな高みで、目に見えぬ十字架にとらわれて眠る彼女を。

光と影の境界線に浮遊して、無形の枷へ両の腕を預け、まるで蜘蛛の糸にかかった蝶のごとく美しい姿でこの空間から切り離された——それは冴子だった。

「やあ」

ソファに脚を組んで、ひどく自然に斎伽忍が亮介を迎えた。

「やっぱり来てしまったね……」

7 封印

そこにいるのが誰なのか、亮介にはしばらくわからなかった。
「お入り。来てしまった以上は、追い出しはしないよ」
彼が促す。とても穏やかに。まるで何事もなかったように。
しかし、よく目を凝らせば変化は明らかすぎるほど明らかだ。
こんなに力ない表情を有する人だっただろうか。椅子に預けた身体の線は細すぎて、立ちあがる余力さえ危ぶまれる。もともと透けそうに白い肌が今では青ざめて見えてしまう。額にかかる黒髪はかすかに乱れ、ただ瞳だけが——ふたつの瞳だけが光を失っていない。
瞳だけが、斎伽忍の色を手放していない。
「忍さん……」
憑かれたように、亮介は呼びかけていた。
これは忍だ。

確信があった。これは『忍』だ。
彼へ向けて歩をふみだす、その亮介の背後で扉はひとりでに閉じた。
「どうした?」
忍が問いかけた。亮介は彼の前で立ち止まる。
何から話せばいいのだろう。いざ忍を目前にすると、言葉は一向に生まれてこなかった。
「どうした? 僕に用があって来たのだろう」
再び、忍がそう尋ねた。単調だったが、決して冷ややかではなかった。
知らないのだろうか、彼は。外界で何が起こり、そして亮介が何故ここへ来たのか。
「忍さんは……」
ゆっくりと、亮介は口を開く。
「忍さんは……諒を、見殺しに、したんですか?」
「――」
表情を固定させたまま、忍は答えなかった。
そこから感情を読み取ることは不可能だった。
だが亮介にはわかるような気がした。思い上がりかもしれなかったが、それでもわかるような気がしていた。忍の……それは、驚愕ではないだろうか。
もしも本当に彼が、知らなかったとしたら?

誰もが前提においた『万能の』斎伽忍が虚像だったとしたら。
忍はふと目を伏せたようだった。
「君が、そう思うのか？」
今度は、亮介のほうが沈黙する番だった。
支える腕に力をこめて、忍が立ちあがった。その動作は普段の彼からは考えられぬほど重く、忍の身体のどこかが不調を訴えていることは一目瞭然だった。
「ついておいで。君の話を聞こう」
忍は部屋を横切り、キッチンのむこうにつづく扉へ足を運ぶ。亮介はそのあとを追おうとして、しかし宙に浮いたままの冴子を仰いでいた。彼女はどうなるのか。
「冴子は僕が封印した。一時的に、すべての生命反応を断ってある」
ふりむいて、忍がそう告げた。
「本体が封印されている以上、傀儡も決して目覚めないからね。これは時間稼ぎにしかならないが……今は」
永久にこのまま冴子を眠らせておくわけにはいかないはずだ。そんな亮介の思いを察したかのように、忍は言葉をつづける。
「今は、この方法しかとれない。そういうことだ」
それがどのような理由によるのか、亮介にはまだ推測もできない。

私室への扉を開き、忍はそこで一度、立ち止まった。
背後に立つ亮介に目を向けることはせず、声だけで語りかける。
「……諒は……」
「え？」
亮介が小さく聞きかえす。さらりと忍は髪を揺らした。
「いや。僕が、尋ねるべきことはない」
そして、それ以上なにも言わずに忍は歩を進めてゆく。
細い通路が、居間と私室をつないでいる。私室の入り口からは、壁を埋める書物がうかがえる。書斎、なのかもしれない。そう観察してから、亮介は前を歩く忍の背中へ視線を戻した。
自分よりもはるかに優れた、自分よりも年上の、自分よりもずっと強大な力に守られているはずの彼。
なのに……今は、亮介の内側で、なにかが変質しようとしていた。それはとても漠然としすぎていて亮介自身にも把握できない感情だった。
ただ。
その腕を支えることができたら——と。
手をさしのべることも許されぬ気がして見つめるだけ。それが今の自分。けれど。
（この人を支えられたら）

義務感でも同情でもなく、もっと確かな必然でこの人を支えられたら。
いつか……。
「牙」
膨大な量の本にかこまれたその書斎は、デスクがひとつ置かれているだけの小さな部屋だった。スタンドの淡い光が唯一の照明だ。
忍が呼びかけると同時に、どこからともなく黒い猫が姿を現した。
はっ、と黒猫は亮介に目をとめ、なにか問いたげに忍を見る。しかしそれは一瞬のことだった。あらゆる惑いは奥底へひそめられ、牙は静かに亮介の足元へ歩みよった。
「ようこそ……」
低い声は無表情に響き、そこになんらかの意図を見出すことはできなかった。

「冴子の封印を解けというわけか？　……それはできないな」
亮介の話を聞いた忍の反応は、あまりにも淡泊なものだった。悪意や迷いが含まれない分、かえってそれは残酷だ。亮介は声を失った。
「……どうして、ですか？」
いくら髪を切られたといっても、傀儡が動きだすのは三日後の夜のはずだ。まだ時間はあ

る。

「どうして、時間稼ぎなんてしなきゃならないんですか……？　それより諒の妖気をぬいてもらって、それからみんなで傀儡を倒せば……」

言いつのる亮介の正面に、デスクをはさんで椅子にかけ、忍は黙ってその言葉を受けとめていた。

「皆で、か？」

ぽつりと、問いかえす。

「傀儡が動けば剣司もそれを追う。三将の一人と、配下の『髪切り』と、そして冴子の傀儡を一度に敵にまわし、今のおまえたちに互角に戦えるだけの力はない」

「……」

そう言いきられてしまうと、反論のきっかけをつかまえるのは至難のわざだった。

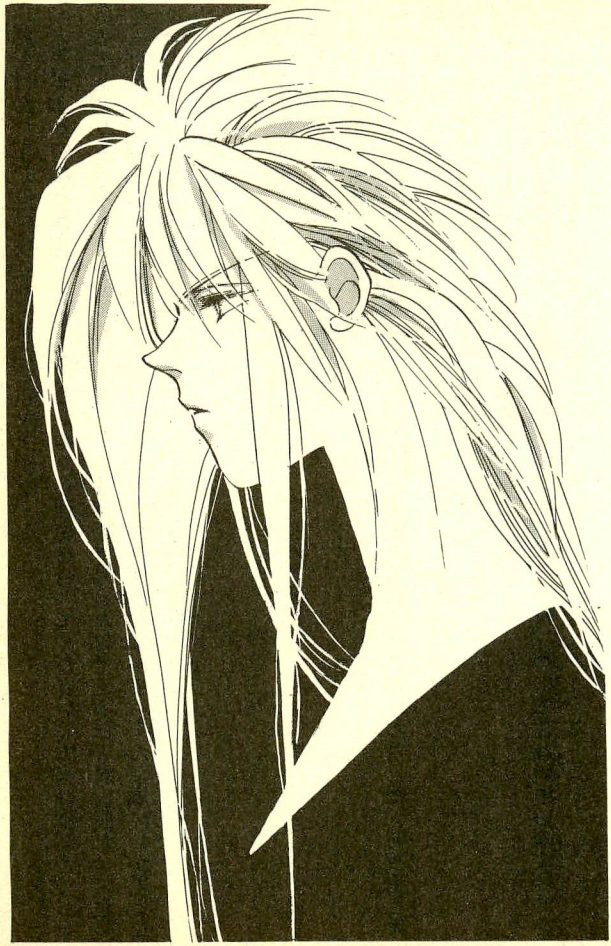
「だから、今では駄目だ。僕が動けるようになるには、まだ時間がかかる」

忍が、動けない？

それはどういう意味なのか。亮介は忍の表情をうかがった。それだけでは、なにもわからない。

忍のやつれようが、その解答を握っているのだろう。そんな想像はできる。しかし——。

「だけど、忍さん、諒が待ってるのに……！」



熱をこめた亮介の声に、忍は無言で顔を上げた。
「方法があるのなら教えてください。ないのなら理由を言ってください。本当は誰だって、そんなこと思いたくなんかないのに、だけどこのままじゃ考えれば考えるほど希沙良だって里見さんだって、諒にだって、忍さんが諒のことだけを切り捨てたなんて、そんな風にしか思えなくなって……それでまたみんな辛くなって……そんなのは俺はっ……！」
「しかしそれが真実だとしたら？」
「――？」
亮介が絶句する。
それを見やり、忍はやがて微笑を浮かべた。
美しすぎる――氷の微笑。
「僕にとって、諒の存在は意味を失った。だから切り捨てた。それだけのことだ。何故そう考えない？」
実に簡単に、忍がそんな言葉を口にする。
がしゃん、とデスクが鳴り響いたのはその直後だった。
さらに重ねて、亮介はデスクの板へ自分の拳を打ちおろした。声にできない思いのすべてをその行為に集約させて、何度も何度も。
「嘘をっ……」

数度目の打撃とともに、ようやく絞りだされる訴え。
「嘘を、つくなら、もっと……！」
「――そうだな。まるで茶番だ。やめよう……すまなかった」
渾身の力をデスクにぶつけたまま、亮介は顔を伏せてしまう。笑みを消し、忍が呟いた。
「思わぬ無茶をするんだな。怪我をするよ」
亮介の拳へ目を向け、そうつけくわえる。
亮介は答えなかった。痛みはなかった。
忍はわずかな間、なにか考えているようだった。
「……牙」
ふと、彼の〈使〉に呼びかける。気配もなく足元に控えていた黒猫が、するりと身を起こした。
「おまえから、亮介に話してやるといい」
「私から……で、よろしいのですか」
「おまえがそれを望んでいるように思えるんだが、違うのか？」
確認した牙に、忍は逆に問いを返す。さりげない言い方で、彼の本心は覆いこまれている。
牙は無言でその任をひきうけた。
忍が椅子から立ち上がった。

「私は少し休む。結論が出たら、知らせてくれ」
「あ……！」
その時、ひらめきのままに亮介は口走ってしまっていた。
「忍さん……具合が悪いのって……もしかして、〈空の者〉の力が強すぎて、それで」
去ろうとしていた忍が、硬質な眼差しを亮介へ投げた。はっ、と亮介が息を止める。
それで？
「……それで『器』の生命力が限界に近づきつつある、とでも言いたいのだろうが、それは違う」
他人事のように忍が答える。
「時間なら、まだ残されている。……狂気と引き換えにすればの話だが」
そして彼の姿は奥の部屋へと消えた。反問は許されなかった。
亮介は茫然と立ち尽くしていた。
言わせてはならぬことを、言わせてしまったのだと……気づいていた。

「……〈識格〉という言葉があります」
淡々と、牙はそんな風に語りはじめる。

「意識、とだいたい同意義のものと考えてください」

亮介ひとりを相手にして、牙は人の姿に戻っていた。彼の本質にもっとも近い、物静かな青年の像。床に座りこむ亮介の前に、自分も膝をつく。

「人に憑依してその人格を乗っ取ってしまう〈妖の者〉と異なり、〈空の者〉は条件の合致する赤子をえらび、その内に宿って転生を果たします。この場合、『器』となる者の識格が前面にのこり、〈空の者〉の識格は裏側へひそみます。そして互いに影響し、ひとつの人格を形成するというわけです」

そうやって、何人もの『伽羅王』を牙は見てきたのだ。

時代を超え、主の名はただひとつ。しかしある時の彼は激しい気性を持ち、ある時は雪のようにはかなげで、さらにある時は暴君のようでもあり……そしてそのすべてが伽羅王だった。

「九百年の昔、伽羅王は自らを封じられました。正しくは、自らをもって九那妃を封じたのです。しかしそれは時が至れば効力を失うものでしかなく、真の決着は未来へと委ねられました。つまり、現代へ」

「忍さんに……」

亮介が呟く。

「そうです。ですが、九百年の歳月は伽羅王から多くのものを奪いました」

どこまでも牙の言葉は冷静だった。抑えすぎるほどに抑えられて。

「斎伽の血脈は本来、十一の『家』に分かれ、それだけでひとつの里を構成します。本来はそうなのです。そしてそのほぼ全員が術者として生まれ、さらに空者が常に数名は転生をなし、伽羅王はそれらの者すべての頂点に立つ方でした」

「……」

「何もかもが失われてしまった……」

そう言って、牙は黙りこんだ。

朋友も、兵力も、そして〈使〉さえ失って彼は再生した。

そのまま、檻の内で眠りつづけることも、彼には許される選択だったはずだ。飾られて、人形のまま、一生を終えても責めるものはなかったはずだ。

だが『忍』は選んでしまった。戦うことを。檻から解放されるためには、宿命を受けいれ、自力で打ち勝つしか法はなかった。

虚構の楽園——城塞のごとく。誰からも守られ、包みこまれ、羽根をもがれて自由を失う。高い塀に囲まれた広大な屋敷で。

彼は剣をとる。楽園を出るために。そして解放はなされたかに見えた。

「きっと……あなたがたの存在が、忍様の決意を促したのでしょう。私が『呼ばれ』たのも、決戦の近い証なのだと思えます」

「決戦……」

イメージのしにくい言葉だった。亮介は口の中でくりかえしてみた。

「ただ、私には不安が残りました。あの方の、持って生まれた術力は強すぎるのです。かつてないほどに。斎伽の血が濃くなりすぎた結果なのか、九百年間の空白が原因なのか……」

強すぎる力は諸刃の剣となり、彼に新たな足枷を担わせる。

術力の負担は彼の身体をさいなみ、伽羅王の識格は支配力を増し、人としての存在と神としての存在はせめぎあい、その調和は乱される。

より神へ近づく『伽羅王』を術力で抑えれば、その反動は人である『忍』へ返り、肉体も意識もおかされて、正常な機能をとりもどすには時を待たねばならない。

〈空の者〉の寿命は『玉』を喰らうことで延ばされる。亮介は以前、諒からそう聞いたことがある。寿命、なら延ばすことができる。けれど『忍』の自由は、彼自身の生命は——生きる意味はどこへいくのか。

誰もそのことには気づいていないのだ。

「これまでにも、あの方は何度もその狭間で苦しまれてきた。しかし、今度のように最悪の状況で倒れることは、あってはならぬことでした。それは今回にかぎらず、今までも、これから先も起こり得ることだったのですが。

ですから、戦いが進むうちに、あなたがたが伽羅王の力を借りずして勝たねばならない局面に立たされることも、本当はわかっていた。予測はできたのです。私にはその時、一人の犠牲

も出さずにあなたがたが戦いぬけるとは思えませんでした。それを申し上げると、あの方は……やむを得ない、と答えられた」

そこまで話し、牙は顔を上げた。初めての感情が宿る。それは切望に近いものだった。

「あの方を責めるなら、まずこの私を責めてください。私自身は、それでいいと思ったのです。それでも伽羅王が昔のように戦いつづけるのなら、どれほどの犠牲があろうと私はかまわない。罪ならば私が負います。そのために私がいるのです」

「……」

責める、という反応は亮介の内側からは出てこなかった。亮介は黙って首を横に振った。

「ですが……」

牙の声に曇りが生じる。

「こうして、現実に『その時』に直面して……そうです、あの方は『水沢諒』という犠牲を出してしまった……」

それで果たして忍が『痛み』を覚えたのか、牙に知るすべはない。

知るすべはないが、その想像は……怖い。

伽羅王ならば、雑兵の一人や二人、いくらでも切り捨てることができる。大の利のために、小の味方を殺すこともできる。頂点に立つ者として、それは当然の業。

これを、亮介に話すべきだろうか。迷いながらも、牙はたったひとつ、亮介にしか明かせな

いことを言葉にしてしまっていた。
「きっと……あの方は、あなたがたのことを好きなのです」
「……え？」
亮介が目を瞠った。
「勝手な解釈です。このような僭越は、許されることではありません。〈使〉として、私はとうに失格なのでしょう。ですが……あなたにだけは言わせてください。聞かなかったことにしてくださっても結構です」
牙が続ける。
「今回のことでいうなら、あの方は初めから冴子様を封印すべきだった。しかし彼女を束縛できなかった。代わりに、彼女を水沢諒の近くへ置き守らせようとした。水沢諒を信じてしまった。冴子様を哀れんでしまった。それだけで、すでに伽羅王としては甘すぎる」
「……でも、それは」
ふと気づいて、亮介は口をはさんだ。
「それこそ、冴子ちゃんが髪を切られるかどうかなんてわからないうちから、あんな封印なんて……仮に切られたって、傀儡なら諒も里見さんも、忍さんだって燃やせるって……」
「ああ……あなたにまず、そのことを話さなければならなかったのですね……」
牙が呟いた。

その目を伏せて、少し沈黙する。

「本当は……このことをあなたに知らせずにいたのも、あの方の優しさ——いや、弱さだったのかもしれません」

そして、亮介と目を合わせぬまま牙は言葉を続けた。

「冴子様の髪は、なんとしても守られねばなりませんでした。なぜなら彼女は、純粋な斎伽の血統を受け継いでいるから……」

亮介が絶句する。その表情を見ぬようにして、牙は話す。

「おそらく傀儡はその影響を受け、〈発火〉によっても倒せぬほど強大な力を持ちます。三日間の期限なども無効となります。今のあなたがたの手に負える相手ではありません」

「……」

だから、忍が復調するのを待つしかないのだ。どれだけの時間を必要とするかわからなくとも。

「動きだした傀儡に結界は通用しません。一度でも、冴子様の封印を、そしてここを包む結界を解いたら最後です。あなた自身を含め、忍様は戦力のすべてを失うことになりかねない。それを避けるためには、今はこうして時間を稼ぐ以外に途はありません」

きっぱりと牙が言いきった。

それは、全体を守るために諒の存在は無視するという宣告だ。

「純血……？　でも、それは……」

とぎれとぎれに、亮介が声を押し出す。

何もかもが失われた――牙はそう言った。ならば、斎伽の純血を保っているのは……。

「はい。十一あった斎伽の『家』のうち、現代まで引きつがれたものはひとつきりでした。あなたがたが〈本家〉と呼んでいるのが、その――『七瀬』です。そして冴子様は」

機械のように単調に、牙が答える。

「七瀬の長女。忍様の、ただひとりの妹君にあたります」

斎伽、という名の家は存在しない。それは一族を総じて呼ぶときの、特殊な名称なのだ。

七瀬忍があえて『斎伽』を己の姓として選んだのは、まず何よりもわかりやすいかたちで総帥の位を示そうとしたからだろう。

彼の唯一の妹は、その恵まれた血統にもかかわらず〈空の者〉としては生まれなかった。そのことは少なからず周囲を失望させたという。

〈空の者〉の降臨は、はっきりとした事実で証明される。

神隠し、だ。

生まれて数日後に赤子が忽然と消え、約一年の時を経て帰還する。――神として。

「七瀬の純粋な血も、もはや限界にきています。ここ何代かで、極端に子供が生まれなくなりました。それはそうです、他の『家』と交じりあうことができないのですから、斎伽の血を守るためには、どれほど近い間柄でも一家のうちで婚姻を結ぶしかありません。いかに無理を通しても、純血を保ち、空者降臨を待ちのぞむ。それが唯一無二の命題なのです」

二人の両親はいとこ同士だった。

現在、両親ともに健在ではあるが、すでに親と子の関係は成立していない。神に昇華してしまった息子も、神になれなかった娘も、それぞれの意味で、彼らにとっては他者なのだ。

ひとりは、期待を過剰に超越した者として。

ひとりは、期待を過剰に裏切った者として。

「純血種だという条件だけで、今度の傀儡のように、妖者にとっては絶好の標的となります。しかし忍様にはさらに別の条件によって、冴子様を守る義務があるのです。……わかりますか？」

「義務……って」

亮介はぼんやりと問いかえした。

一度に明かされた情報が多すぎて、今ひとつついていけない。

それに、牙の説明も、いきなり飛躍したように亮介には思えた。頭の中で意味がつながらない。

ヒントはあるような気がした。だが亮介の発想には、解答を導くべき要素が欠けていた。

「あなたのそういうところが、あの方を安心させるのでしょうね……」

吐息まじりに、牙が呟いた。

だからあなたには、そのままでいてほしかった。そう語ることは許されず、牙は面を上げた。

真実を告げるために。

8 行方

『……いつまでそうしている気なんだ？』

十数日間の空白ののちに、彼が再び姿を見せる。

問いかける声は、冷ややかに響く。怒りや苛立ちは含まれず、ただ冷たいだけだ。体温も感情もない。それが気に障る。

マネキンではあるまいに……。

『まるで人形だな。自分の意志では動けないのか？』

こちらの考えとほとんど同時に、彼もまたそんな言葉を発する。

同じ穴のムジナ、か。同情か。底が浅い。

『縛られることに慣れてしまったのか。ならばおとなしく縛られていればよかったものを。よく抵抗などできたものだな』

挑発。乗ってなどやるものか。

気まぐれに現れては去るだけの――傍観者。
『だが、どう欺いたところで亡霊にはなれまい』
忍は笑ったようだった。それは嘲笑に似ていた。
『生きている以上、死人の真似をしても醜いだけだ』
『だったら殺せばよかったんだ、殺しちまえば!!』
毛布をはねのけ、諒は怒鳴ってしまっていた。
『それくらい簡単だろう、てめえには！　利用できない連中は見殺しにするくせに!!　殺したくせにっ……!!』
『残念ながら、利用できる人間は生かしておく主義なのさ』
いともたやすく、忍がそう答えてみせた。かっ、と怒りですべてが見えなくなり――数瞬後、諒は思いきり部屋の壁へたたきつけられていた。
殴りかかったはずの拳は、彼まで届かなかった。手も触れずにはねとばされたのだ。忍は無表情なまま部屋の中央に立ち、何も起こらなかったようにこちらを見ている。
『その程度か』
ぽつりと、彼が呟く。
『ベッドの中でどれほど力を蓄えたかと思えば……この一カ月、ただ子供のように泣いていただけなのか』

『黙れ！　黙れ、黙れっ!!』

再度の挑戦は、しかしあっけなく阻まれた。がしゃん、と派手な音とともに、諒の背はサイドテーブルへ吹っとんだ。

『どうした？　その程度で終わりなのか。死を覚悟したにしては、あまりに拍子抜けだな』

『……ば、化け物のくせにっ……』

思うように動かない身体を、諒は無理やりひきずり起こす。

『化け物のくせに、なんの権利があって、そんな口っ……』

『権利？　権利ならあるさ。おまえの命を拾ったのはこの私だからね。……慈善事業などと勘違いされては困るな』

『誰が……頼むかよ、そんなこと！』

とびかかり、指先もかすめぬうちに殴り倒される。そのくりかえし。

忍はただ立っているだけだ。腕一本動かすこともなく。人間業でないことはわかっていた。しかし引きさがる気にはならなかった。

そしてその間、忍は決して立ち去ろうとはしなかった。いっそ根気が良いと……言えるほどに。

荒い息をつきながら、諒が床にうずくまる。

部屋の中は目茶苦茶に乱れてしまっていた。

ぐいと諒は片腕で額をぬぐった。鮮血がシャツを染めた。体のあちこちが悲鳴をあげている。まだ本調子でないのだと、警告を送ってくる。――一度、妖者に憑かれた体は。

『相手が化け物であろうと神であろうと、敗北は単に敗北だ』

見下して、忍がそう言った。そのまま、背を向けて立ち去ろうとする。

『待ちやがれ畜生っ……！』

それが、最後のチャンスだった。気力だけで足元を蹴り、諒は跳躍した。両の掌に光が宿る。無意識のうちに。

なにげない仕草で忍がふりむいた。

次の瞬間、容赦もなく諒の身は床へ打ちのめされていた。

無言の一瞥を投げ、忍は部屋を出てゆく。その足音だけを頼りに、さらに諒が頭を持ちあげようとしたときだった。

『いいかげんにっ……』

割りこんでくる高い声。

『いいかげんにしなさいよっ！　……』

無理やり体を押さえこむ細い腕。しがみつくようにして。

『女は黙ってろっ！』

反射的に諒が怒鳴りつける。

『冗談じゃないわよ、誰が黙るのよ、バカじゃないのあんた、こんなことしたってただのバカじゃないのっ！』

こめかみから流れる血が目に入り、視界は赤く濁ってしまっている。相手の顔をよく見ることはできなかった。

その腕を振りほどこうとしたら――。

『もうっ……』

目の前が闇と化した。やわらかい感触。

諒の頭を両腕に抱きこんで、叱るように冴子が。

『もう、泣かないでよっ……！』

泣いてなんか、と言いかけて、諒が口をつぐんだ。

傷ついた全身を床に投げだしたまま、言い返す。

『おまえ、こそ……泣いてんじゃねえよっ……』

「……え？」

はっ、と諒が目を見開いた。

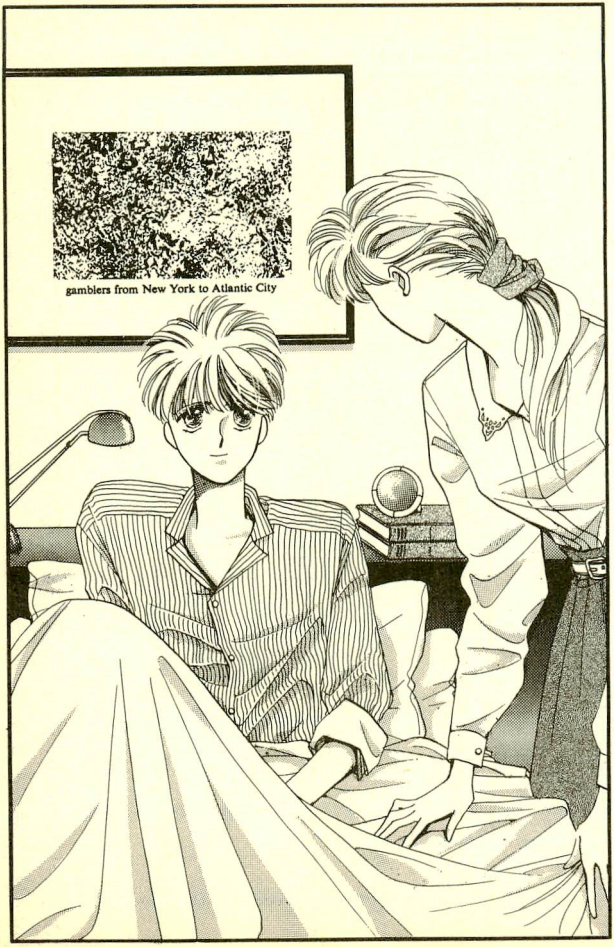
「あら、おはよう」

枕元で、夏江が手を振ってみせる。
「どうしたの？　タイムスリップしたみたいな顔してるわよ」
「……」
ギャップがありすぎて、しばし何がどうなったのかわからない。諒はぼうぜんと夏江の顔を見上げた。
「ああ……そっか……」
夢。それは二年も前のこと。
「よく憶えてたな、俺……偉いかもしれん」
「え？」
「いえいえ……」
訊きかえす夏江に言葉を濁して、諒は考えこむ。
昔のことは――特にあの『事件』周辺に関する記憶は、実はほとんど残されていない。本能による自己防衛だ。意識の表層からは追いだして、精神のバランスが崩れてしまわぬように。
それでも……。
すべて忘れてしまうには、忍も冴子も、あまりにも深く関わりすぎている。出会いの瞬間から。
「……夏江さん、俺はね」

ぽつりと、諒は切り出した。
「ちょっと失敗してしまいましたね……」
「なあに？　それ」
夏江が尋ねる。
「うん。なんたることかですねえ、俺は三将軍の一人ごときを前にして『負ける』なんぞと思ってしまったんですよ」
まっすぐに天井を見つめて、諒が続けた。
そうだ、あれは信じがたい失敗だ。殺される、と悟ってしまうなんて。
戦うより先に、敗北を認めてしまうなんて。
「あああ、諒ちゃんもトシなんでしょうか。昔はこんなじゃなかったのに」
「こおら水沢、いくつなんだオマエは」
「十六です。わはは。あ、夏江さんのは訊かないであげましょうね」
「一言多いわよ」
「なはは」
笑ってみせて、諒は目にかかる前髪をかきあげる。
「しかし本当は、この水沢諒に勝てる奴なんてのは世界中に、そうですねえ、ひとりもいれば十分なんですよ。ま、いずれは勝ちますけどね、そいつにも」

その言葉には、妙な自信がこめられている。夏江が興味深げにふりむいた。
「で、誰なのよ、その名誉ある『一人』は。亮介君じゃないんでしょ？」
「あっ、それは近いなあ。でも正確には、亮介くんってのは水沢諒が『負ける』唯一の相手だったりするんだなあ」
「そうか、わかった、その調子で水沢諒が『勝てない相手』とか『負けそうな相手』とかが今後ゾロゾロ出てくるのよ」
「な、夏江さんは無敵の諒ちゃんをそんっなにボロ負けさせたいわけですか？」
夏江の発言は、かなり正しい。そうやって大切なものを増やせば増やすほど人は弱くなるのかもしれない。
けれど、それでも。
水沢諒に勝てる相手は、今のところひとりきりだ。これだけは譲れない真実。
誰が何と言っても。——たとえ当人にとって不本意でも。
「というわけで……」
よいしょ、などと呟きつつ諒は上体を起こそうとする。ぴしゃりと夏江が叱りつけた。
「だーめーよっ！　どうせまたぶっ倒れるだけよっ」
「ぶっ倒れたらまた起きあがればいいんです」
おそろしく強引な理屈は、しかし夏江には通用しなかった。

「よそ様のお子さんを預かる立場としては、若者の暴走を見逃しにはできないの！」
「むやみやたらに青春の暴走をやっとるわけではないんですっ」
「突発事故ならかわいげがあるけど、確信犯は野放しにできないの！」
「そこまで俺、無茶苦茶やるなんて言ってませんでしょっ」
涼の台詞は大嘘である。今の状態で起きあがって六本木のマンションまで行こうというだけで、すでに立派な無茶なのだ。
「元気な涼ちゃんって、実はとっても迷惑野郎だったのね」
「歩く公害ですか、俺は」
「とにかく駄目なものは駄目」
ここで無理に動いたら、夏江は希沙良あたりをけしかけて実力行使に出るかまえである。過激な点では、お互いにたいして変わらない。
「そもそも六本木なんかに行っても、やることないでしょうに」
「冗談じゃありませんよ」
涼が真顔になり、きっぱりと言いきった。
「夏江さん、俺の存在価値は強気の二文字なんですけどね、俺の存在意義は『亮介くんを守ること』に決定したんです」
「……ひらきなおったわね」


gamblers from New York to Atlantic City

「ひらきなおりまくりですよ。考えたって結局同じですからね、もうやめました俺は。亮介くんほどの人が、俺に守られたくらいで駄目になるはずないでしょ。そういうことなんです、つまり」

少なくとも今なら、そう思えるから。

これから先、どうなるかなんて諒は知らない。ただ、今の崎谷亮介はひとりだけ、無条件に……そうやって関わることを許されて。

「諒ちゃんの発想で不思議なのはそこなのよね」

腕を組みあわせて、夏江が口を開く。

「女の子みたいに亮介君を大切にしてるくせに、肝心な紅一点の冴子ちゃんについてはずっと冷たくない？」

「それなんですけどね」

ごくあっさりと、諒が答えた。

「答えは簡単なんです。俺ってば冴子より亮介のほうが好きなんですね。うん。すごくわかりやすいでしょ？」

「……今の言い方はちょっとかわいくなかったわね」

夏江が顔をしかめる。

軽く笑おうとして、諒もふとそれをしまいこんだ。別の要素がその笑顔に含まれてしまいそ

うで。
「かわいくない……確かにかわいくないんですけど」
「諒ちゃんらしくないでしょ、そんなのは」
「確かにそうなんですけど」
らしくない……けれど。
けれど、冴子は違うから。
「なんで夏江さんはそんな風にこだわるんでしょうね。俺にはわからんです」
「……ふうん？」
「本当にわからんのですよ」
とても自然に、諒がそうくりかえした。
——亮介が結界に姿を消してから、丸一日が経過しようとしていた。

＊　＊　＊

日光を遮絶した空間では、時間の流れはまったく見えなくなる。
いつ眠りいつ食べたのか、そんな記憶もはっきりとしない。もしかしたら一睡もしなかったのかもしれないし……ずっと眠っていたのかもしれなかった。

ただ……考えていた。

ときおり牙の気配が近づき、そして何か言葉を交わしたおぼえはある。

一度は斎伽忍自身が現れて、やはり声を投げて……。

しかし、自分の内側で結論が出るまで、そうやって考えつづけることしか亮介にはできなかった。

この結界の外へ出るにも、結界そのものを解くわけにいかない以上、入ってきたときと同様、中和能力を発現させるしかない。意図してもう一度中和を起こすのはむずかしすぎる。そのこともあって、一人でここを出て皆のところへ戻る、という発想は生まれてこなかった。

それに、ただ元の場所へ逃げ帰って……待っている三人と夏江に、何を語ればいいのか。

毒に冒されてゆく諒の身を犠牲にして、ひたすら沈黙を保つのか。忍の力に頼り、敵を排除してもらうまで。

そんなことを伝えるために、中和能力が存在するのか。

それでは誰が救われるというのだろう……。

＊　＊　＊

亮介がここへたどりついたのは、二十九日の夜だった。

その夜が明けて、再び夜が訪れ、さらに明けて——暦の上では、今は五月一日の昼にあたる。

亮介の絶望は、牙の目には痛々しいものとして映った。そこまで亮介を追いこんだのは忍の命令であり自分自身だったからだ。こうなることは初めからわかっていたのに。

（初めから——わかっていたのに？）

その考えは、牙の胸中に小さな刺となって残った。

ならば何故、忍は彼に、彼ひとりにだけ、真実を知らせたのか。

何故この自分は、彼にだけは何もかもを語ってしまえたのか。

それは、もしかしたら。

（期待……？）

思いもよらぬ一語が浮かびあがり、牙の表情を曇らせる。

空気が動いた。牙はふりかえった。

ゆっくりと、亮介が立ちあがるところだった。

たしかな足取りで、亮介は書斎を横切ってゆく。

奥の扉を、彼がノックする。牙は黙ってそれを見守っていた。

「忍さん……」

呼びかける声。

「やっぱり俺、行きます」
静かな、落ちついた声で。
「俺たちだけで、やれるだけ、やってみます。だから力を貸してください。——俺、あの条件を、ひきうけてもいいです」
扉のむこうからは、しばらく返答がなかった。
やはり、そうなのだ。牙にはわかってしまった。そうなのだ。亮介は決してここに立ち止まるはずがないのに……。
音もなく、扉が引き開けられた。
現れた斎伽忍は、亮介の瞳を見おろし、無言だった。謎めいた美貌はそのままに。しかし彼の思いを読みとることは、牙には許されなかった。
そして忍は共犯者を得ることになるのだろうか。それとも。
「……君がもっと愚かならばよかったな」
そう呟いて、忍が目を上げる。
残されるのは、冷徹な総帥としての斎伽忍。
再び、だ。また彼は賭けてしまう。それがどのような結末をもたらすのか、牙は知らない。見えているのは、戦いだけだ。遠い過去も、広がる未来も、永劫につづく修羅地獄。
もはや運命が問われることはない——。

【第三部】

一　錯綜

五月一日、木曜日、午後五時四十五分。

「結界が……？」

マンション前の階段で、里見十九郎は視線を上げた。夕刻の六本木。初めての、変化だった。上方で気配が動いている。結界が揺らぎはじめているのだ。

何があった？

亮介が消えて以来、事態は硬直したままだ。敵方すら、動きようがなくて息をひそめているふしがある。しかしこれは――。

（どうなるか……）

何かが起こりだしている。そして問題は、自分がそれにどう対応するか、なのだ。まだ、そ

れは見えない……。

時は至れり、との報が弥峨から届いたとき、彼は高層ビルの屋上に腰をかけ、暮れなずむ街を見渡していた。

「遅すぎる……」

文を運んだ鳥を虚空に放ち、彼はつぶやく。

「遅すぎるな。とうに待ちくたびれたぞ、私は」

傀儡が目を覚ます……。ようやく、だ。

三日間、の期限を過ぎ、四日目にして連中は気をゆるめたということか。つまりは本体が今まで封印されていたわけだ。愚かにも、傀儡の力を見くびったか。

「まあそれも、かの君の傀儡にあればこそ……か」

その特殊性を見破れない術者たちは、いよいよ伽羅王とは無関係と見るべきだろう。ならばもう、遠慮も深謀も無用。

「しかし待たせただけの、つけは払ってもらわねばな」

剣司は笑みを浮かべる。——とても楽しげに。

雑魚どもの悪あがきにつきあっている暇はないのだ。こうまで焦らされて、黙ってなどおら

れるか。

もはや邪魔だては許されぬ。

立ち上がり、剣司は指を鳴らした。数体の鎧武者が音もなく出現する。

実体を持たぬ従者――〈影〉だ。

「行くがいい。まずは、盛大なお迎えをな」

そう言って、剣司はそれらに背を向けた。

ふわりと、身をひるがえす。ビルの屋上から、若者の体は宙に舞った。

下の階のテラスを蹴り、隣のビルの屋上へ着地し、さらに剣司は跳躍する。風のように彼は走りぬけ、その姿を目にとめる者はどこにもなかった。

「え!?　結界が歪みはじめた？」

大声で問いかえしてしまってから、げっ、と希沙良は息を呑みこんだ。

こういう時に限って、夏江がいない。どうしてここの家の電話は居間にしかないのか。せめてコードレスにしろ、と声を大にして言いたい。

『希沙良？』

「いや、わかった、わかったけど……ちょっと待て！　ちょっと待ってろよ！　いいから切る

なよっ！」

電話のむこうの十九郎に念を押しまくって、すかさず寝室へとびこむ。

案の定、耳がよすぎる不埒者はベッドを脱出しようとする最中だった。こりるということを知らないのだろうか。その水沢涼の襟元をひっつかんで無理やりベッドへ押さえこみ、希沙良は頭から怒鳴りつけた。

「何回やったら思い知るんだ、おまえはっ」

「知りませんね。涼ちゃんバカですから」

しれっとして涼が答える。

「バカにも程ってもんがあんだろ普通はっ！　俺はもう嫌だからな、責任とるなんざっ」

つい数時間前にも、大がかりな『発作』が起きたばかりなのだ。動きだせるわけがなかった。

「バカも徹すれば天才ってね。なんて大天才なの涼ちゃん……」

「迷惑なだけだっ！　陶酔してんじゃねえっ!!」

「で、結界がどうしたって？」

答えそうになってしまって、ぐっと希沙良は口をつぐんだ。

「……おまえに教える義務はないっ」

「ふううん。ろーさんが一人でいるのに、応援に行かなくていいのかなあ。結界が歪みかけ

てんでしょー？　敵さんだって、かぎつけて来たりしないのかなあ。諒ちゃんバカだからわかんないけどー」

「ほんっと腹立つな、おまえ――っ!!」

足蹴りの一発あたりくらわしてやりたいところだが、そんなことをして心臓でも止められたら困る。

「いいからじっとしてろっ」

布団をありったけ上からぶちまけておいて、希沙良は足早に電話へ舞い戻った。

「もしもし俺っ！　悪いっ！」

『だいたい事情はわかるよ』

十九郎の反応は、実に理解のあるものだった。やれやれと希沙良は肩を落とす。

『いいか、絶対に二人ともそこを動かないでくれ。もうしばらく俺は様子を見る。……いやな感じがするんだ』

「大丈夫か？」

おまえひとりで、とまでは言葉にしない。

『本当は、俺のほうがおまえに訊きたいんだよ』

そう答える声はとても落ちついて、不安を感じさせなかった。

「なんだよ、平気だろ、馬鹿」

『そういうことさ』

ただ、と十九郎がつけ加えた。

『……ただ、何があっても無理だけはしないでくれ。時には逃げることも必要だ。わかるな？』

「それこそ、そっちの話だろうが。自覚しろよ少しは。ほんっと馬鹿だな、おまえ」

希沙良の台詞に、十九郎は苦笑したようだった。

表面はどうあれ、状況の厳しさに十九郎は慎重にならざるを得ないのだ。——もう、動けるのは自分たち二人しかいない。

『希沙良』

「なんだよ」

『……巻きこんで、ごめん』

「……おまえのせいじゃねえだろ」

短い沈黙。

もう一度、希沙良が口を開く。

「別におまえのせいでもいいけどさ、俺は」

銀色の、細い杖が目の前に置かれている。
飾りは何もない。腕一本分ほどの長さの、なめらかな銀杖。
『地涯の杖』またの名を〈爪牙〉。それが、斎伽忍からの預かり物だった。
この杖を使いこなせるのは、鋭い感覚を有し、杖自体と――すなわち伽羅王の〈使〉の化身と――交信できる者のみ。
一度、この杖のかたちをとってしまったら、牙は斎伽忍の手によらずして他の姿に変化することはできない。しかし牙の存在が忍の力に支えられている以上、その術力を消耗させないために、どうしても戦い方は限られてくる。今は、こうする以外に途はない。
そして。
結果として、亮介は初めて、その手に武器を持つことになる。
『牙は、君の身を守るだろう。それについて疑いはない』
忍の言葉。
『しかし君は戦わなければならない。それは、守られることと必ずしも同じではない。すべてはそこにかかっている』
それが何を意味し、何を暗示するのか。
考えても答えは出なかった。
いずれにせよ、引き返すことはできないのだ。

長い長い空白があった。夢すらもなかった。
時間をざっくりと切り落とされたように、前触れもなく意識が回復する。
「え？」
気がついたら、床に座りこんでいる。はっ、と冴子は顔を上げた。
目の前にいるのは……。
「亮介ちゃん……？」
場所は——忍の部屋。ブラインドは上げられている。夕方の空は色を変えはじめている。
正面に膝をついて見つめるのは、確かに亮介だ。
ただ、今の亮介は記憶にある亮介と、どこかがズレていた。何かが……ごく微妙なところで、亮介らしくなかった。
「亮介ちゃん……どうしたの？」
思わず、状況は何もわからないままで、そんな風に冴子は尋ねている。
「え、何？」
意表をつかれた具合で、亮介が問いかえす。
「だって……亮介ちゃん、なんだか泣きそうな顔してる」

「――」

思ったとおりのことを言ったら、亮介は唇を結んだきり、それには答えなかった。

違和感。泣きそうで、それでも泣けない亮介。

「ねえ亮介ちゃん、本当にどうしたの？　なんでそんなに」

「あのね……！」

目をそらし、亮介が冴子の言葉を遮った。意を決したような響きに、冴子が口をつぐむ。

「あのね……もう、あれから四日目なんだ」

一瞬、その意味がよくわからない。

「四日……？」

「うん、それで……君は、髪を切られたショックで気を失ったらしくて……」

「そんな……！　待って、どうしてここは忍様の部屋なの？　忍様はどこにいるの!?」

「……忍さんは、いないんだ」

きっぱりと、亮介がそう答えた。

「どういうこと？」

冴子は混乱してくる。目を合わせぬまま、亮介が続けた。

「今は、まだ言えない。ただ、忍さんには忍さんの考えがあるから」

「……」

忍の判断、と言われてしまうと、もう冴子にはどうしようもない。
「それより……」
無理に、亮介が話題を転じた。
「諒が、大変なんだ。すごく強い妖気が、身体に残って……なんとかしないと」
「何なの、それ」
冴子の声が硬くなる。
「三将の、剣司にやられたらしいんだ。波妖気よりも、もっとひどい技を受けたらしくて、それで」
「ちょっと待ってっ！　馬鹿じゃないの、それっ！　ものっすごい馬鹿っ!!」
もう冴子は立ちあがろうとしていた。慌ててそれを押しとどめるかたちで、亮介が腰を上げた。
「待って！　行くなら俺も一緒に行くから。その前に、ひとつだけ……」
「前も後もないわよっ！　何がどうしたの、言ってみなさいよっ！」
違和感のことなど、すでに冴子は忘れている。たたみかけるように尋ねられて、亮介が少しだけ口ごもった。
その目を冴子の瞳と合わせて、確認する。
「この部屋を出たら……剣司と、例の『髪切り』と、それから傀儡を敵にまわすことになる。

それでも……」
「行くわよ、当然でしょ、決まってるでしょっ!!」
間髪を入れずに冴子が怒鳴りかえした。
亮介はそれを聞いて、かすかに笑ったようだった。笑顔にしてはぎごちなさすぎたけれど。
「ありがとう……」
その亮介の呟きについて深く考える余裕は、冴子には残されていなかった。

十九郎からの電話を切った直後に、もう一度ベルが鳴りひびいた。寝室へ戻りかけていた希沙良は、舌打ちをしながら再び受話器へ手をのばす。
「もしもし里見っ！」
乱暴に声をたたきつけたら。
『もしもし、あたし！　今から行くから、あのバカに言っといて！』
負けず劣らず自己中心的な勢いで、そんな声がはねかえってきた。
「あ!?」
がしゃんっ。
何を尋ねる間もなく、派手な音とともに通話が切れる。

「……おい、こら」

思わず、受話器を握りしめたまま希沙良は立ち尽くしてしまった。

こういう突発的かつ自分勝手な電話をかましてくる女というと。

「あの女……状況わかってんのか!?」

冗談にしてはたちが悪すぎる。

無事なら無事と、さっさと言ってこいというのだ。痛む頭を抱えつつ寝室へ足を運び、そして希沙良は本気でめまいを覚えた。

自分は何か、天に呪われるようなことでもしたのか。

そうではない。単に水沢諒が馬鹿なのだ。大馬鹿野郎の身の程知らずなのだ。自分は悪くない。絶対に悪くない。

――いくらなんでも、七階の窓から脱出することはないだろうに。

空しく風に舞うカーテンを押しのけて、希沙良は窓の下を見おろしてみた。人影はない。

「やってらんねえよなあ――っ！」

座りこみそうになりながら、しかし希沙良は部屋を駆けだした。あの身体をひきずって、諒がそう遠くまで行けるはずがないのだ。

かくて歯車はくいちがい、そして錯綜が始まる。
時刻、午後五時五十九分……。

2 誤算

エレベーターが動く。

誰かが、下までおりてくるのだ。一階のエレベーターホールに立ち、十九郎はそれを待ちうけていた。その扉から何が現れるのか、見当もつかない。

「！」

一階にそのエレベーターが到着するより早く、マンション入り口に溜まった妖気に十九郎はふりかえる。

間一髪、透明な太刀がその身をかすめた。顔のない鎧武者が視界を横切り、とっさに十九郎はエレベーター前まで後退した。

「剡司の〈影〉か？」

問うまでもなくそう呟き、結界を設定しようとして十九郎は眉をひそめた。

一体、ではない。入り口を閉ざすかたちで、ホールに分散するのは計六体の鎧武者。

（足止めか？）

チャイムが鳴った。エレベーターの扉が開く。

「里見さんっ……!?」

呼びかけたのは、まぎれもなく亮介だった。十九郎が両眼を瞠った。

「崎谷君……それに」

さらにその隣に立つのは、確かに冴子だ。

彼女の姿を目にとめた瞬間、十九郎はこの鎧武者の意味を悟っていた。時間稼ぎだ。――すぐに傀儡が来る。

亮介が何か言いかけた。

背後の気配が急変し、十九郎はふりむきざまに早九字を切った。襲いかかった一体の影が消えうせる。

「里見さん！」

「事情は後でいい、崎谷君。冴子さん、すぐにここを脱出しないと危ない」

訊くべきことはいくつもあったが、今はそれどころでなかった。

「里見さん、俺が残ります。先に二人で……」

「え!?」

亮介の言葉は意外な内容だった。視線を転じ、十九郎は亮介の右手に銀の杖を見出した。

「――それを、斎伽さんが？」

頷いて、亮介が銀杖を握りなおす。

「亮介ちゃん、左っ」

冴子が叫んだ。鎧武者が太刀をふりかぶるところだった。

がっ、と鈍い音をあげて杖がそれを正面から受けとめる。亮介の意図した動きではなかった。自動的に銀杖は亮介を導き、次にとるべき行動を知らせる。

はじきあい、両者の分かれたところで、十九郎が亮介の背後にまわった。

「冴子さん、こっちへ」

傍らに冴子を呼びよせて、亮介と背中を合わせる。

「崎谷君、本当にここを任せてかまわないか？」

「はい」

背中ごしに、亮介は短く答える。

「わかった」

十九郎も、それ以上よけいなことは言わなかった。とにかく早く、冴子を諒のもとへ運ぶしかない。諒が回復すれば、戦い方もかなり変わってくる。

「里見さん、ひとつだけ、忍さんから伝言があって……」

ふりむかないまま、亮介が口を開いた。

「伝言？」
「この杖、感覚が強くないと使えないそうです。だから、里見さんと俺くらいしか」
「……なるほど」
そして――これを使って勝て、と斎伽忍は暗に命じているわけだ。
「承知した。じゃあ崎谷君、また後で」
もはやためらわず、十九郎は冴子を促して出口へ向かった。
それに合わせて亮介も出口まで走り、追ってくる鎧武者をくいとめる。
「亮介ちゃんっ……」
「大丈夫！」
別れぎわに声を投げる冴子に、亮介はそう答えた。
「大丈夫だから！」
自身にそう言い聞かせたのは、腕の震えを止めるためでもある。
杖が光を放つ。伝わる波動は、亮介を励ましているようだった。
戦うために、ただそれだけのために存在する〈使〉。その化身に敗北はあり得ない。言葉にするなら、そのような確信に満ちた思念。
〈爪牙〉が走り、逃げ遅れた鎧武者は頭から両断された。続いて向かってくる影を相手に亮介は身構える。あと四体。

十九郎がバイクのエンジンを始動させた。渡されたヘルメットをかぶり、冴子は後部シートに腰をおろす。

「かなり無理にとばすから、そのつもりで」

時間との競争だ。十九郎の一言が終わるのも待たず、バイクはすべるように疾走を開始する。

「悪いけど、よろしくっ」

風に負けぬよう、冴子が怒鳴りかえした。

赤信号の交差点を、かまわず十九郎は左折した。あまりに当然と言わんばかりの割りこみかたに、後ろの車はクラクションも忘れる。さらに加速。

渋滞の列が前をふさぎ、バイクはやや速度をゆるめた。

「あの人に、会いましたか」

その時になって、十九郎が尋ねる。

「全然っ！　ついさっき目が覚めたらしいの、あたしっ」

排気ガスに追いたてられながら、冴子が答えた。十九郎はぐっとハンドルを転じた。バイクは裏道へ入る。

「目が覚めた……？」

口の中で、十九郎はそうくりかえす。

結界の内側で、斎伽忍は冴子を眠らせ、彼女を傀儡から守っていたということか。……そうなのか？

いくつもの角を曲がりタイヤをきしませ、強引に数台の車を追いこし、そして再び大通りへ合流する。目黒通り。自由が丘までは一直線だ。何も妨害がなければ……。

「……冴子さん」

「え？」

「水沢は、あなたのことを知っているんですか？」

冴子が沈黙した。

あえてその返答は待たず、十九郎が続ける。

「少なくとも、希沙良は何も知らない。こんな事になるなら、話しておけばよかったんでしょうね」

「……ごめんなさい」

「いや……あなたのせいじゃない」

口止めをしたのは、冴子ではなく斎伽忍だ。

十歳の頃から〈本家〉に出入りしていた十九郎に、真相が伝わるのは容易な成りゆきだっ

た。しかし斎伽忍は決して『外』へそれを持ち出さぬようにと命じ、十九郎は確かに今まで秘密を守りつづけてきた。

何の意味がある？　隠したところで、避けられぬ真実。このままでは、敵も味方も徒に惑わされるだけだ。

また信号待ちで車が溜まっている。交差点につかまるよりも、手前の細道へ折れることを選んだ——直後。

「！」

甲高いブレーキ音が響いた。視界にとびこんできた金属の塊がタイヤにからみつくまでは時を必要としなかった。

ぐしゃりとバイクの側面が潰れる。それでも転倒だけは防ぎ、軌道をはずした車体を十九郎はわざと流れるままに走らせた。大きく前輪がアスファルトに半円を描き、やがて停止する。

ただならぬ衝撃があったにもかかわらず、冴子はなんとか振り落とされずにいた。彼女に怪我がないことを確認し、それから十九郎は顔を上げた。

投げつけられたのは、道端にあったのだろう自転車。すでに原形をとどめていない。

そして、それを怪力で投げつけたのは——。

「冴子さん、降りてください。これはもう動かない」

低い声で、十九郎がそう告げる。

機械的なしぐさで、冴子が地面に降り立った。その目はただ一点へ向けられている。十メートルほどの前方へ。

冴子と同じ顔の、しかし明らかに彼女でありえない人形へ。

ひどく醒めた眼差しで、こちらを見ている美貌の少女。

それはとても人間くさい表情のようで、だがどうしても生理的に認められない違和感を含んでいる。美しいのに、綺麗に見えない。柔らかいのに、触れたくない。

傀儡。

ゆっくりと、十九郎はバイクから手を放した。破壊された車体が、にぶく唸って横倒しになる。

ここから自由が丘のマンションまでは……二キロ程度だろうか。冴子には、走ってたどりついてもらうしかない。

「防いでみます。だから、今のうちに」

ごく少なく言葉を省き、十九郎が冴子に背を向けた。

「……わかったわ、とにかく急ぐから」

それだけ答えて、冴子は身をひるがえした。後のことは気になるが、自分が早くここから遠ざからないと、十九郎はいつまでも傀儡から手を引けない。

日没が迫る。

何も知らない平和な人々が、数えきれないほど冴子とすれちがう。誰も気づかない。誰も、思いもしないのだ——彼女に襲いかかる危機のことなど。

誰も、信じない。

唇を噛みしめ、冴子は走りつづけた。世界中が見捨てても、それどころか愚かだと謗り罵っても、亮介や十九郎を危険に巻きこんでも、それでもたったひとつ、どうしても譲れないことがある。

「——おいっ!?」

いきなり、横から呼びかけた声があった。

「え!?」

ふりむいて、冴子も唖然とする。

駆けよってきたのは——意表をついて和泉希沙良、だ。

「あっ……あんた何やってんのよ、こんな所でフラフラとっ」

「おっまえ、なんで一人で走ってんだよ、こんなとこっ」

思わず同時に怒鳴りあってしまって、お互いにパニックする。全然わからない。

「だっ、大体、あんたねえっ、こんなことしてるうちにもし剣司がっ」

「だからおまえっ、おまえがあんな電話かましてるうちにだなあっ」

「ちょっとっ!!　やかましいわね、人の話くらい聞いたらどうなのよっ!!」

「そりゃこっちの台詞だっ!!　つまりっ、要するにだ、阿呆が逃げたっ!!」
希沙良の最後の発言に、冴子が一瞬だけ静かになった。
「……それって」
ぽつりと、無表情に確認する。
「もしかして、あのバカのことだったりして」
「もしかしなくても最大級の大馬鹿でっ、早とちりで先走りで自信過剰で首しめて、ものっすごく性格悪くて根性まがったふざけた野郎に決まってんだろっ！」
再び絶句。
「なんなのよ、それっ！　そこまで言われる義理はないわよ、あんたにっ！」
「おいっ、話がずれてるっ」
「わかってるわよ、わざとずらしたのよ、あああっ、腹が立つっ!!」
冴子の悲鳴に、希沙良は思いきり深いため息をついた。おそろしく疲れる。
「だからっ！　阿呆のことは置いといて、とにかく自分がこれからどうするかを考えろっ」
「言われなくても考えてるわよっ。いちいち指図しないでよ、偉そうにっ」
「いちいち口答えしてんじゃねえっ。ほんっと面倒な女だな、おまえ……」
「愚痴ってる暇があったら動いてよっ。――そうね、それでもやっぱり里見さんちに行かないと、亮介ちゃんや十九郎くんが混乱して収拾つかなくなるわよ。どうせあのバカ気がついて戻

ってくるでしょっ」

ようやく結論が出たと思ったら、もう冴子は走りだしている。

「気安く呼んでんじゃねえっ」

つられて走りながら、希沙良が唸った。そこへたたみかけるように、冴子が言い足す。

「ちなみにあたし、思いっきり命ねらわれてるから覚悟しといてね」

「……そういうことは早く言えっ!!」

最後の鎧武者が横なぎに胴体を切られ、その姿を消した。

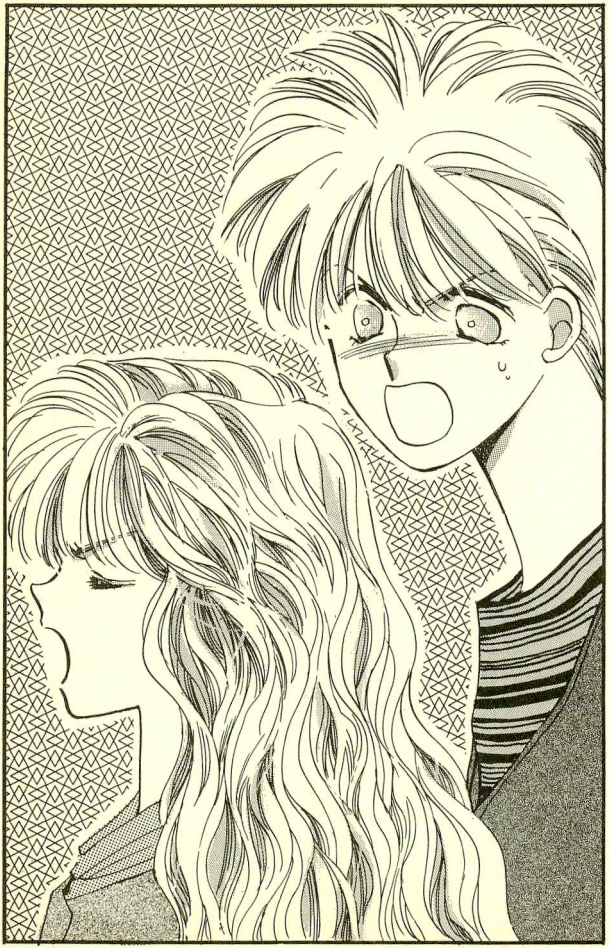
像が失せる寸前に、わずかに効力を残していた太刀がかすったようだった。頬に小さく痛みが走る。

「痛……」

一気に静寂をとりもどしたエレベーターホールで、亮介は呟いた。思ったよりも、時間がかかっている。

銀杖には、傷ひとつついていない。亮介にとって激戦でも、〈爪牙〉にとってはこの程度、小手調べにすぎないのかもしれなかった。

肩で大きく息をしながら、亮介は踵をかえす。早く皆に合流しないと……。



「え？」
愕然として、亮介は立ち止まった。
「……あ？」
マンションの入り口で、同様に息を呑んだ人影がある。
壁に右の肩を預けて、ようやく身体を支える。そんな状態で。
「亮介……？　亮介だよな……」
「……おまえ……おまえ、どうして……！」
思わず亮介は銀杖を取りおとしてしまっていた。
どうして今、こんな所に。
よりによって今。すべてが動き出してから。
まさか、こんなことになるなんて。——こんなことになるなんて！
「どうして……どうやって……一人で、ここまで……」
「……トラックの荷台に無断でヒッチハイク……した」
亮介の言葉にただならぬ動揺を感じとり、諒のほうも真顔でそれだけしか答えられなかった。
「……駄目だ」
狂ってしまう。これでは何もかもが。

全身から熱がぬけてゆく。亮介は立ち尽くしたまま、ひたすら諒のことを見つめていた。その実在をたしかめるように。

「駄目だ……もうきっと間に合わない……わかってたら封印なんか解かなかったのに……！」

「亮介？　ちょっと待て、どういう……」

「こんなはずじゃなかったんだ……！」

亮介の目は諒に向けられ、しかし本当に諒の姿をとらえてはいない。その耳に諒の声は届いていない。それに気づき、諒が何かを呼びかけようとした時だった。

「信じてない……」

亮介の片手が諒の胸元をつかんだ。燃えるような瞳がまっすぐに諒を直撃した。

「おまえは誰も信じてないっ……!!　俺のことも、彼女のことも、忍さんのことも!!　そんな風に自分ひとりだけ走られて誰が嬉しいと思うもんかっ!!　おまえ以外の人間は何もできないのか!?　そんなのは傲慢なだけだっ!!」

「……」

「誰のために、命がけで彼女が……誰のために……俺の『心配』の意味なんて、おまえは全然わかってないっ……！」

激昂が涙を招き、亮介が喉をつまらせる。

諒は無言だった。ただ黙って、亮介の言葉を聞いていた。

「冴子はもう、自由が丘に向かってるわけか」
ぽつりと、そう確かめる。
亮介が小さく頷いた。
「里見さんの、バイクで……」
「そうか、里見さんが一緒なんだな……。むこうに着けば和泉も待ってる。冴子も馬鹿じゃない。あいつはそう簡単に負ける奴じゃない」
「……」
「諦めるには早すぎるだろ」
ごく冷静に言って、諒が右手を持ちあげた。
胸元をつかむ亮介の手を、やわらかく引きはがす。亮介が目を上げた。
「……悪かった」
一言、そう告げてから諒が手を放した。亮介は答えずに、その動作を見ていた。
「手伝ってくれ、亮介。冴子を追っかける」
ゆらり、と諒は壁から肩を起こし、もう出口へ向けて歩きだしている。
亮介は銀杖を拾いあげ、それに続いた。
「諒」
肩くらい貸してやりたかったが、意地でも自力で歩くかまえで諒は進んでゆく。

「忍さんは、いないんだ。それでも……剣司たちと……」
「いなくて当然。俺はね、はじめから忍のことなんてあてにしないのよ」
「……」
「あてにしたらきりがない。いてもいなくても諒ちゃんは勝つ。決まってるでしょ」
当然、決まってる、と、冴子と同じことを言って。
「……自分の言葉に責任持てよな」
以前にも言ったおぼえがある台詞を、亮介はわざと口にしてみる。
「まかせなさい」
諒の背中がそう答えた。何を思っているかは、わからなかった。

ごおん、と地が唸り火炎が轟いた。
あおられた風が十九郎に正面から吹きつける。
灼熱の中に女の髪が浮きあがり、舞いおどる。
全身を業火に包まれ、しかし冴子の傀儡は何事もないように立っていた。炎は彼女をとりまきはするものの、その身に傷ひとつつけることもできずにいる。
ごうごうと燃える炎のむこうに、ふたつの瞳がさらに光を放つ。それは恐怖を誘う妖幻の目

だ。

「無駄なこと……」

ひどく艶やかに彼女が笑う。

豊かな表情。まるで生身の人間。だが明らかに魔性の人形。

アスファルトに片手をつき、十九郎は動かずにいた。炎を支えられる時間には限りがある。粘れば粘るほど、こちらが不利になる。

「無駄なんだってば……」

もう一度、傀儡がくりかえした。

その細い腕を胸の前で十字に組み、ふっ、と力をこめる。次の瞬間、燃えさかる炎は彼女の身から空へかけのぼり、とりこむべきものを失って消えうせた。

「ほらね」

すっきりした様子で傀儡がそう言った。無邪気とも呼べる態度だった。

髪一本さえ……服の端すら燃えずにいる。

十九郎は立ち上がっていた。二度の発火を連続して防がれて、とるべき手段は正直なところ残されていない。

何か、傀儡が予測していない戦い方を見つけなければならない。どうすれば……。

傍らに放置された自転車を、傀儡がぞうさなく片腕で持ちあげた。

「余計なことをするから……」

ばきり、と真ん中から自転車が折られ、彼女の目が十九郎に向かう。

「死になさい、おまえは」

そんな言葉と同時に、ふたつの残骸が風を切って十九郎を襲った。十九郎は結界でそれをはじいたが、勢いは消えず、軌道をそれた金属塊はアスファルトに激突してぺしゃんこになった。

おそろしい腕力だ。人間の首くらい、素手で簡単に折ってしまえるのではないか。

観察は、つかの間でしかなかった。さらに雨のように、路上駐車の自転車は破片となって十九郎ひとりへ降りそそいだ。

結界で我が身をまもり、十九郎は事無きを得る。傷つけられることは確かにないが……その間、こちらからの攻撃はできない。

傀儡が笑っている。破壊を楽しんでいるのか。

大通りがすぐ近くを走っているのに、誰もこの裏道に現れないのは——決して偶然ではないはずだ。人除けの術か。どうせ少しでも感覚の発達している者には通用しない。

「こんなやりかたは、俺には効かない」

結界の内側から、十九郎はそう声を投げた。

これは挑発だった。傀儡がこちらの相手に飽きて冴子を追いはじめたら、その足を止めるの

はおそらく無理だ。

「……ふうん？」

破壊の手を止めて、傀儡が十九郎を見据えた。

接近戦に持ちこめば、引きつけて、冴子たちから遠ざかることもできる。それだけ危険も増すだろうが。

「そう？　そういうこと？　じゃあ、ちゃんと殺してあげる」

子供のようにあどけなく、冴子の顔で傀儡が言った。両手の残骸を投げ捨てる。

（かかった）

望みどおりに、相手が餌に食らいついてきた。他愛ないほどだ。

が、それを単純に喜ぶわけにもいかない。十九郎が身構えたときだった。

「お待ち」

第三の声が、そこへ介入した。

「おまえの獲物は、この男ではあるまいに」

それは女の声だ。はっ、と十九郎が後方をふりむいた。

殺気もあらわに、彼女の視線はまっすぐ十九郎を射ぬいていた。

「……おまえ、か」

十九郎が呟く。憶えのある女だった。

『髪切り』――真の名を、弥峨。

弥峨は傀儡へ目を向け、冷ややかに顎をしゃくってみせた。

「お行き」

「……でも、こいつが」

「弥峨の命が聞けぬか？」

言いかけた傀儡を、厳しく叱りつける。

不満げに傀儡は口をつぐんだが、一瞬後には、もう彼女の興味は十九郎から離れてしまっていた。あっさりと踵をかえし、軽い足取りで走りだす。

「待て！」

「今さら傀儡が止まると思うのか」

傀儡を追おうとした十九郎の前途を、弥峨がふさいだ。ぴたり、と光剣の切っ先を十九郎の額へ向ける。

足を止め、十九郎が鋭い眼差しを彼女に返した。

少しだけ、弥峨の印象は前回と異なっていた。

荒々しさのようなものが彼女を包み、激しい感情が見える。憎悪だろうか？　……余裕がないのだ。

何があったのか。尋ねるわけにもいかず、十九郎は弥峨との距離を保った。やりにくくなっ

たのを感じていた。手負いの獣を敵にまわした気分だ。
「おまえのことなど、忘れてしまえばよかった」
低く、弥峨が怨嗟の声を放った。
「いや、おまえが弥峨の傀儡を燃やしたりしなければ……おまえさえ手を出さねばこんなことにはならなかったのだ！」
「何？」
光剣が走った。しかし大振りで、目標をしっかりと捉えていない。それが十九郎でなくても、かわすのは簡単だったはずだ。
「逃げるな、若造！」
そう言われても困るな、と十九郎は内心で呟く。
発火には時間がかかる。立ち回りの最中には無理だ。とすると――。
「あれは九那妃か!?」
突然、そんな問いをたたきつけられて十九郎は思考を中断した。
「どういうことだ？」
「黙れ。訊いているのは私のほうだ」
十九郎の反応に気もとめず、弥峨が重ねて問いかけた。
「答えろ！　あれは本当に九那妃なのか!?」

その頃。

冴子は立ち止まっていた。隣で希沙良が小さく舌打ちをする。

「ずいぶんと待たせていただいた」

頭上から、悠然と呼びかける声がある。

「どうやら、余計な雑魚が一匹ばかり見えるな。命惜しければ去ることだ」

街灯の上、だ。

かるがると彼は身を躍らせ、瞬時にふたりの眼前へ着地した。

不敵な笑みを口許に宿し、冴子だけをまっすぐに見つめる。

「そのお力、たしかめさせていただくが、よろしいか？」

有無を言わせぬ迫力で、そう宣告する——それは剣司だった。

3 冴子

里見家にたどりつく直前の、歩道。
黄昏につつまれる周囲に、他者の姿は見られなかった。
「よろしいか、と言われてもね」
対峙して、無表情に冴子が答えた。
「急いでるのよ、あたし。どこの誰だか知らないけど、もう少し礼儀と都合ってもんを考えたらどう?」
「……なるほど」
眉ひとつ動かさず、剡司はひとりごちる。
「これは多少……無理にでも」
がっ、と鈍い音が激突したのはその一秒後だった。
ふりおろした剡司の光剣と、割りこんだ希沙良の手刀。

「おいっ！」
力まかせに光剣をはじき、希沙良が怒鳴りつける。
「いきなり女にそれはないだろっ!?」
「邪魔だてをすると――」
ぎらり、と剣司の面に殺気がひらめいた。
剣を持たぬ左腕が上がった。妖気の集中。勢いよく反動をつけて。
「危ないっ」
一声あげて、冴子が動いた。
凝縮されて威力を最大限にたかめた妖気の塊が、希沙良へ迫る。至近距離。避ける暇はない。
「！」
剣司が目を瞠った。
〈熾炎斬〉は――受けとめられていた。冴子の掌で。
圧力に押されて一歩ほど退いたものの、冴子はキッと顔を上げる。不揃いなウェーブの髪が広がり、揺れる。妖気の影響は微塵ものこらず、逆に彼女はその一撃でなにかの殻を振り捨てたように見えた。
爆発の予兆。

「……わかったわ」

剣司を正面から見据え、冴子が呟いた。

「その節は、うちのバカを散々な目に遭わせてくれてどうもお世話様だわ。こんなもん喰らって生きてただけでも合格点だわよ、ほんとにっ」

燃えさかるのは怒り。理由はたったひとつ。

彼女の背後で希沙良があらためて手首を重ねあわせ、手刀をつよく発光させた。敵の正体がはっきり見えれば、話も違ってくる。

「……浄化、というわけか」

剣司が、やや複雑な顔になる。

「解せないな……」

「さっきから勝手に自己完結してねえか、おまえ」

希沙良がそんな言葉を投げ、ますます剣司を不愉快にさせた。

「貴様、雑魚のくせに身の程も知らず……」

「何もしてないうちからザコザコ呼ぶんじゃねえ、失礼だっ！」

「無礼はどちらだ！」

光剣が疾走する。ずしっ、と頭上にかまえた手刀へ重量がかかり、希沙良は歯をくいしばった。

「こ、の……」

ぎりぎりと力をこめて剡司が剣を押さえこみ、防ぐ手刀は少しずつ希沙良の顔へ近づく。互いに目をそらさず、両者の動きが止まる。

「この、わがままガキがっ！」

叫んだのは希沙良のほうだった。無理やり力の方向を曲げる。光剣が希沙良の身をわずかにそれて地面を削った。

返る光剣を左手の甲で止め、希沙良は流れる動作で右の脚を蹴りあげた。狙いは剡司の首筋。

ふわり、と剡司はそれをかわし、逆にバランスを崩した希沙良の肩から一気に斬りさげようとする。地面に片手をつき、希沙良は大きく側転して剡司から距離をあけた。

「ちっ」

着地と同時に希沙良は舌打ちした。

今の一連の動きだけで、手足がかすり傷だらけだ。極限のハイスピードで攻めたつもりなのだが、それでこのざまでは……少しでも遅れたら今度はざっくり、か。

「あ、駄目っ！」

冴子の声。はっ、と希沙良は目を上げることしかできなかった。

のんびりしていたわけではない。着地点を剡司に読まれていたのだ。気づいた時は――。

「うあッ……!?」

すさまじい力で路上にたたきつけられ、一瞬なにも見えなくなる。自分の悲鳴さえ聞こえなかった。痛みと不快感と熱さが三つどもえになって全身を襲う。

(やばいっ……)

剋司の妖火をまともにくらったらしい。肺が灼ける感触。完璧に体中の力が失われる。

(こんなもん三発も受けたのかよ)

反射的に、水沢諒の件が頭をかすめた。それじゃ確かに死ぬよな、などと妙に冷静に考える。

「……やってくれたわね」

うち倒れた希沙良の前に、剋司から盾になる位置に立ち、冴子がそう言った。

「ただでさえ怒ってるのに、ものすごく怒ってるのに、おそろしく怒ってるのに、もう限界ぶちぬけて何をどう言えばいいかわかんないから言わないけど、とにかくあたしは今、とんでもなく怒ったわよ」

「ここだ、ここでいい!」

亮介が叫んだ。タクシーが急停止する。

里見家には、まだ少しだけ足りない。ごく普通の町並み。自由が丘のはずれだ。
歩道へ降り立って、亮介はふと眉をひそめた。
「……どした？」
隣へ並んで、諒が問いかけた。
「いや、見えるんだけど……」
オーラの波動が——戦いの空気が、亮介の瞳には陽炎のように映り、敵と味方の居場所を知らせる。
「見えるけど……分かれてる。二カ所だ」
そのどちらに冴子がいるのか、ここから判断することはできなかった。
「二カ所ね……」
諒が呟く。ぐしゃりと前髪をかきあげても視界のかすみは消えず、そんな状態でとてもオーラまでは見えない。普段は、鈍いなりにもう少しなんとかなるのだが。
「健康第一ってやつだな、まったく」
「どうする？」
「どうするって、おまえさん……」
尋ねた亮介の肩にずっしりとひじをかけて、諒は身を支えた。
「この際、考えても仕方ない。近いほうに俺が行く。そっちに冴子がいれば万々歳ってこと

で」

二手にわかれる、ということだ。亮介が何か言いかけて、諒と目を合わせた。

信じろ、と言ってしまった以上……。

「大丈夫。生きてりゃなんとかなる」

諒が、そう言葉を続けた。きっぱりとした態度で。

「……うん」

亮介も頷いた。

思うことは沢山あったが、今はそれでいい。

「急ごう。途中まで一緒に行く。こっちだ」

銀杖を小わきに、亮介は走りはじめる。諒がそれを追った。

突然、重い痛みが全身から気体となってぬけていくように思えて、希沙良は頭を持ちあげた。

妖気の毒が浄化されているのだ。冴子の能力で。小さな傷も癒され、消えていくのがわかる。

しかし、冴子は希沙良に背を向けて立つ、その姿勢を変えてはいなかった。彼女の目は剣司

だけをとらえているはずだった。
そんな風に、方向も設定せずに『癒し』を行えるものなのか？
わずかに頭痛が残る。顔をしかめながら、希沙良は身を起こす。
「それで、どうしようと？」
剣司が尋ねる。
「さあね。やってみないとねっ！」
冴子が答えるのと、どちらが早かったか――。
轟音が大気を切り裂いた。剣司は彼女に紅蓮の炎を見た、と思った。それは錯覚でしかなかったのだが。
「!?」
強烈なオーラが襲いかかったのだ、と気づいた時にはすでに遅かった。
「なにっ……」
両の腕が痺れ、内側でなにかが凍りついた。愕然として剣司は我が手を見つめ、何が起きたのかを悟らざるを得なかった。
妖火を封じられた。手も触れずに！
「そんな馬鹿な！」
剣司が唸り、光剣を強く振った。ざっ、と風を切る。

その勢いのまま斬りかかる剋司を、再び希沙良が迎えうった。
「何故だ！」
希沙良と戦いながらも、剋司の目は冴子へ向いていた。黙って立つ彼女へ剋司が呼びかける。
「何故だ、これほどの力があり、真なる血統を継ぎ、御身が、かの君でないという保証は……」
「よそ見してるとっ……」
希沙良が攻めこんだ。剋司がその拳を剣で防ぐ。彼は体勢をたてなおし、なおも冴子への執着は捨てなかった。
「ええい！」
かっ、と両眼を見開き、剋司が希沙良を突きはなす。
「――我をお見忘れか!?　もしくは……」
「悪いけど、何のことだかわからないわ」
冷ややかに、冴子が答えた。悪意ではなく、正直な心情を述べただけである。
剋司の目的は、何かこちらの予測とずれているようだった。
「!?　……おい」
希沙良が顔色を変えた。冴子がふりかえる。

すぐ近くの四つ角から現れ、道の中央に堂々と……立ち止まったのは〈髪傀儡（くしくぐつ）〉。
「見ぃつけた」
そう言って、傀儡はにっこりと笑った。

「里見さんっ！」
亮介の声が届き、ハッと弥峨（みが）が息を呑んだ。
術者二名を同時に相手にはできない。とっさに弥峨は走りだしていた。戦場を移動させる必要があった。
「崎谷君」
十九郎が呼びかける。同時に彼は弥峨を追って駆けだしている。
「里見さん、冴――彼女は？」
息をきらし、亮介が隣に並んだ。
「先に逃がした。ただ、傀儡も動いている。それが気になる」
答えながら、十九郎は両眼を細めた。弥峨の逃げる先でオーラが動いているのがわかった。
戦っている間は見えなかったが……あの波動は……あれは。
「希沙良……？」

まさか。

しかし希沙良のオーラならば、考える以前に感知できる。間違えようがなかった。とすると、戦っている、その相手は――。

（しまった！）

考えられるのは、傀儡と剣司の両方。そして相手がどちらであろうと希沙良のほうが不利だ。

目的地は、家の方角とはやや異なる。外に出たのか。どうしてそんなことを。

「水沢と一緒にいるはずじゃなかったのか……」

走りながらそう独語した十九郎に、亮介が必死な顔を上げた。

「すみません、里見さんたちが出てから、六本木に諒が来て……俺、一緒にここまで来たんです。だから諒が今、あっちのほうに向かってるところで……」

「まだ――冴子さんに会っていないことになるのか……！」

それでは諒の戦力も期待できない。十九郎は最悪の予感を覚えていた。こんなことなら、あの傀儡を自分が倒しておけば……！

「すまない崎谷君、先に行く」

「あ、はいっ」

十九郎は速度を上げる。こうなるとバイクを壊されたことが悔やまれた。

せめて……斎伽忍が……。

「おい、おまえは逃げろ！　早くしろっ!!」
希沙良が怒鳴った。一瞬、冴子は躊躇する。
「だけどっ……」
「いいから行けっ!!　おまえまで面倒みてらんないんだよっ」
これはかなり本音だった。特に傀儡については、発火能力をもたない希沙良に対策はない。その状態で冴子を守りきる自信はなかった。
「……ごめんねっ」
一声投げて、冴子は走りだした。
ここで自分が逃げれば傀儡はこちらを追うだろう、との読みもあった。少なくとも希沙良の敵は剋司ひとりになる。傀儡よりは、いくらかましだ。
「悪あがきだな」
不機嫌に、剋司は眉をひそめる。
「いずれにせよ、同じことだというのに……」
「その、やたらめったら相手を見下すクセ、なんとかしろよな」

希沙良が言い返す。
冴子の動きに反応して、傀儡がゆらりと歩きはじめた。
刻司はそれを見遣り、なにか考えているようだった。
「……まあいい、よしんば傀儡が勝ろうと、『器』が変わるだけのことだ」
そう納得して、視線を希沙良へ移す。
「さて……」
ゆっくりと、刻司は剣を持ちあげた。
「遊びは仕舞いだ。そろそろ飽きはじめたぞ、私は」

逃げる、といっても、傀儡がこちらを見失うことはありえない。どこにいても必ず、その本体の居所は筒抜けなのだ。それでこそ、刻司たちも冴子を見出すために傀儡を用いたのである。
本能とも呼ぶべき、傀儡の特質。
いくつもの角を、冴子は曲がった。とにかくジグザグに動いて、傀儡の足を遅らせるぐらいのことしかできない。この周辺から、あまり遠ざかるわけにもいかなかった。希沙良たちから離れすぎると、本当に孤立無援になってしまう。

いつの間にか、太陽はすっかり沈んでいた。
夜の空。
傀儡が来ているということは、十九郎はどうなったのか。六本木に残った亮介は？　それから、それから……。
気になることばかり、そして見えないことばかりだ。
――力が足りない。
走りながら、冴子は痛感していた。力が足りない。誰より自分が。そして術者のひとりひとりも。まだ足りない。これでは戦いぬけない。
まだ相手は、三将のひとりにすぎないのに……。
「!?」
冴子は足を止めた。
まわりには、人影は皆無。
目の前で、二本の小道が交わっている。道の両側には普通の住宅が並んで。
異常なほどの静寂が空気を占めて。
そして……近づいてくるのは、一人分の足音だ。
曲がり角の遠くから、それはこちらへ向かってくる。
引き返すべきだろうか？　冴子は後ろをふりかえる。まっすぐにのびる夜道。

けれど、もしかしたら。それは、もしかしたら。
四ツ辻から数歩ばかり離れて、いつでも走りだせる姿勢で、冴子はその足音を待ちうけていた。確実に、こちらへ……来る。
ざっ、と地面を擦る靴音とともに、影が止まった。
いつもならろくに足音もたてないはずのスニーカーを、今は重くひきずりながら——。
長身の影。
曲がり角の電柱にもたれるように片腕をつき、冴子の前へ。
「冴……」
がくり、と膝から力が失われる。そして。
「……さ……がさせ、やがって……」
諒が、そのまま路上へ倒れこんだ。

4　激　震

「さっ……捜させたのはどっちよっ、ふざけんじゃないわよっ!!」

諒の肩を両腕で抱えおこしながら、冴子が怒鳴りつけた。服が汚れるのもかまわず地面へすわりこみ、一気に妖気の浄化にかかる。

「あんまし……耳元で大声、出さんでくれ……」

咳きこむ合間に諒が唸る。かっとなって冴子がさらに耳元へ顔を近づけた。

「聞こえてないようだから何回でも言ってやるわよっ。こぉの、ばかっ！　ばかばかばか、大ばかっ！　輪をかけて土星ばかっ！　ここまで馬鹿だなんて知ってたわよ大昔からっ!!」

「……わかった、わかりました……」

「わかってないわよっ!!　誰がわかってんのよ、どんな風にわかってんのよ、言ってみなさいよっ!!」

歯止めが飛んだように、冴子からはきりもなく罵詈雑言が連発される。目を閉じて、諒はた

め息をついた。一秒ごとに呼吸が楽になってゆく実感。

「だからさ……」

左腕を持ちあげてみたら、嘘のように軽く動いた。ならいいか、と頭の隅で考えたかどうかは……。

「だから何よっ！　だいたいあんたはゴタクばっかりでっ……」

冴子の声が、そこで跡切れる。

諒の腕が背中へまわり、気がついたら冴子は肩から抱きすくめられていた。信じられないほど強く。

「……だから、こんな風に」

低くかすかに、諒が囁いた。

身じろぎもせず、冴子はそれを聞いた。

浄化と癒しの気だけが、ふたりを包んだ。何も動かなかった。とても静かだった。

影はひとつになったまま、ずっと揺るがない……。

「髪、切られちゃったな……」

ぽつりと、諒が言う。

「すぐ伸びるわよ、髪なんて」

冴子が答えた。

「きれいに伸ばすの、大変なんだろ」
「全部が短くなったわけじゃないから、結び方を工夫すればなんとでもなるわよ。女ってのはそのへんが便利なの。今はちょっと……時間なくて、バラバラのまんまだけど……」
そしてまた、しばらくの静寂。
「亮介に、叱られてさ……」
もう一度、諒が切り出した。
「今と同じ……『全然わかってない』って、すごい叱られた……」
「で、同じことしてあげたとか言わないでよ」
「んなことしたらそれこそ絶交……あ、でも、もう見捨てられたかも知れないなあ……」
「亮介ちゃんなら、見捨てた人間を叱ったりしないわよ、馬鹿ね」
「……うん、俺も叱られるのは好きかな」
目が覚めるから。……多分。
本当は、もうひとつ、何よりも重要で切羽詰まった話題があった。この事態のすべてを左右する鍵が。今、お互いに感じている奥深い不安の源が。
けれど、どうしても——彼の名を出すことはできずに、ふたりは黙りこむ。
ふっ、と諒が顔を上げた。
「あらら……おいでなすったぜ、ようやく」

「え？」

冴子がふりむき、それを目にとめる。

街灯の光を受けて、追いついた傀儡が夜道に立っていた。

「いざ、諒ちゃんの出番ってね」

冴子から腕をほどき、ゆっくりと諒が立ちあがる。

身体のどこも重くない、という状態が、これほどありがたいものだとは思わなかった。肩や手首を動かして、その感触をたしかめてみたりする。

「……さすがは人間救急箱」

「恩に着なさいよね」

「そうか、やはり密着すると効果があるんだなあ、あれって」

「あっ……あんたねえっ！」

真っ赤になって冴子が声をはりあげた。それが目的だったとでも言うのか。

「と、いう理屈もあるぞと」

にっ、と笑ってみせて、諒は右腕をかざした。

勢いよく腕を振りおろす。ぶんっ、と風が生まれ、そして光剣〈朱雀〉が復活した。

「長いみちのりだったな、朱雀ちゃん」

本心からそう語りかけ、諒は傀儡のほうを見やった。

傀儡はいいかげん不機嫌になっているようだった。あちこち走りまわらされて疲れたという風情だ。

「ねえ、まだ、邪魔するの？」

「するの。ごめんね」

尋ねる傀儡に、諒はそんな答えを返した。

――その瞬間、何があったのか希沙良には判別できなかった。

数えきれないほどの激突を剣司とくりかえし、かなり息はあがってしまっていた。剣司のほうは疲れも見せず、光剣をさばく腕には一分の隙もない。後から思えば、そのとき剣司は封じられた妖火が回復するのを待っていたのかもしれなかった。

一対一の戦いに集中していると、思考はだんだんと失われていく。相手の動きに全身の神経が向けられ、頭よりも先に体が反応する。

次にとるべき行動をいちいち考えたりしていたら、この相手には追いつかないのだ。とにかくスピードが尋常でなかった。こんな敵は初めてだ。将軍だかなんだか知らないが……。

高速の世界に身をおき、他のなにもかもが――まわりの景色さえ見えなくなっていた、そこへ。

「希沙良！」

それが唯一、耳に届いた声だった。

希沙良の背後にまわった弥峨が、光剣をふりかざした。剋司は制止しなかった。本能的にふりむいた希沙良の目には白い光の軌跡と――。

（あ）

ざんっ、と鈍い音を希沙良は聞いた。

首、だ。首筋から……鮮血。めまい。地面が近づく。見えなくなる。回転。痛みはない？

寒……い。

ぐるぐると意識の断片が混濁して、すべてが遠くなる。それはごく一瞬のことだった。

「！」

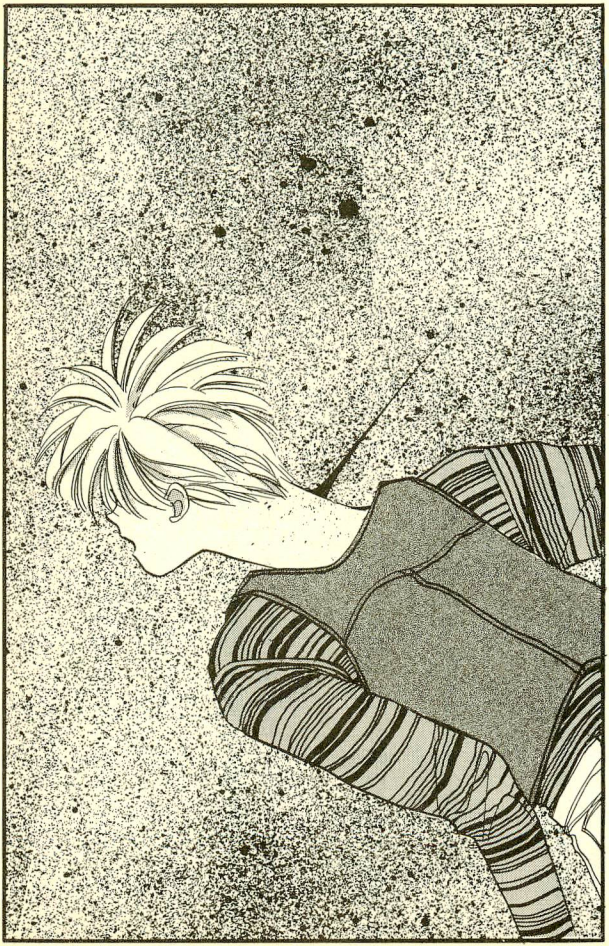
地面へ倒れる寸前に、十九郎の腕が希沙良を受けとめた。同時に強力な結界がまわりを包む。

真紅の血が十九郎の腕を染め、胸に広がる。鮮血はさらに溢れつづけてやまなかった。傷が深すぎる……！

「いい頃合だったな、弥峨」

剋司がそう呼びかけた。

「若の手を、わずらわせるほどの者ではありませぬゆえ」



硬い声で、弥峨が答える。

「そうでもなかったぞ。ただ、私はもう飽きがきたのでな、こやつには」

その一言に、十九郎が無言で目を上げた。

地に片膝をつき、血まみれの左腕に希沙良を抱きしめたまま。

「――三将か」

静かな問いかけに、ひそむのは灼熱の殺意。

「それで三将か。己の力で倒せぬものを、背後から部下に襲わせて将の名を語れるのか。貴様に将としての誇りはないのか。少なくとも……俺の知る一将と、並び立つものとは思えないが！」

「黙れ、無礼な！」

かっ、と激昂して弥峨が斬りかかった。ビシッ、と高い音があがり、弥峨の光剣は結界に阻まれる。

「遠吠えだな。相応の死に方があるのだ、何者にも。この剋司、礼を尽くすべき相手と、それに及ばぬ相手とでは、戦い方などいくらでも変えられる」

冷ややかに剋司が答える。

「一将を知る、と言ったな。それはよほど甘い輩だったと見える。おおかた女のくせに身の程もわきまえぬ〈幻将〉あたりであろうが、あんな女ごときと並べられてはこちらが迷惑だ」

「――貴様は」
言いかけて、十九郎は言葉を切った。
希沙良が片腕を持ちあげ、十九郎の背中に爪をたてた。ほとんど無意識の状態で――口をひらく。
「悪い……ドジった……」
抱きしめる腕に力をこめて、十九郎がそれに答える。
「大丈夫だ……大丈夫だ、なんとかする」
そうだ、冴子だ……。
十九郎はそう気づいていた。冴子がいればなんとかなる。この傷を癒せるのは彼女だけだ。
どうすればいい？
はっ、と十九郎は視線を転じた。
「崎谷君！」
遅れてたどりついた人影が、その場に立ちすくんだ。剋司と弥峨の目も、亮介ひとりへと集中する。
状況を見てとり、亮介は息を呑んだ。そこへかぶせるように十九郎が叫んだ。
「崎谷君、ここはいい！　冴子さんを――」
頼りは亮介の感覚と〈爪牙〉の力。それに……。

「！」

頷いて、亮介が身をひるがえした。夜闇に目をこらす。知っているオーラが、必ずどこかに見えるはずだった。

「弥峨、どう思う？」

悠然と、剋司がそう尋ねた。

「追うべき……と、思われますが」

弥峨の返答はどこか他人行儀だ。気づきもせず、剋司はかすかに笑った。

「わざわざここへ連れてくると言うのだ。手間が省ける」

「しかし、傀儡が」

「そうか。ならば、見届けてくるがいい。私はかまわぬ」

「……では」

複雑な表情を隠し、弥峨は亮介を追って走りだそうとする。

「待て！」

十九郎が鋭い声を放った。

「待て、さっきの質問に答える。彼女が九那妃か否か……！」

ぴたり、と弥峨の足が止まった。

剋司も、初めてまっすぐに十九郎を見る。そこには驚愕と警戒と期待の色が同居していた。

そのすべてが融合し――興奮となる。
「何だと？」
「聞こえなかったのか？」
十九郎はわざと問いかえす。その分だけでも時をひきのばせる。
「おまえたちが知りたいのは、彼女の正体だろう。違うのか？」
「……何を知っている？　何を言うつもりだ」
いらいらと剣司が結界へ近づいた。
地面へついた右手が、結界を支えている。左腕には希沙良の鼓動を感じながら、十九郎は剣司を正面から見つめかえす。
これを明かせば敵は――手を引くだろうか？　予測はつかなかった。むしろ危険かもしれない……。
「答えろ！」
剣司が自らの〈気〉を結界へたたきつけた。すさまじい圧力が伝わり、十九郎は歯をくいしばる。
「……彼女は」
それでも、今は言うしかなかった。十九郎は意を決して口をひらいた。
「彼女はたしかに純血種だが、九那妃ではない。なぜなら伽羅王が降臨したのは二十年前、彼

女は十六だ。九那妃は伽羅王よりも先に転生したはず。彼女ではありえない……！」

「――」

明らかに、剋司が絶句したのがわかった。

隣に立つ弥峨も、はっと表情をあらためた。それは剋司の受けているショックと、やや質の異なるものだったが。

「九那妃、様、ではない、だと……？」

剋司が、乾いた声でくりかえした。

「……伽羅王が、降臨して二十年と言ったな……なぜ、そのようなことをおまえが知っている……」

十九郎は、それに対しては答えなかった。

「おのれ、伽羅王の手の者か……」

剋司が呟く。

冷たく、短い沈黙があった。

ふと、弥峨が剋司へ目をやった。――くすくすと、剋司は笑いだしていた。

「なんと……これはなんとしたことだろうな、弥峨……」

「若？」

「事実なら、我々はたいした勘違いをしたわけだが……」

片手で自分の頭をおさえ、剋司はしつこく笑っている。何を答えていいのかわからず、弥峨はそれを見守っていた。

「これは確かめる要ありだな。しかしだ、弥峨、私はなんだか馬鹿馬鹿しくなってきたぞ」

その声はひどく陽気で、まるで子供のように邪気がない。

「九那妃様については、しばし保留だ。まずは当初の目的に立ち返るか。結局は、おまえの言ったとおりだったな」

「……若は、いつもいつも真面目になりすぎるのですわ」

ほっとした笑顔になり、弥峨がそう答えた。

彼女の知っている剋司が、そこにはようやく戻っていた。少なくとも、女神の幻像は彼の目前から消えたわけだ。一度それにとらわれると、この若者はもうあらゆる俗事を切り捨ててかえりみもしない。

「さて、それでだ」

剋司の眼差しが、十九郎へと向いた。

「せっかく貴重な情報を漏らしていただいたのだ。存分に礼を返したいところだが」

いんぎんな口調で言われ、十九郎は唇を噛みしめる。

腕の中で、希沙良の呼吸は浅く早くなってゆく。応急処置はしたが、まだ出血は止まらない。このまま大量に失血するとショック症状が怖い……。

「弥峨、行ってむこうの相手をしてやれ。私はここを片づける」
不敵に笑って、剣司が腕を持ちあげた。
ズシン、と強烈な衝撃が結界を襲った。十九郎は全身の力でそれに耐えた。ばりばりと空間の境目で破裂音が鳴り、振動が生まれる。
今までの戦いで、すでに疲労もかなりのレベルまで達している。必死に結界を支えながら、十九郎は限界が近づくのを感じていた。
汗にかすんだ視野の隅に、走り去る弥峨のすがたがうつった。そうか、弥峨には傀儡の居場所がわかるのだ。そう気づいたものの、どうすることもできなかった。

数度目の爆発があった。
傀儡には何の変化も起こらず、諒は小さく舌打ちする。
朱雀剣も結界もそして〈発火〉の術も、なにも通用しない。とんでもない相手だった。
「元気になったのはいいけど……」
ぶん、と朱雀を振って諒がひとりごちる。
「相手がスーパースペシャル元気ときたもんだ」
「ただの人形よ」

諒の背後から、冴子が答えた。
「いや、そりゃそうなんですけどね……」
「人間様のくせに人形に負けたら恥よっ」
「そりゃそうなんですけどね……」
「諒！　――大丈夫か!?」
亮介の声が、そこへたどりついた。
「おかげさまで諒ちゃんは元気だ」
傀儡から目を離すわけにいかず、ふりむかないまま諒が答える。
冴子のところまで駆けより、亮介が息を乱しながら立ち止まった。
「希沙良がっ……」
「え?」
亮介の様子だけで、冴子は事情を悟った。
「今、里見さんが一人で抑えてる。一緒に行ける!?」
「諒ちゃんっ、行けるわよねっ」
「俺に訊かんでくれっ」
いやな顔をしつつ、諒は朱雀剣をかまえなおす。
無表情に立つ傀儡。

嵐の前の静けさ、とでもいうべき気配だ。ここで冴子が動いたら……。

「……と言ってても仕方ないっ！　走れっ！」

諒が叫んだ。はじかれたように冴子と亮介が走りだす。

くわっ、と傀儡が殺気を放出した。

「待てぇいっ！」

一声唸り、冴子だけを追って疾走する。

「待ってる場合じゃないっ」

諒がその行く手をふさいだ。朱雀剣は傀儡の体をすりぬけてしまう。

とっさに脚を蹴りあげたが、あっさり彼女の腕に防がれた。おかえしとばかりにひじが飛んでくる。凄い勢いだ。間一髪で避け、体勢をたてなおしたときには、もう傀儡は先へ進んでいる。

「ちっ……ぞっとしないな、冴子との乱闘ってのも」

無駄とは知りつつ、諒はまた発火に挑戦する。少しの間でも、傀儡の足をとめることはできるのだ。

ばあん、と炎が巻きおこった。

もはや言葉も口にせず、ぎらりと壮絶な眼差しを彼女はこちらへ返す。

燃えさかる火炎のなかで、傀儡は胸の前に二本の腕を組みあわせた。次の瞬間、炎は体の外

へはじきだされ、あっけなく消えうせた。
「？」
何度目かの仕草だったのだが、そのとき諒はふと目を瞠っていた。
（……待てよ）
さらに傀儡は駆けだしてゆく。
彼女を追い、諒はあることを考えはじめていた。それはかなり無謀な計画ではあったが……。

5 浄火

『牙は、君の身を守るだろう。しかし君は戦わねばならない』

斎伽忍の言葉を、亮介は思い出していた。

あれはどういう意味だったのか。こんな風に戦いのただなかに身をおいても、その言葉が何を暗示しているのかはわからなかった。

「……っ！」

隣を走る冴子が、突然つまずきそうになる。はっ、と直前で亮介がその腕を支えた。

「だっ……大丈夫？」

「平気平気っ」

冴子は明るく言って、ふたたび走りだす。だが彼女が「働きすぎ」ていることが、亮介には感じとれた。これ以上、あまり無理はさせられない。

（これでよかったんだろうか）

亮介は銀杖を右手に持ちなおした。
（本当に、これでよかったんだろうか）
忍の力を借りなくても、それでも皆は戦うことを選ぶと……そう信じたのは、本当に正しかったのだろうか。
一個人の思うとおりになど、大局は動いてくれない。複雑に思惑や誤解や秘密や……嘘が、からみあって。そんなことを少しも知らないまま、自分は……。
『！』
気がついたら〈爪牙〉が跳ねあがるように動いていた。
光剣がはじかれる。亮介は目を瞠った。襲いかかったのは女。
「亮介ちゃんっ」
冴子が叫ぶ。
「あ……！」
さらに〈爪牙〉は敵に隙を与えず走ろうとする。引きずられかけて、亮介は小さく声を漏らしていた。
立ちはだかり、攻めかかってくる女……弥峨。
生身の。
凍りついたように、亮介は動きを失った。

「亮介ちゃん!?」

「先にっ……」

痺れた舌で、亮介は声を投げた。口の中が乾いて、うまく話せなかった。

「先に行って……！」

冴子が何か言いかけた。しかし亮介はもう弥峨に斬りかかってしまっていた。仕方なく、冴子は口をつぐんで駆けだす。

（牙っ……！）

正確には、斬りかかったのは亮介ではなく〈爪牙〉のほうだった。

（この相手は……これは……！）

心でいくら呼びかけても、応答はなかった。

右へ左へ、弥峨の姿は移る。ステップ。斬りこむ。防ぎ、かわし、攻める。きりのない応酬。

鎧武者とは……顔をもたない〈影〉とは違う。

目が合ってしまう。息づかいを聞いてしまう。生身の肌に傷を——。

『コ・ロ・サナ・ケレバ』

記号のように、〈爪牙〉からのメッセージが脳裏にひらめく。

『コロサ・レル』

（でも……！）

どうやって？

コロス？　殺す？　どうやって？

感情の嵐に、亮介は愕然とした。

衝動。

『殺したい』

認識。

『殺さなければ』

――しかし違う、これは……これは自分じゃない。

（こんなこと……！）

さらに激しくなる戦いとは裏腹に、亮介自身からは戦意が削ぎおとされていった。銀杖が輝いて警告を送る。がつ、と光剣がそれと組みあい、動きを止めた。

そのとき。

（この妖者は剣司を愛している）

「え!?」

心へすべりこんできたのは直感。

（この妖者は剣司を愛している）

アイシテイル。
コロサレル。
アイシテイル。
コロサナケレバ。
自分が何を見て何を聞きどう動いているのか、亮介にはわからなくなった。
どうして?
敵で、女で。命があり、心があって。アイシテイル。アイシテイル。アイシテ——。
「亮介っ!」
ついに銀杖をおろしてしまった亮介を、ギリギリで諒が背中から引きよせた。朱雀剣のプラズマが弥峨の動きを牽制した。
すぐに傀儡が来る。例によって〈発火〉で足止めをしておいて、諒は傀儡を追いこしてきたのだ。
「決着はむこうでつけるか……」
呟いて、諒は両腕に亮介を抱えあげた。そのまま全速で走りだす。
「……え?」
亮介が、見えていない瞳を動かした。
「気にするな」

走りながら諒が呼びかけた。
「おまえのせいじゃない。……おまえには向かないんだ、あんなことは……」
「……」
感情が飽和状態に達して、そして〈爪牙〉との交信がうまくいかなくなったらしい。頭の中がめちゃくちゃになっていて、亮介は答えることさえできなかった。
（そんな……！）
じわじわと、絶望が胸へのぼってくる。
それでは……自分は戦えないことになる。このままでは永久に。
守られることはできても……。
（忍さん……！）
約束が、あるのに。ひとつだけ、条件が……。

「来たわよっ！」
現れるなり冴子が怒鳴った。
剣司に手出しを許さず、十九郎は結界を広げて冴子をとりこんだ。
「冴子さん、頼みます！」

左腕に抱えた希沙良を、冴子へまかせる。地面に座りこんで冴子がその身をひきうけた。まだわずかに、希沙良には意識が残っているようだった。反応はできなくとも、状況は漠然と伝わっている。

「……なんだよ……また、おまえかよ……」

冴子の腕に頭を預けて、希沙良がかすかに呟いた。

「悪かったわねえっ」

首筋の傷に手をかざし、冴子が言い返す。その彼女の額にも汗が流れはじめていた。

「ちくしょ……ついてねえ……」

そう言って息をつき、希沙良はふっと静かになる。

全身から力が失われた。痛みが緩和され、それで眠りに入ったらしい。

出血が多すぎるのが気になった。傷は癒せるが、それだけではすぐに動けるようにはならないだろう。

「ちゃんと病院で輸血しなきゃ……」

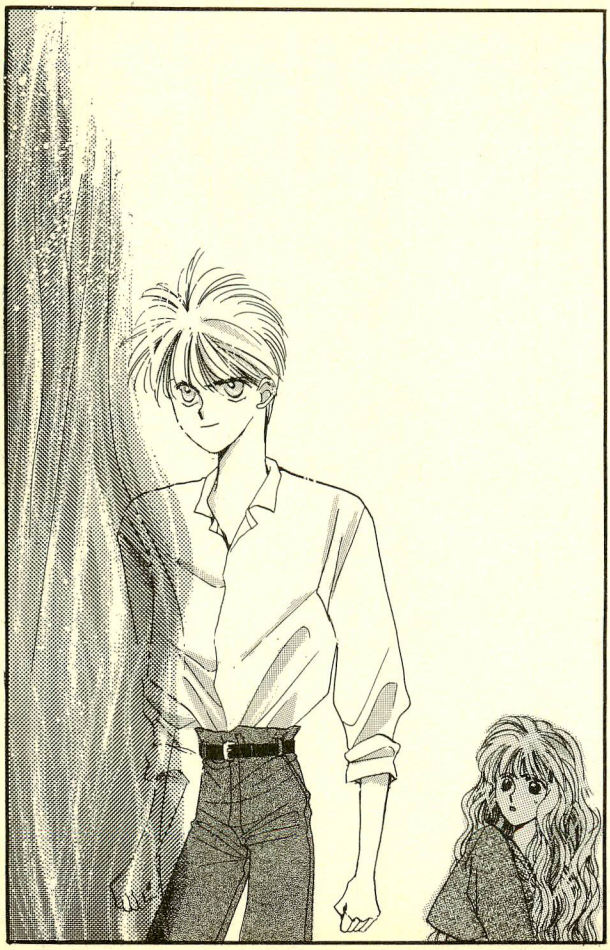
冴子の声に、十九郎が一瞬だけ視線を投げる。が、それ以上のことはできなかった。剣司の結界が容赦なくこちらの結界を破り崩そうとしている。少しでも力負けしたら……。

「里見さん、申し訳ないっ」

諒の声。はっ、と十九郎が反応した。

亮介を抱えたまま、諒が結界の内へころがりこんできた。冴子が目を瞠る。
「亮介ちゃん……!?」
「ちょっとパンクだ。休ませたほうがいい」
虚ろな表情で、亮介は指先も動かさない。意識がすっかり混濁しているのだ。
敵を攻撃できなかった分、銀杖の力は使い手のほうに返り、負担がすべて亮介の感覚へかかった。ショックを受けても無理はない。
「仕方ないさ……なんたって亮介なんだから」
冴子の傍らに亮介を横たえて、諒は痛ましげにそう言った。それから十九郎の隣まで移動する。
「里見さん、しばらく粘れますか」
「……どうする?」
「結界のなかで、傀儡を燃やそうと思って」
そんなことを、さらりと諒が言った。十九郎がわずかに沈黙した。
が、考えている暇はなかった。角を曲がって、傀儡がこの歩道へとたどりつくところだった。
傀儡に結界は効かない……。
「わかった。なんとか結界は守る。その件は任せる」

十九郎が頷いた。諒は立ちあがる。
ことの成りゆきに、剡司がやや眉をひそめた。
弥峨が戻ってくる。
この場の術者全員が、ひとつの防御結界の内に集まり、とじこもったことになる。それを見て、弥峨も解せない顔になった。
「自滅する気でしょうか？」
「――さてな」
結界を破るのを、剡司は一時中断した。あえて手は出さず、見守るかまえだ。
のしかかる圧力が消え、ようやく十九郎が重い苦痛から解放される。しかし気をぬくことはできなかった。
座りこんだまま、冴子が諒の動きを目で追った。
諒は結界のはずれまで足を運び、そこで傀儡を待ちうける。
冴子と同じ顔の傀儡は、するりと結界の壁を通過した。
「いいかげんしつこいね、お嬢さんも」
諒がひとりごちた。
はじめから諒のことは無視して、傀儡は冴子へと向かおうとする。
諒の手元から朱雀剣が消え、轟音とともに傀儡の真下から炎がたちのぼる。――そこまで



は、もう何度も何度もくりかえされたパターンどおりの展開。
うるさげに傀儡は顔をしかめ、またパターンどおりに炎を昇華させようとして……ふと、動きを止めた。
「ちょっ、と……！」
冴子が悲鳴とともに腰を浮かせた。
傀儡が、両眼を大きく見開いた。
まだ傀儡がその腕を持ちあげもしないうちに。
諒が、
燃えさかる炎ごと、
彼女の体を、
しっかりと抱きしめた——。

「い、いい、痛いいっ」
傀儡が苦痛を訴えるのはこれが初めてだった。冴子の声で、それが泣きさけぶ。
「痛い、熱い、いたあい、いたいよおおうっ」
ごうごうと唸る火柱が彼女を呑みこみ、とりもなおさず諒の身を巻きこんだ。もろともに業

火の内へ。

「あついよあついよ放してよおおうっ」

傀儡がもがいた。そのウェーブの髪に頬をうずめるようにして、諒がきつく腕に力をこめる。彼女の背中が折れそうにしなり、その指がなにかを求めて空をさまよった。

「し、死んじゃ、死んじゃううっ、いたいいっ」

狂ったように炎は乱れ、二人の身体を覆いつくす。自ら発した火炎とはいえ、それで諒が何事もなく済むはずもなかった。

「な……なんでそんな馬鹿な……」

目の前に烈火の嵐をのぞみ、冴子がもつれた舌を動かした。熱風が髪をあおった。

「なんでそんな馬鹿なことするのよっ!!　死んだらどうすんのよ!!　やめてよっ、今すぐやめてっ!!」

「悪いけど……」

炎のむこうから、諒の声が届く。

「これしきで死んでたまるか、ってね」

その声は妙に明るい。

「あっ……あんたはヤケになってるだけよっ！　冗談やめてよ、いつもそうやって後先考えないんでしょ、自信だけでなんとかなったら誰も泣かないわよっ!!」

諒はなにか答えたようだったが、火炎がぶあつい壁になって聞こえなかった。
傀儡の悲鳴。
亮介は……それを見ていた。冴子の声も、諒の声も、傀儡の声も聞こえていた。
茫然とひらいた瞳に、炎が映り、光が反射した。
何かを、考えなければならなかった。しかし、胸の内側はすべて石になってしまったようで……。
感情、と呼べるものの一切が、今の亮介からは失われていた。
中和能力を爆発させるための、最も重要な鍵が。
「……諒……？」
どこかひどく遠いところに、意識のかけらが残っている。それが、かろうじて亮介にそんな呟きを許した。——が、それだけだった。
己の気持ちを高めるすべも、誰かの想いを受けとめる機能も、今は凍結されて。混乱だけが。なにもかも。
十九郎が、亮介へ目をやった。
亮介から『感情』を奪ったら——中和能力は発現しない。
これまでの経験から、そんなメカニズムを十九郎は信じる気になっていた。今の亮介に、中和能力者としての役割を期待することはできない。おそらく……。

（感情が麻痺してしまったら……あとは本能くらいしか）

結界を支え、諒が起こした炎を見守り、十九郎は唇を噛みしめる。

今、こうして傀儡を燃やして、それが成功したところで……。

敵はまだ二人とも無傷、そしてこちらは全員がもう限界だ。これ以上戦えない。切り札も使えない。……明らかに、これは敗北だった。

こうなったら考えるべきことは、いかに勝つか、ではなく、どう切りぬけるか、だ。

（――本能くらいしか）

一瞬、十九郎がかすかに息を呑む。

炎はさらに激しさを増していた。高熱は風を生みだす。

影しか見えない。内側で諒と傀儡がどうなっているのか、外からはうかがいようがなかった。

もう叫ぶこともできずに冴子はその火柱を見つめていた。魅入られたように。

そして、不意に――動く。

「おいっ……」

立ちあがろうとした冴子の腕を、すかさず摑んだ手があった。

「なんだ、おまえ……どこ行くつもりだよ」

厳しい目を上げて、希沙良が尋ねる。地に倒れたまま、頭だけを持ちあげて。

「だってっ……！」
「だってじゃねえっ。いいから女は座って待ってろ、余計なこと考えるなっ、阿呆っ！」
苦しげに希沙良が声を押し出した。冴子は絶句する。
「よーし、きーさん見直したぜ」
炎の壁のむこうから、諒の声が届いた。
「百年遅いっ！」
希沙良が言い返す。
やがて——炎が灼熱した。色が変わる。紅蓮から白光へ。
真紅の炎獄が……白銀の浄火へ。
「冴子っ……！」
両腕に華奢な身体を抱きしめて、諒が名を呼んだ。
傀儡が動きを止める。
それを包みこみ——。
「……ごめんっ！　……」
爆発が、起きた。腕のなかの素肌が失われ、すべてが崩れ去った。

気がついたら、目の前いっぱいにウェーブの髪がひろがっていた。
一度まばたきをしてから、諒は事態を了解する。
傷だらけになった身体を、冴子が治している最中だった。
「……本物だよね、こっちは……」
思わず確認したとたん、キッ、とすさまじい視線が返った。
「話しかけないでよっ！　人の苦労を考えなさいよ、こんな黒コゲ寸前になっちゃってあたし以外の誰に治せるのよ、今ものすごく疲れてんのにこんなことまでやらされて冗談じゃないわよっ!!」
「そんなムタイな……」
呟きながら、諒は視線を流す。
状況は、まだ何も変わっていない。結界の外には剣司と弥峨。傀儡ひとり片づけた程度では、とても喜んではいられなかった。
「黒コゲになるようなヘマはしませんよ、諒ちゃんは……。ただ、あっちの冴子さんがやたら腕力強くてだね……」
「言い訳してんじゃないわよっ」
軽口にまかせて起きあがろうとしたが、頭がぐらついてどうしようもない。舌打ちをしながら、それでも諒はなんとか座りなおすところまでは成功した。

希沙良も片膝立ちになり、剡司たちのほうへ目を向けている。
「なるほど……」
その時になって、剡司が呟いた。
「なかなか面白いものを見せていただいたが……」
本当に、ただ楽しんで見物していたことが、その語調には明らかだった。手出ししようと思えばできた、と言わんばかりだ。
「しかしだ、もう策はあるまい。このままいつまでも結界ごしに睨みあいを続けるなど、とても私の趣味ではないのだがな。どうするつもりだ？」
「そっちの趣味なんざ知るかよ」
希沙良が苦い顔で言い返す。軽く笑って、剡司が片腕を振りあげた。
「あいにく、だったな」
その瞬間、十九郎は反射的に結界を強化していた。——した、はずだった。
がん、と衝撃があり、強烈な妖気がたたきつけられた。そのほとんどは防がれたが、鋭い感覚がこの時ばかりは仇となった。
「おいっ！」
叫んだのは希沙良だった。
結界がついに破れた。流れこんだ毒素を一身にうけて、十九郎が倒れる。

剋司の……〈妖火〉が回復していた。それは慄然とさせられる事実だった。
もはや戦いようがない。
結界は失われ、敵には伝家の宝刀が。
「……上等だ」
呟いて、諒が身を起こそうとする。
「ほう、私の相手ができるのか？　そのざまで」
「やかましいっ」
どう見てもそれは無理な試みだった。冴子が口をひらきかけた時——。
一度は倒れた十九郎が、隙をつくように動いた。地面を蹴り、数歩さがる。
「待て！」
蒼白な顔を上げ、十九郎が呼んだ。
「……何だ？　それは」
剋司は眉をしかめ、そう尋ねた。
十九郎は銀杖をつかんでいた。そして——その杖の向く先は。
「……十九郎」
愕然として、希沙良が声を漏らした。
諒も冴子も、何もできずにそれを見つめる。

意志のない亮介の瞳が、まっすぐに十九郎を見上げていた。
――銀杖は、横たわる亮介の喉元へと突きつけられていたのだ。
己の感情のすべてを抹殺し、十九郎が口をひらく。
「彼は中和能力者だ。中和、の意味はわかると思うが」
「……」
「おまえたちはここで手を引け。さもなくば」
そこで、一瞬だけ十九郎は沈黙せざるをえなかった。
「聞いてやる、続けろ」
刻司が促す。彼は不機嫌になりはじめていた。
敵の姿以外のものを、十九郎は意識から排除した。それはどうしても必要なことだった。
決然と、答える。
「彼を殺す。自己防衛本能が中和能力を暴走させるはずだ。その結果どうなるか、保証はしない。――これは忠告だ」

6　亀裂

沈黙があった。それは、絶句、と呼ぶべきものだったのかもしれない。
狂言、にしてもあまりに……。
「くっ……くっくっくっ……」
真っ先に笑いだしたのは弥峨だった。
「ぶざまな……！　そうでもせねば命乞いもままならぬと……！」
ひとしきり哄笑がつづく。逆に剡司はひどく白けた様子で舌打ちをした。
「そう笑うな、弥峨。……なんとも興醒めだな」
十九郎は無言を保っていた。その手の反応は、いくらでも予測できた。
自分ひとりの命を守るためであれば、こんな真似は死んでもできない。しかし今はどれほどの屈辱を受けようと、こうする以外になかったのだ。
ただ……亮介の視線が離れない。そらせない。反応しない目で、くいいるように。それだけ

が……つらかった。

「だが万一それが中和者で、さらに万一暴走がおきたところで、共倒れは避けられぬ。敵味方すべてを巻きこむことになろうが」

「覚悟の上」

弥峨の問いに、十九郎は短く答える。ますます弥峨が嘲りの色を深めた。

「これは……！　伽羅王もつくづく配下に恵まれたものよ！　もはや声も出ぬわ！」

「そのあたりにしておけ、弥峨。もう十分だ」

剋司は、もうすっかりこの戦いに興味を失っていた。

得るべきものは得られた。九那妃についても、伽羅王についても。

「私は伽羅王を買いかぶっていたかもしれんな……」

そうひとりごちて、あっさりと十九郎たちに背を向ける。

「今宵はこれにて、幕としよう。せいぜい、その中和者とやらを大切にするがいい。――負けるたびに必要となろうからな」

最後の一言は、痛烈な皮肉だった。十九郎が杖を握る指に力をこめた。

嘲笑を消しもせず、弥峨が剋司のあとに続いた。

――それですべてが終わったかに見えた。

「!?」

はっ、と弥峨が立ち止まった。
「若っ……！」
悲鳴とともにその姿は真っ白い光に呑みこまれた。あっという間だった。
閃光の塊が、一方向から弥峨をめがけて走ったのだ。直撃を受けて彼女は忽ちのうちに――
消滅した。
「弥峨っ！」
剣司が叫んだ。すでに彼女の存在はどこにもなかった。
ことん、と路上に緑の石が落ちた。それだけだった。
その場にいた全員が、愕然と見ることしかできなかった。あってはならぬことだった。
雷撃の余波をうけたかたちで、亮介もようやく完全な意識をとりもどしていた。外界と内面の交通が回復する。何が進行しているのか心がとらえ、そして。
「あ……！」
地面から頭を起こし、亮介は声を漏らした。
（そんな）
そんなはずが――。
凄然とした気を身にまとわせて、彼が歩みよってくるところだった。
氷の美貌に、険しすぎる眼差し。殺気を抑えもせず。激しい嵐が、そこには確かに内在して

いた。怒りや憎しみといった『感情』ではなく、もっと根源的な。
「挨拶代わりだ」
足を止め、斎伽忍はそれだけ言った。
ゆっくりと首をめぐらせ、剣司は彼を見返った。
信じがたい様子で、しばらく剣司は無言のままだった。
「……伽羅王か」
じわじわと——剣司の内に熱が高まる。
「伽羅王か!!」
「炎将も地に陥ちたな」
たたきつけられた声には気もとめず、斎伽忍は冷ややかに呟いた。
「九那妃の宿体を誤り、何が三将か」
「……おのれ」
それではおまえは一部始終を眺めていたというのか。そんな問いかけは、怒りに阻まれて言葉にならない。
「惑わされたとて無理はない。しかしあまりに不用意だったな」
忍が言う。それは冴子のことを示していた。
背後では、五人の術者がそれぞれに忍のことを見つめている。それぞれの思いで。だが忍は

彼らを一顧だにしなかった。
「では、この女は何だ。囮だったとでも言うつもりか」
「そうではない」
忍は一度だけ首を横に振った。
「この娘は、我が妻となるべき者。手を出したことが、貴様の命運を定めたというわけだ」
「――」
希沙良が、ぎょっとして冴子へと目をやった。
座りこんだまま、冴子は茫然と忍の言葉を聞いていた。
ぎりぎりと奥歯を噛みしめ、剣司が忍のことを見据える。
「……そういうことか」
忍は答えない。
「さぞや……さぞや楽しかったであろうな、伽羅王よ……。我らは、自ら仕掛けたつもりで、知らず貴様の駒ともども、貴様の掌中に遊ばされていたのだな」
「そう考えるのもまた自由だな」
ふっ、と忍は微笑したようだった。
「彼らには、まだ実戦の経験が少なすぎる。今回のことは、いい機会だったのでね……」
「恥を知れ、外道が！」

刻司が声を荒らげた。忍はとりあわず、別のことを尋ねる。
「ここで戦端をひらく気か？　私はそれでもかまわないが」
「……」
今や、孤立無援で追いつめられているのは刻司のほうだった。
伽羅王ひとりが相手であれば、なんとか互角に戦えるかもしれない。だが……。
「やむをえぬ」
一言、そう吐き出し、刻司はわずかに身を沈めたように見えた。
次の瞬間、刻司の体は宙へ跳ねあがった。一陣の風のごとく、その姿は闇へまぎれ消え去った。
あっけないほどの退場だった。恨みごとひとつ言わず刻司がその場を逃れたのは、すでに彼の内で怒りが確かな決意へと変質していたからだ。
――殺してやる……必ず殺してやる。この手で殺してやる。
そのためにも……九那妃を。

地面に転がる石を――『玉』を、忍の白い指が拾いあげる。
一枚の絵を見ているように、その光景はあまりに亮介から遠かった。

完璧すぎて。どこにも、乱れも隙もなく。

これが、確かに本来あるべき斎伽忍の姿だった。確かにそうだった。ずっと待ちのぞんでいたはずの。なのに……。

誰も、口をひらかなかった。

十九郎が、銀杖を地面へ置いた。

亮介は目を上げた。しかし十九郎はすでに立ちあがり、決して亮介を見ようとはしなかった。

「……実戦の経験、ですか」

重い沈黙を、十九郎が破る。

「演習……という意味ですか。今夜のことは全部……」

「言ったとおりだ」

あっさりと忍が答えた。

「正直なところ、失望させられたよ」

表情も変えず。

嘘だ。亮介にはわかっていた。それは嘘だ。すべてを隠すためには、忍はそう言うしかなくて。

彼があくまでも斎伽忍であるためには。

だがもう手遅れだった。わかっていても、亮介には何もできなかった。言ってはならなかった。どうしても……何があっても。

そして、亀裂は修復不可能な域まで広がってしまう。

「……我々は、あなたの道具ではありません」

低く、十九郎がそう言った。

「しかし庇護は受けるというわけか」

忍が答える。——瞬間、両者をつなぐ糸は完全に断たれたも同じだった。

正面から忍を見つめたまま、十九郎はしばらく無言だった。

「あなたには」

発された声は、ひどく静かなものだった。

「あなたには、何もわからない……！」

それきり十九郎は踵を返した。忍は何も言わなかった。

「立てるか？」

十九郎が希沙良に腕を貸す。

肩につかまりながら、希沙良が気づかわしげに十九郎を見た。

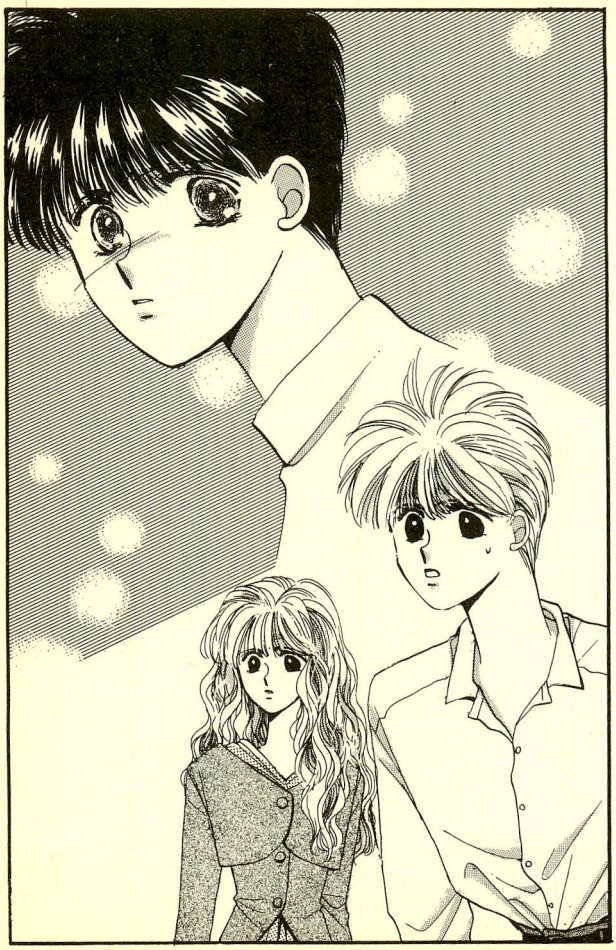
「家まで歩けるな。それから病院に連れていくから」

「おい……いいのかよ」

言ったと思ったら、もう十九郎はその場を離れはじめている。後を気にして、希沙良が小声で問いかけた。
「いいんだ」
顔をそむけるようにして、十九郎が答えた。
「……もう、いいんだ……」

「諒」
二人が去っても、忍には何の変化もなかった。その視線はまず諒へ向けられた。
「広島へ戻れ。しばらく、おまえには仕事を与えない」
「……それは命令か？」
諒が確認した。
「命令だ」
理由も説明も、何もなかった。一言だけそう答えて、すぐに忍は冴子へと向きなおった。
「冴子には謹慎を命じる。いつまでも、七瀬の家から逃れられると思うのは間違いだ。帰るべき所へ帰り、なすべきことをなせ。わかるな？」
厳しい語調だった。冴子は声もなく、それを聞いた。

「亮介」
そして忍は三人目の名を呼ぶ。
「僕の〈使〉を返してもらおうか」
ぎごちなく亮介が立ち上がった。銀杖を取り、忍へと歩みよる。
さしのべられた手に、亮介は〈爪牙〉を引き渡した。忍の手中へ戻ったとたんに杖は形を失い、小さな水晶片に変わる。
「御苦労だった」
それが、亮介への言葉だった。
はっ、と諒が亮介を見た。まさか、と。
まさか忍は。
「亮介……」
諒に呼ばれて、亮介がふりむいた。
その傍らを——ふわりと忍が通りすぎていった。
すべてを終わらせ、忍はあの部屋へひとり戻るのだ。一定の歩調が遠ざかってゆくのを亮介は聞いた。
「亮介」
もう一度、諒が呼びかけた。



「亮介、おまえ、忍と……」
「……」
二人だけで何を共有しているのか、と尋ねられることはわかっていた。
諒と冴子を前にして、亮介は動けずにいた。まっすぐに彼らを見ることはできなかった。
裏切ってしまう……。
言えないのだ。それが約束。封印を解くために、忍がひとつだけ課した条件。
たとえそれで孤立したとしても。
「亮介、俺の……」
「ごめん……！」
それしか言えなかった。そのまま亮介は身をひるがえした。
「亮介！」
諒の声が背中へ届いた。立ち止まらずに亮介は走りつづけた。
これが現実。誰も幸せになんかならない。誰ひとり。誰ひとりとして。
もう、泣くこともできない気がする。
夜道を走りとおして……亮介はふと、足を止めた。
すぐ先で、斎伽忍が待っていた。そこへ亮介が追いつくことを、はじめから知っていたように。

ゆっくりと、亮介は彼の隣に並んだ。
何も言わず、忍は再び歩きだす。
心なしか彼を包む空気はやわらかく変化して、それが少しだけ亮介を安心させた。彼の内側で、バランスは完全に回復されたのだ。そう、信じられた。
長いこと、どちらも口を開かなかった。
「具合、よくなったんですね」
一度だけ、亮介が語りかけた。
「よかったです……」
「……ああ」
目を伏せて、忍は微笑した。
遅かった、とは、亮介は考えないのだ。
「そうだな……」

「……どうするの？」
冴子が問いかけた。
「さあね……」

ぐしゃり、と諒が前髪をかきあげる。
「そう簡単に広島になんぞ帰れるかという気はするんだがね……少し、様子を見るしかないよね、これは」
そう呟き、そして諒は冴子に目をやった。
「……実家、すぐに帰るのか？　それとも一度、麻布に戻るとか」
「あ……」
冴子のほうが言いよどんだ。諒が今、何を考えているのかわからなかった。
「……あのね……い、今まで……ちゃんと言わないで、きたけど……」
「うん、お兄様の言うことはとりあえず聞きなさい。で、油断させて懐柔するって手もあるし」
さらりと諒が言う。冴子が絶句した。
ポケットに両手を突っこみ、諒はそっと冴子の瞳をのぞきこむ。
「知ってたよ……」
その声は、かすかに笑みを含んで響いた。
「長いつきあいでしょ、わかりますよ、やはり。お兄様の件も、もひとつの件も……」
「……し、知ってて……」
「だって冴子さんが隠してたからさー、知ってちゃまずいのかなーとか思ってさー」

「だ、だからってねえっ」
しれっとして言ってのける諒に、冴子が声をはりあげた。
「嘘。逃げてただけです、俺も」
表情を改めて、諒が視線を下げた。
「ずっと……ずいぶん長いこと、逃げてただけです。うん」
「……」
「でも俺はね、ちょっと違う意味で忍の言葉に賛成したくてね……確かにいつまでも『七瀬』から逃げられやしないんだよ、誰も」
誰も——それは、忍自身も。
「例えばここで、俺と冴子が手に手をとって逃げてもどうにもならんだろう。だから今は、帰りなさいと言うけどね……」
諒はそこで言葉を切る。
方法を、捜さなければならない。
忍の態度には謎が多すぎる。なんとかそこに切りこむすべを。
亮介の考えは、なんとなくわかる気がしていた。どんな事情があるかはさておいても。……きっと、亮介を側に置いておけるうちは、忍はまだ大丈夫だ。
まだ、大丈夫だ。

「そうね」
冴子が口を開いた。
「ちょうどいい機会だから、実家の内情でも探ってくるわよ。それで、また……」
また……。
そこから先は言わずに、くるりと冴子は背を向ける。
「だからとにかく麻布に行くからっ」
「あ、うん」
「あ、うん、じゃないでしょっ。送りなさいよ、ちゃんとっ！　気がきかない奴よね、ほんとにっ」
強引に決めつけて、ずかずかと冴子の背中が進んでゆく。
苦笑して、諒はその後について歩きだした。
「……そこで泣かないでよ、冴子さん……」
「だっ、誰が泣いてるのよっ、冗談じゃないわよっ！」
あんまり近づかないでよねっ、と念を押して、冴子は大通りへ向かった。言われたとおり後ろにさがり、けれどいつでも手をのばせる距離を保って、諒は彼女に続いて足を運んだ……。

終章　明日へ

真夜中、だった。

十一時は、かるくまわっていたはずだ。――亜衣の家にたどりついたのは。

「崎谷君……！」

サンダルをつっかけて、亜衣が玄関から走り出てきた。

「どうしたの？　こんな所にいて大丈夫なの？」

「うん……」

門の前で、亮介は頷いてみせる。

「もう、終わったんだ……だから、心配ない」

「本当に!?　よかった……！」

何の迷いもなく、亜衣が安堵の息をついた。それがひどく眩しく見えて、亮介は黙ることしかできなかった。

「ごめんね……こんな時間に」
目を伏せて、亮介がそう言った。
亜衣がふと、その表情をくもらせる。
「……何か、あったの？」
亮介がますます黙りこんだ。亜衣はサンダルを鳴らし、門の外へ出る。
「誰か……また、怪我なんか……」
「あ、いや、そういうんじゃないんだ。……みんな、大丈夫」
亮介はかぶりを振ってそう答えたが、最後の一語で声をとぎらせてしまった。
「ね……ちょっと、座って。崎谷君、顔色が良くないから……」
亜衣が手をのばし、亮介の腕をつかんで門柱の前に導いた。
門柱に背中を預けて、並んでしゃがみこむ。
「みんな、大丈夫なんだけど……」
亮介が、もう一度口を開いた。
「だけど……バラバラなんだ。俺がうまく……うまくできなくて……」
「……どうして？」
「理由なんて……」
尋ねた亜衣に、亮介はたしかな答えを返さない。

問いつめることはせず、亜衣はしばらく亮介の横顔を見つめていた。
膝を抱えて、亮介はずっと動かなかった。秘密が大きすぎて、何を言えば嘘にならずにすむのか……わからなくて。
「ただ……」
ぽつりと、亮介が呟いた。
「ただ、俺は、誰も悲しまないで……それで、誰もが幸せになれるなんて……そんなことを信じたかっただけなんだ。だけど……」
だけど、現実は。
容赦なく立ちはだかる現実は。
「……駄目なんだ、もう……どうすればいいのかわからない……！」
抱えた膝に、亮介は顔を伏せてしまう。
隣に座る亜衣は、それを聞いて少しの間、口をつぐんだ。
何が起きたのか知るすべはなかったが……。
「ねえ、崎谷君……」
亜衣が静かに語りかける。
「あたしは、体操なんかやってて、それでいつも思うけど……あれって、本人がどんなに頑張っても、点数で、結果でしか評価されなくて……いくら必死にやっても駄目なことってのがあ

って……」

「……」

「才能の……つまり、生まれつきの違いなんてのも、本当にあるし、努力だけじゃどうしても間に合わない時もあるし……運も、あるし……思いどおりにいかないことは何度もあるけど……。

亮介の肩に頭をのせて、亜衣が言葉を続けた。

「でも、崎谷君、それでも信じるから、そのために『信じる』って言葉があるんじゃないのかな。ムリなことがあるって、知ってて、それでも本当に信じられたら、それが本当の『信じる』じゃないのかな。……うまく言えないけど……」

＊　＊　＊

斎伽忍は部屋のブラインドを上げた。夜空は晴れわたって、この土地にはめずらしいほど星がよく見える。

ワイングラスに、彼は緑色のかけらを落とす。軽い音が響いた。

誰のための生命か。

それでも、こうして営みはつづけられてゆくのだ。

一言のつぶやきとともに、グラスの内には変化が起きた。
『玉』はかたちを失い、ゆらりと……冷たい炎となる。
それはまぎれもなく燃えているのだが、熱はなかった。蒼い光がグラスにひらめき、揺らいだ。
時計の針が、あとわずかで重なる。それを見つめ、彼はグラスを持ちあげる。
その唇に、グラスのふちが触れて。
かちり、と時計が鳴った。長針と短針が共にひとつの数字を指し示した瞬間だった。
炎を飲みほし、彼はそのままグラスを足元へ落下させた。透明な破片が床に広がった。
それは五月二日、深夜零時。
斎伽忍は、二十歳になっていた……。

——おわり——

あとがき

後編であります。

まずは、とにかく読んでみてくださいとしか言えない。お待ちかねの後編です。最後まで読んでいただけましたか？　よし、んじゃあとがきだ。

結局、前編からしっかり三ヵ月あいてるあたりがいかにも若木ですね……。四月末に前編が出て以来、毎日のように「一刻も早く後編出してっ!!」という、ものすごい量のお手紙が届いたんですが、その大半の人たちが「七月には出るはずだっ」と信じていたりしたんで、五月になってもまだ原稿書いてた私は（だーから予定って……いや、私が悪いんですよ、ええ）ひたすら遠い空のむこうに謝ってました。心の底から、ごめんなさい、です。

しかし前回のあとがきのビビりようを見てもわかるとおり、私はマジで「バカーッ、お前なんか小説屋やめちまえっ」くらいの反応がきてもおかしくないと思ってたんですが、とんでもなかった。頑張るのよ、とか、無理して倒れちゃ駄目よ、とか、また『十字架』状態になって落ちこんでませんか、とか、すごくたくさんの人に励ましてもらって、心配してもらって、こ

れで書かなかったら若木未生じゃないぞ、と思ってしまうくらい嬉しかったです。

人間、何事も卑屈になってはいけませんね。（書いたぞ、だから。ふっ。……って、そこで尊大になってどうする……）

こうして無事に後編を出せたのは、ひとえに皆さんの励ましのおかげです。ありがとうございます。

なにはともあれ『炎獄のディアーナ』はこれで完結しまして、もうそれで書いてる間の苦労なんてどうでもよくなってしまった。楽しかったな。どんなにのたうちまわって書いても、終わっちゃうと、また性懲りもなく次の話を考える。そういうもんですね。

オーラバスターも、これでようやく六冊目です。物語は佳境に入ってきた感じですが、ここからが本番というか、実はぜんぜん序盤というか、らしいんで、これからも末永くおつきあいください。最近は、私自身にもこの先のことがわからなくなりつつある。

前編を書きだしたあたりで悪い予感はしてたんですが……どうやら、この話は勝手に走りはじめている。もちろん作者としては事前にストーリーを考えて、それから書くんだけど、そんな作者の思惑を大幅に追いこして作品は進んでいく。つまり自分で書いてて、次に何が起こるかまったく予測がつかないんですね。……これは怖い。

だから、大反響を招いた前編のラストシーンにしても、『よーし、極道一直線だっ！』と決

めた時点では、実は「彼」はああなる予定じゃなかった！　とかいう裏話がある。いやー、怖い怖い。書きあがってからびっくりして、

「どーすんだ、こんなことになっちゃって……。とにかく先にあとがき書いちゃえ」

などと、思いっきし責任を編集者に押しつけて逃げたら、

「編集はあとがき書けないんですよっ」

と嘆かれてしまった。悪いことしたなあ。

諸君、真相はそうだったのだ。本当はも少し穏やかに切る予定だったんです。どーせ私が悪いんだよー。でも私のせいじゃないもん。（すっかり開き直っている若木）

こうなってくると、かつて冗談でも『また誰々をいじめてやろう』なんて言ってた頃が懐かしい。今や、作者ごときが「彼ら」に手出しできるはずがない。あの人たちは、もう誰の助けも借りずに自分の意志で動いて、自分の運命を選択している。「人間」なら当然だけどさ。

あとは書くだけだ。それだけです。お手紙まってます。

ところで前回と今回、登場人物紹介が少々グレードアップしていたのに、皆さん気がついてくれましたかっ？　お手紙でよく訊かれることを、できるだけ盛りこんでみたんですが。

忍さんの誕生日が二つあるのは何故か、という質問がたくさん来てしまった。答えは本文中にあったとおりです。今回、その誕生日がらみで本文に日付と曜日がバシバシ出てますが、だ

からってカレンダーで調べて「××年の話だわ」なんて思わないように！　いいですねっ。

ディアーナは、ローマ神話における月の女神です。ギリシア神話のアルテミスと同じです。昔から私は、アルテミスには「妹」というイメージがあって……でも冴子とアルテミスって似合うけど、お兄様のほうは全然違いますね。太陽神アポロンだもんね。

それから、銀杖ことく爪牙〉、この名前には「敵を防ぎ、君主を助け守る武臣」とか、仲間とか家来とか、とにかくそういう意味があるそうです。書いたあとで、辞書ひいてびっくりした。さすがは忍様。

忍といえば、『秘密の歌姫　闇の騎士』は文庫に収録されないのか、というお手紙がこのごろ多い。どこかでページがあいたら入れよう、とは考えていますが、いつになるかは不明です。ただ、私自身はこの話のことすっかり忘れてて、言われて読み返してみたらすごかった。忍さんが……タキシード着てワルツ踊るし（これで読みたくなるか、逆に読みたくなくなるか私は知らない）。とにかく若い。彼が十九になったばかりの頃の話らしいんだけど。

でも斎伽忍って、意外と、しれっとしてワルツ踊っちゃえる性格の人なのかもしれない。実はね……。

ということで次回のメインは斎伽忍しかあるまい。凄いことになりそうだな。

しまった、もうあとがきのページがない。（この本ってば、分厚いもんだから……）

そんなこんなで早く続きも書きたいところですが、某スーパーヒーローが待ってますんで、やはり次はアレでしょう。うん。

それから、なんと雑誌「Ｃｏｂａｌｔ」で連載を始めたんで、こっちもよろしくっ。『ＸＡＺＳＡ』という話です。一応、最初の連載なんで短めにおさめる予定なんですが。

さらに私は現在、コバルト文庫で出すための新しい話を準備中だったりする。若木未生らしい「ファンタジー」（でもまた『もどき』かも……）に挑戦したい。どうなることでしょうか。

できるだけ近いうちに、またどれかの物語で、お会いできると嬉しいです。

それでは、今回はこのへんで。

若木未生

わかぎ・みお
1968年12月2日、埼玉県生まれ。射手座、A型。現在、早稲田大学文学部在学中。1989年4月『AGE』で、第13回コバルト・ノベル大賞佳作入選。好きなものはマンガと音楽。週刊少年ジャンプをこよなく愛する。苦手なものは料理。コバルト文庫に『天使はうまく踊れない』『セイレーンの聖母』『十字架の少女』『迷える羊に愛の手を』『炎獄のディアーナ(前編)』がある。



炎獄のディアーナ（後編）

COBALT-SERIES

1991年8月10日　第1刷発行
1993年7月15日　第9刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　若木未生
発行者　若菜正
発行所　株式会社集英社
〒101-50
東京都千代田区一ツ橋2－5－10
(3230)6268(編集)
電話　東京(3230)6393(販売)
(3230)6080(制作)

印刷所　株式会社美松堂印刷所
中央精版印刷株式会社

© MIO WAKAGI 1991
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本はご面倒でも小社制作部宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN4-08-611558-1 C0193

コバルト文庫
〈好評発売中〉



天使はうまく踊れない

高一生の亮介には、見えないはずのものが見える厄介な力がある。ところが、最近奇妙な奴らが出現して…。

セイレーンの聖母

十九郎が狙われた!? とてつもない妖力をもつ女を敵にまわして、総帥の斎伽忍はある作戦を。

十字架の少女

夏休み、亮介たちは諒の妹・彩を迎えて、軽井沢で合宿をはじめた。悲惨な過去をもつ彼女は。

迷える羊に愛の手を

転校先での諒の生活、妖の者に闘いを挑む希沙良と十九郎…オムニバス形式でおくる初の番外編。

炎獄のディアーナ〈前編〉

女の子を狙う髪切り事件が続発した。事件に妖の者の気配を感じた諒は、忍の命令で再び亮介の学校へ。

術者VS妖者！
いま大人気の
アクション・
ファンタジー。

若木未生の本

「ハイスクール・オーラバスター」



コバルト ノベル大賞 募集中！

『COBALT』編集部では、「コバルト・ノベル大賞」を募集しています。この賞は、才能ある作家志望のかたを、新人作家として世に送り出すためばかりではなく、小説を書くことの楽しさ、創作することの喜びを広く若いかたたちにも味わっていただきたい、という願いもこめて設置されたものです。

ロマンの新しい時代を切りひらく、あなたのフレッシュな力作100枚前後（400字詰原稿用紙95枚以上105枚以下）を、お待ちしております。

〈入選作〉 **正賞の盾と副賞100万円**

〈佳　作〉 **正賞の盾と副賞 50万円**

応募要項は隔月刊「COBALT」に毎号掲載されています。

恋を夢みる乙女のための小説誌！

［コバルト］

Cobalt

1月、3月、5月、
7月、9月、11月の
18日発売！

隔月刊ですので、お求めになりにくいこともあります。あらかじめ書店にご予約をおすすめします。

●「コバルト短編小説新人賞」「ショート・ショート」を毎号募集しています。